
ルーテン国英雄伝 ブラックホールの謎

ちょこみるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーテン国英雄伝 ブラックボールの謎

【Zコード】

Z9117D

【作者名】

ちょこみるく

【あらすじ】

22の島からなるルーテン国。さまざまな部族の集まりによって繁栄していたが、エカルイア家の陰謀により国は突如乱れ始めた。国の運命を託されたのは1人のひ弱な少年ウイル。頼りないウイルだが仲間と出会い旅をしていくうちに次第に成長していく。スリル、笑い、切なさ、恋愛ありの長編冒険ファンタジー。

ルーテン国英雄伝 ブラック・ボールの謎

22の島からなるルーテン国。この国は、さまざまな民族によつて成り立つていた。それぞれの民族たちは、自分たちの得意な分野で社会の役割をそれぞれ担つている。この英雄伝は、他の多くの英雄伝と同じように静かな暮らしの中にある、普通の少年から始まる。

「トム、僕が勝つたら許可してくれるよね？」

ウイルは剣を顔の前に据えながら言った。

さわやかな朝の風がウイルの焦げ茶色の髪をなびかせた。

「何度も言わなくとも、分かつてゐる。そういうのは、勝つ自信がある時に言うもんだぞ」

「……」

ウイルは真っ向からトムを睨みつけた。トムはウイルよりも頭一個分高い。おまけに体もがつしりしていて、やせっぽちのウイルとは対照的だ。どこの誰が見ても、勝敗が一目で分かる構図になつていた。

それでも、ウイルは恐れなかつた。

前を見据え、腕を高く振り上げる。

剣の柄が太陽に照らされきらりと光つた。

行くぞ！

ウイルは勢いよくトムの方に向つて走り出した。

だんだんとトムが迫つてくる。

トムは余裕の表情を浮かべたまま、微動だにしない。

あと2、3歩。

ウィルは剣を腕にぐつと力を入れ、めいにぱい振り下ろした。金属と金属のぶつかる音が、静かな山奥に響き渡る。

剣を合わせたまま、ウィルはトムを睨んだ。

相変わらず余裕の顔だ。ぶつかった衝撃で、剣を握る手に痛みが走つたが、歯を食いしばり堪えた。

トムは、ライラック色の瞳を見つめ、ふと笑った。

「力…強くなつたな」

褒めの言葉に、ウィルは素直に喜んでしまつ。

「でも、まだまだ」

トムはそう言つと、戦意がやや落ちたウィルを後ろに跳ね飛ばした。

「うわー！」

ウィルはその勢いに乗つて、後ろに仰向けに倒れそつこなつた。が、何とか踏み留まることができた。

今まで、ここでウィルが倒れ試合が終わっていた。だが、今日は、今日こそは違う。

ウィルは浮かれた。

やつた！堪えることができた！

だが。

態勢をしつかりと整え、トムを見た後肩を落とした。

「ゴホッ。ゴホッ」

トムは咳をしていた。つまり咳のために、ウィルを跳ね飛ばす力が最後に緩んだのは一目瞭然だつた。

でも、待てよ。

ウィルは思った。

どんな理由があれ、勝ちさえすれば許可してもうれる。

トムはまだ激しく咳き込んでいる。

チャンス！

ウイルは足を踏み込んだ。

そしてトムの剣をめがけて、飛び込む。

ほんの数秒のことだつた。

剣を打ち付ける寸前、トムの剣がぱつと視界から消えた。

そして気づいた時には、ウイルは生い茂つた草の上に仰向けに倒れていた。

剣はウイルの手を離れ、遠くに飛ばされていた。

「甘いな」

トムはぴしゃりと言い放つた。

「それにしても、毎朝毎朝懲りないな、お前は」
ウイルの近くに歩いてくるのが、草を踏む足音で分かつた。
「さあ、早くあきらめてフランクじいの所に行つてこい！」

「……」

ウイルは、ぼんやりと透き通つた青空を眺めた。
白い雲がゆつくりと動いている。

また負けた。

ウイルが剣の達人トムを恐れない理由。
いつも負けているからだ。

数えきれないくらい負けている。

勝つたことは、一度もない。

今日は、勝つチャンスだったのに。

ウイルはぼんやりと思つた。

そこは、いろいろな種類の鉢植えの植物がある部屋だった。
フラスコや顕微鏡など実験道具もたくさん置いてある。
見るからに難しそうな学術書も本棚に入りきらないくらいある。

頬杖をつき、ぼんやりとしているウイルの目の前で、一人の小柄な老人が懸命に何かを話している。

だが一言もウイルの耳を通過することはない。
これは毎日見られる光景だつた。

ウイルはこの老人、フランクじいに午前中、薬の調合の仕方を習つてゐる。フランクじいはウイル達から100メートル程離れたところに住んでいた。

この山奥にはフランクじい、トム、そしてウイル。
この三人しか住んでいなかつた。

フランクじいの授業は、恐ろしくつまらない。

毎日毎日椅子におとなしく椅子に座つてゐるだけでも、ウイルは十分に自分を褒めたかった。この授業で「忍耐」ということを、ウイルは一番に学んだ。

「いいですか、ウイル殿。ギザギザが不揃いなのがハリハリ草で、揃つてゐるのがオート草だ。これをまちがえると大変なことになりますぞ。それと」

ウイルはこれみよがしに大きなあくびをした。

がたがたのテーブルにつき、向かい合つてゐる老人はウイルの無礼な態度を気にもとめず話し続けていた。もつともフランクじいはウイルが目の前で堂々と寝ていても授業を続けるのだが……。

ウイルは目をこすり、フランクじいをぼんやりと眺めた。

トムはフランクじいを優秀な医族の一人だと言つていた。そこはウイルも否定しない。

ただ、ウイル自身が薬学を学ぶ必要性があるといふことはどう考へても納得がいかなかつた。トムは頑なに将来のためだと言つたが、それが役に立つ時が来るとはどうしても思えない。

何しろウィルは医族ではない。もつとも、ウィルはそんな味気ない族でなくてよかつたと思っている。

ウィルはその勇ましさを誇る士族なのだ。

この世界にはたくさんの部族がある。

それぞれどこかの族に属し、それぞれの自分の族に誇りを持ち、それぞれの族がこの世界で担うべき役割を果たしていた。

正直なところウィルはあまり部族のことについては知らなかつた。医族と士族、そしてこの世界の政治を司る、王族とも呼ばれる賢族、その他にもいくつかの族を知つていたが、一般の人々の五分の一ほどしか部族の知識を持つていなかつた。

ウィルは、他の事と同様に、両親のことについてもほとんど知らない。

ウィルがほんの1歳の時、亡くなつたらしい。

だから寂しいとかいつた感情は、全くなかった。

ふとまた気になつて、小さい頃、トムに両親のこと尋ねたことも何度かあつた。

だが決まってその話題になると、「今日は、勉強はかどつたか?」などと言つて、トムはすぐに話題をかえた。

ウィルが知つているのは、一人が病氣で亡くなつたということだけだ。トムはどうしても教えようとしないので、ウィルはいつからか聞き出すのをあきらめている。

トム、トム・ソルンはウィルを小さい頃から、男で一つで育ててきたが、ウィルの父親ではなかつた。親戚でもない。あまり詳しいことは知らないのだが、ウィルの実の父親の親友だつたと聞いた。

一枚だけお母さんとお父さん、そしてトムがソファに座つてにこやかに笑つてゐる写真があり、それはウィルとトムが住んでいる家(

家というより小屋と言つ方が正しいかもしない）に飾つてあつた。この家には珍しく、豪華な金でかたどられた額縁に収められていた。[写真の下には薄黄色の髪の小さなラベルが貼つてあり、「ラゼルとエレン」と黒いボールペンで書かれてある。トムの筆跡だ。]

とにかくウイルはこの世界のことについてほとんど何も知らなかつた。

異常なほど。家の壁に貼つてあるこの世界の地図を眺めては外の世界に思いをはせ、行つてみたいと熱望したものだが、トムはいつもウイルを外の世界に出してくれなかつた。

外の世界の様子も教えてくれなかつた。

好奇心旺盛なウイルにとつてはこれはとても耐え難いものだ。小さい頃はよく勝手に一人で山を降りようとしてトムにこつぱくしかられた。

「俺に剣で勝つたら、許してやる」

なかなか山を降りることをあきらめようとしないウイルに、トムは言つた。

その日から毎朝ウイルはトムと勝負をしている。

トムがウイルに学ばせてくれたのは、フランクじいのつまらない薬学とトムが教えてくれる剣術だった。トムは素晴らしい剣使いだ。やや年をとつても衰えることのないその動きは、息を呑むほどである。この剣術は、ウイルは薬学と違つてかなり真剣に学んだ。ウイルは一見とても貧弱な体つきだが、この分野には意外と長けている。トムでさえ、剣術に關しては、ある程度ウイルを認めてくれていた。トムみたいな立派な士族になることがウイルの夢だ。

ぎゅーっとウイルのお腹が鳴った。

フランクじいは自分の古びた腕時計を見た。銀色の立派な時計だ。フランクじいには不釣り合いだと、ウイルは内心思っている。昔、フランクじいが何かの賞でもらった腕時計らしい。時計の裏には、この国の守り神といわれるペガサスの絵が刻まれていた。

「おつと、もうこんな時間。時間が過ぎるのは早いですな。今日はこれくらいでよいじゃろう。ウイル様、今田のをちゃんと復讐しておくれですぞ。後々役に立ちますからな」

「なんで僕は士族なのにばかばかしい薬学なんて学ばないといけないんだ？」

ウイルは家に、いや小さな小屋に向かつて歩く途中、ぼやいた。今までこのことで何度もトムに抗議してみたものの全く効果がなかつた。

もつと士族として役立つものを教えてほしい。ウイルは小さなふもとの町のむこうに見える青い海を見ながら思つた。

いつか、自分の剣を手に入れ、あの海を渡るんだ。あと三年。ウイルは、成人を迎えたらここを出て行つてもいいと言つてくれた。もう大人とみなされるからだ。十八歳、その時になつたらこの山奥から大きな外の世界に出られるんだ！

やわらかな春風がウイルの気持ちをぐつと高揚させる。

ウイルが帰宅すると、トムはちょうど外で薪を割つていた。

「しっかり勉強したか？」

トムがウイルをちらつと見、薪を割りながら言つた。

「こつもの通りさ、トム。本当に退屈だよ。それなのにフランクじ

「いときたら……フランクじいは、僕が目の前で死んでいても授業を続けるんだと思うよ。それよりお昼は？」

トムは新割りを止め、顔をしかめてウイルを見た。

「お皿はもう用意してあるよ。スープを温めておいてくれ。それと
ウイル、何度も言つがばからしいと思うことでも真剣にしなければ
ならない。いずれお前の役に立つのだから。」

腹がペコペコだよ

ウィルは家の戸を開けながら言った。家に入ろうとするウィルに、トムの声が背後から追いかけてきた。

その何でもないよに思われる言葉がウイルの耳を通り抜けると、
ウイルは硬直した。その意味不可解な言葉を理解するのに長い時間
を要した。

他の人にとつては「」く日常的な言葉かもしれない。
だが、ウイルにとつては、いやこの家にとつては違つ。
客なんてこのちいさな家には一度も来た事がない。
フランクじいを客と呼ぶなら別だが……。

期待するのは早いぞ、ウイル・カシュー。ウイルは自分に言い聞かせた。そうだと、トムはフランクじい」と言つてゐるのかもしない。

いこといつ気持ちがありありと出ていた。

「いや、違う。別の人だ。かなり遠くから来るんだ」

薪をつかみながらトムは言った。そして、ゴホゴホとせきをした。

トムの風邪は最近ずっと続いている。

「誰？」

「俺の親戚さ」

トムは目に涙をこじませながら苦しそうに言った。

「こんなことは今まで一度も無かった。非常事態だ。緊急事態だ。スープをお皿によそおつしているウィルの心は、好奇心ではちきれそうになつていた。

ウィルの少ない知人が、今日一人増えようとしている。

トムの親戚とはトムの兄弟だろうか、それとも従兄弟だろうか。

ああ、夕方が待ちきれない。

ウィルは壁にかかっている時計を見た。

午後一時。

夕方つて何時だろう。

五時ぐらいだろうか、それとも早めの四時か。遠くからつていったいどこからだろう。

家の戸が開いてトムが汗を拭きながら中に入ってきた。

「パンも切つてくれたか？」

トムが椅子に腰掛けながら言った。ウィルは全然聞いてなかつた。

「トム、その親戚はどこから来るの？」

トムは少し顔をしかめて答えた。

「それは、もちろん士族たちが住んでいる島からだよ」

「突然来ることになつたの？」

ウィルはパンをトムに渡しながらまた聞いた。トムはパンを受け取り、バターをぬりながら答えた。

「一週間前から分かつてたさ。ほり、フランクじいがお前におれに渡すようにと封筒を持たせただろう？ あの封筒の中身がそのこと

についてだつたんだ。手紙を届ける仕事をする蟻族たちは、うち宛の手紙もフランクじいのところに送るからね」「

ウィルはミルクを飲んでいたがゴホゴホ咽た。

あの封筒の中身が客についてのことだつたなんて。

またフランクじいのウィルの苦情かと思つた。中身を見ておけばよかつた。

ウィルが、名状しがたい後悔にひたつてこり、「トムは粗末な昼食を食べ終え、畠仕事をするために椅子からたちあがつた。

トムは、ウィルが何を考えているか、分かつていて。

あきれたように首を横に振りながらウィルに言つた。

「自分の思考にふけるのは結構なことだがちゃんと後片付けをしておいてくれ。お密を招くのにふさわしい部屋にしておけよ」

「あ、それとウィル

トムは思い出したよつて言つた。

「その密は何日間かここに泊まる。この家は小さいからもう部屋がないだろ。だから不便かもしれないが、ベッドをもう一つお前の部屋に置かせてもらつよ。俺の部屋は本棚でいっぱいそんない余裕がないのでね。ベッドは、物置にある古いやつしかない。後片付けが終わつたら水で濡らした雑巾で拭いておいてくれ。多少はきれいになるだろからね。ほこりまみれだつたし」

ウィルはぽかんと口を開けた。数秒の間にまた新たな好奇心が山のように押し寄せた。

何日間かつてどれくらい?

いつたいどんな用事でわざわざ不便な思いをしてまで泊まりに來るのだろう。

しかも、僕と同じ部屋で寝るなんて。

「じゃあ、ウィルお願ひだからな」

トムはウィルに質問する隙を『えなこつぱつ』と言つて、

家の隅においてあるカマとか「」をとった。

読んでくださいてありがとうございます。

「待つて、トム」

「ウィルはバッと椅子から立ち上がった。

「まだ聞きたいことがたくさん」

トムが両手を上げて、それを遮る。

「ウィル、気持ちは分かるが今日は大急ぎで客を迎える準備をしなければならない。数日前からしておけばよかつたんだろうが、この通りどうも俺は体調が優れなくてね。気があまり進まなかつたんだ」

トムはそのままじろじろ立ち尽くし、やがて後片付けを始めた。

午後四時半。

ウィルはべつたじとしてベッドに横になつていた。
まだ客は来ない。

トムは客のための「」馳走を、キッチンで作つてゐる。
ウィルは、昼食の後、めいにいっぱい働いた。

物置のベッドは思ったよりもはるかにほこりまみれで、雑巾で拭くのにかなりの時間がかかった。

のびきつていても、ウィルの胸は高鳴つていた。
きつともつすぐだ。
もうすぐ客が来る。

「ドン、ドン」
ウイルはだんだんと、落ち着きをなくしていった。
じつとしていることに耐えられず、ベッドから起き上がった時だ。

戸を激しくたたく音がした。

ウイルは自分の部屋のドアをバンと乱暴に開け、びっくりしているトムの前を通りすぎ、戸の前でピタッと静止した。

そこで大きく深呼吸。

ドアノブをにぎりしめ、ゆっくりとその手をひねる。

続いてウイルがしたことは、ぽかんと口を開けることだった。

予想外の客だった。

てっきりウイルは客はトムのよつな中年、またはそれ以上に年のをとつた人だろうと勝手に決め付けていたからだ。

固定観念とは恐ろしいものである。

客はそういう人としてウイル信じて疑わなかつた。

ウイルには仕方が無いことかもしれない。なぜなら、ウイルには自分と同世代の人たちに知人は全くいなかつたし、そのような人たちとの接点もさらさらなかつたからだ。

そういうわけで、ウイルは戸の前に立つてゐる人物が自分と同じくらゐ若い少年だつたのですつかり驚いた。

その少年は全体的に痩せ型で背はウイルより十センチほど高かつたが、がつしりとしててたくましく、優雅な髪の毛はウイルの真つ黒な髪とは違つて鮮やかな赤茶色。

服は深緑色の革の服を着ていて腰には剣が携えられていた。誰が見ても勇ましい士族だと分かるよつな格好だ。

ウィルはしばらくたつても少年と向かい合つたままつたていた。
間抜けにもその間口は開きっぱなし。

その少年も、そしてトムも向も言わはずに固まっていた。
遠くで小鳥がさえずつてこる。

やがて、その少年が口を開いた。にやりとした表情で。

「そんなに口を開けていたらハエが入るぜ」

ウイルはそこでやつと我に返つた。

「 ウィル、お客さんに失礼じやないか。早く中に入れてあけないさ

トムが後ろから笑いながら言った。

近寄ってきたに気が付くと、手を下へのめり込み差し出した。

「はじめまして、トム・ソルンおじさん、ローレイ・シャティスです。お会いできて本当に光栄です。」

「心の底から『光榮です』と思ってる感じだ。

トムはにこにこ笑つて、差し出された手をぎゅっと握つた。

「は元気かい？」

「もちろん。いつもおしゃべりのくらじですよ。トムおじさんのことによく心配していましたよ。全然顔を見せないから何かあつたんじやないのかとか、生活がとても不便なんじやないかとか。手紙でも何度か遊びに来るようにお誘いしたのにやっぱり来られなかつたし……トムは困つたような顔をした。

「そのことについては十一分に説明したはずだが……」

ローレイは笑いながら軽く手を振つた。

「はい、もちろんしつかりと書かれてありましたよ。でも、母はご存知だと思いますが、極度の心配性なんです。ありえないことまで勝手に妄想して心配してるんですから」

「トムに向けて出発する時だつて、涙涙で……」

トムは大声をたてて笑いながら、ローレイに小さな台所のまえにあるテーブルの椅子座るように促した。

「すつかり忘れていたがナニーは小さい頃からそうだつたんだ。母親に似てね」

ローレイの言ひ方、トムの妹はどうやら極度の心配性うじい。

ウィルはトムの背後でぼんやりと考えた。

ただここに数日間訪問するだけなのに泣くなんておかしい。

トムは居間兼台所のテーブルの椅子に座りながら、ウィルにも自分の隣に座るよう命じた。

ローレイは背筋をピンとしてトムの向かい側の椅子に座つた。

自分の部屋に避難したいと思つていたウィルだつたが、仕方なくトムの隣のイスに座る。

トムはウィルの肩に手をぽんと置いた。

「ローレイ、こちちはウィルだ。ウィル・カシュー。確か君は十六歳だつたね。ウィル

君より一つ年下で十五歳だよ。ウィル、こちらはローレイ・ジャティス君。私の妹の息子、つまり私の甥にあたる。ほら、ウィル挨拶しない

しない

「よ…よろしく

ウィルは消え入るような声で言い、うつむいた。耳がとても熱かつた。

「こちらこそ、ウィル

ローレイはにやりとしながら言った。

ウィルを馬鹿にしているのがはっきりと分かる。

ウィルはすっかり自信を失った。

こんな経験は初めてだ。

一歳しかウィルとは違わないのに、ローレイの体格はウィルとかなり違っている。

ローレイのがつしりした体つきと比べると、ウィルは痩せていてあまりにも貧弱だった。

そのことが、ウィルに大きなショックを与える。

自分の体型は普通ではないのだろうか？

ウィルはローレイをちらりちらりと盗み見ながら、考えた。

夕食時。

ウィルはずっと沈黙を守っている。

トムとローレイは初対面のはずなのに従来の友人のように会話がとてもはずんでいた。

ローレイの住んでいる島には士族の村があり、トムもそこの村の出身らしい。

その士族の村の話やローレイの家族の話で盛り上がっている。

今日はいつもに比べるとかなりのご馳走だった。

いつものウィルだったらすぐに平らげてしまいそうなステーキだつ

た。

食後。ウイルは、一人することがなく、ぼんやりと薬学のノートを取り出し、眺めていた。

「ウイル、ひまなようだね。お風呂に入つてきたらどうだい？」
場を離れる口実ができたことを喜びながら、ウイルはその場をそそくさと逃げ出した。

しかし、後になつて、それは後悔に変わる。

お風呂から上がり居間に入つた時、トムとローレイは声を顰め、二人とも深刻な顔で何やら話しあっていた。

二人ともテーブルに広げてある一枚の紙を見ながら身をかがめて話している。

ウイルの好奇心が、ポツポツと咲き始めた。

そつとトムの背後に近づく。

「それでここにエレ」

トムが何か言ひのをさえぎつて、ローレイがウイルに言つた。

「何か御用ですか、坊や？」

顔にはあのにやつとした表情が浮かんでいる。

ウイルはびっくりとして、顔をしかめた。心の中で悪態をつく。

トムが驚いて、顔を上げた。

「びっくりするじゃないか。もうあがつたのかい？」

「え……あ、うん」

赤くなりながらウイルは答えた。

ウイルはローレイを睨んだ。

坊やなんて、人を馬鹿にするにも程がある！

「今日は疲れたんじゃないか？たくさん働いたし。もう寝たがりだうだい？」

「え、でもまだ八時だし」

「寝たほうがいいぜ。さつきだつて、ぼおつとしてたじやないか。

疲れてるんだろう？」

ローレイが口を挟んだ。

そこで、即座にウイルは回れ右して自分の部屋に向かつた。

一刻も早く「」イツから離れたい。
それがさしあたつてのウイルの、一番の願いだつた。

「」んなはずじゃなかつたんだ

ベッドの上に仰向けに倒れたウイルはつぶやいた。

初めての客の訪問はウイルがドアを開けた瞬間から、めちゃくちゃになつてしまつた。

ローレイが来てたつた四時間たつたが、ウイルは人生で最悪の四時間だと思った。

フランクじいの馬鹿げた授業よりも百倍悪い。

ウイルは、今日になつて初めて自信を失くすという経験をした。
自分がどんなに世間知らずなのか、また他の少年たちからしてどんなに変わっているか知らない。

いつもと調子がくるつていたウイルだったが、先程のローレイとトムの会話はまだ気になつていた。

「コレ……いつたい何を言おうとしたんだらう？くそつ、あいつが
口を挟まなければ聞けたのに」

自分の村のことをここにやかにトムに話すローレイの顔が頭の中に浮かんできた。

トムがあんなに楽しそうな顔をするのは久しぶりだ。
ここにとこりずつと体調をくずしていく、そのためか若干元気がなかつた。

よくフランクじいの所へ行つて診てもらい、薬もよくウイルがあずかつて届けていたが一向に治らなかつたのだ。

そのためフランクじいは何種類もの薬を調合してトムの病氣と奮闘していたが、今のところ効果はあまり出でていない。

トムは私ももう若くはないからねと言い、フランクじいはタチの悪い風邪だと言つた。

だが、ウイルにとつてはただの風邪とは到底思えなかつた。
なにせ、フランクじいの薬が全然効かないのだから。

ウイルはトムの体調不良はこの山に長年こもつてゐせいでだと勝手に予想している。

外に出て新鮮な空氣を吸つたほうが絶対に体にいいはずだ、と。

だがウイルは知らなかつた。

自分とウイルがこもつてゐるこの山に世界に誇れる新鮮な空氣を
持つてゐる場所の一つだということを。

「はあつ」

ウィルはため息をついた。

トムの体調はともかく、この山から外の世界に出たい。今の生活はウィルにとって毎日がとても窮屈だった。

そうだ！

ウィルはふと考えた。

この機会にトムに士族の村に移り住むことを勧めてみようか？ そして、僕も士族の村に住み、一人前の剣士になる猛特訓をするんだ！

あのムカツクやつがその村に住んでいるのは気に食わないけど、きっと僕と同じくらいの年代の友達がたくさん作れるはずだ。みんながみんなアイツみたいに意地が悪いはずがない。

それからしばらく、ウィルは自分が士族の村に行つて楽しい毎日を送る想像をして心を躍らせながら、眠りについた。

それから一週間何事もなく毎日が過ぎていった。

ただウィルにとつてやつかいな者が一人一緒に暮らすようになっただけだ。

ただそれだけで、つまらない日常は何も変わらない。

ウィルはローレイとあまり話さなかつたし、また話したくもなかつた。

それに同じ部屋で寝起きを一緒にしているといつても、ローレイが眠りに着くのはウィルより晚かったし、朝ウィルが目覚めたときはいつも隣のベッドはすでに空なのである。

ムカツクことが無かつたと言えばそれは強がりになるが、何か接する機会がある度にローレイは、ウィルをまるで親指をしゃぶついる子供のように扱つた。ウィルの士族の村に住むといつ希望がウィルの心を守つた。

ある時、ウィルは思い切つてトムに士族の村に行くことを催促した。
「そうだな……。まあ、それを考えてないわけでもないんだ。久しうりに故郷に帰りたい気もするし……」
ウィルは息を呑んだ。あれだけ期待していたにもかかわらず、こんな前向きな返答が来るとは思わなかつた。

ウィルの心は躍つた。
この止から外に出れるといつも年年の夢が、今叶おうとしているのか
もしれない。

初めての客 2 (後書き)

読んでくださいてありがとうございます。

何事もなく一週間過ぎたのだが、ウイルには最近少し氣になる」と
がいくつかあつた。

一つは、ローレイとトムがあの最初の日のお風呂から上がった時の
ように、眞剣に何かをよく話し合つてゐることだ。

しかもひそひそ話で。

二人はウイルに聞かせまいとしているらしく、ウイルの前では決し
て何やら深刻な話をしようとしている。
また、ウイルが近くに来ると必ずその話を中断させるか、何か理由
をつけてウイルを追つ払おうとした。

「お風呂に入つたらどうだ?」

「薬学の復習はしたのか?」

「もうそろそろ寝なさい」

追い払われれば、追い払われるほど、ウイルは話を盗み聞きするの
に躍起になつていつた。

自分の部屋にドアに張り付いて、居間の会話を聞きとらうとしたり、
お風呂からあがつた後、忍び足で居間に入つていつたり。

いろいろな策を考え、片つ端から実行していつたにもかかわらず、
成果はあまり芳しくなかつた。

聞き取れた単語は、

「アンナ」

「村」

「船」

アンナといふ人がいるといふに船に乗つて向かう？

単語をつなぎあわせてもそれくらいの予想しかできない。
こんなどうでもいい話をしてくれるわけじゃないことは、ウィルは察
しがついていた。

あのムカツク少年はともかく、トムとはずっと一緒に暮らしてきた
長年のつき合い。

家族だ。

トムがあんなに真剣な顔をするのは、よつぼどのことだと察するの
はウィルにはさすがに容易い。

そして、もう一つ気になることがあった。

ローレイは何かしらウィルと目が合つたときは、あの意地汚い薄笑
いを顔に浮かべているのだが、たまにウィルのこと鋭い目で、観察
でもしているかのように、見つめていることがあった。
しかし、ウィルも見返してくることに気づくと、すぐここせりとし
た表情になる。

その度にウィルは心の中でローレイのことを毒づいていたが、一方
でその鋭い視線の意味がとても気になっていた。

「ウィル様！ しつかり聞きなさるのだ。せめて風邪薬の分野だけでもマスターしないと。もつ時間がないのですぞ！」

その日、フランクじいが珍しく大きな声を出した。

ウィルの回していたペンが、ポトリと落ちた。

「どうして時間がないの？」

その時フランクじいは、はっとしたような表情が一瞬浮かんだが、すぐに厳しい顔に戻った。

「医族では十五歳くらいまでは薬学の基本的な知識は、もちろん風邪薬もその一つですが、たいていマスターするのです。それなのにウィル様は十五歳になつて一ヶ月たちなさつている」

「フランクじい」

ウィルの声にイライラをにじませた。

「僕は、医族、じゃなくて、士族、だよ」
一個一個単語を区切つてはつきりと言つ。

「フン」

フランクじいは鼻をならした。フランクじいはかなりの強情な性格の持ち主だ。

「しっかりと教養がある人は、自分の族以外のことも何かと勉強するものですが、そしてトム様はあなたが教養がある人になることを望んでいらっしゃいます」

「トムが何と言おう

「今日はこれで終わり」

ウィルが反論を言いかかるのさえきつて、フランクじいはきつぱりと言つた。

それから、自分の前に広げてある本、『基本薬学』をパタンと閉じ、

ウイルに差し出した。

「『』の本をあげるから、よく家で復習しておくれのですぞ」

「フランクじいはもうこの本いらないの？」

ウイルは驚きながら、その本を受け取った。

「私が基本薬学を覚えてないとでも思つてなさるのですか？」

フランクじいが憤然としていった。

「違うよ」

ウイルは慌てて言った。

「ただ、それならどうして今までくれなかつたのかなつて……」

「もちろんノートに書かせて頭に叩き込ませるためです。ウイル様にはお出来にならなかつたようですがの」

「そつ……分かつた。ありがとう。それじゃ、僕帰るね」

説教第二弾が始まる前に、ウイルは即座にフランクじいの家を飛び出した。

「いよいよですな ラゼル様……」

元気よくかけていくウイルを窓越しに見ながら、フランクじいはつぶやく。

何も知らないウイルは駆けていく。

これから全てが変わつてしまつ」とも知らないで……。

明かされた真実 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
次回ウイルの素性が明らかになります。

「ただいま！」

ウイルは元気よくドアを開けた。
いつもと同じように。元気よく家の中に駆け込む。

居間で何やらまた話をしていたローレイヒトムが、同時に顔をあげた。

「おかえり、ウイル」

この光景はもうウイルにとっては慣れっこだ。

ウイルは気分を害することなく、自分の部屋に直行した。
もしも話声がいつもより大きくて聞こえそうなら、また自分の部屋のドアに貼りついて盗み聞きを図るうかな。
そう番気に考えながら、ウイルは一人のいるテーブルを通り過ぎた。

正確には通り過ぎようとした。

「ウイル、話がある。ここに座つてくれないか」

ウイルはびたりと足をとめた。驚いてトムを見る。

トムがローレイが今座っている自分の向かい側の席を示していた。
ローレイは即座に立ち上がり、トムの隣の席に座った。

「すまないね、ローレイ君」

「いえ、大丈夫ですよ」

トムは、いつもよりやや顔色が悪いように見えた。

最近は体調が芳しくないせいで、顔色が悪いのはよくあることだつたが。

ウィルは警戒しながら、トムの向かい側の席に無言でついた。

ローレイは今は顔にあの厭味つたらしい「ヤーヤーヤがない」士族の威儀をどことなく漂わせるような、引き締まつた厳しい顔をしている。

嫌な予感がした。

なぜか心臓の鼓動が速くなる。

「何？ 話つて……」

トムはすぐには質問に答えず、黙つてウィルを見ていた。

ウィルはローレイとトムから真顔で正視されているのがどことなく居心地が悪く、椅子の上でお尻をひゅひゅさせた。

よひよひトムが口を開いた。

「ウィル、この話をするのを私は随分先延ばしにしてきたが、もうこれ以上はダメみたいだ」

少し震えた声。

「こんなトムの声をウイルは初めて聞く。ウイルは無意識に身構えた。

「どんな話を……？」

自分でも驚いたことにかすれ声だつた。

まだ経験したことのないこの張りつめた空氣に、胸騒ぎを覚える。直感が大変なことが起きると告げていた。

「時が来たんだ。お前の旅立ちの『時』が

「え？」

「ウイル、それはお前が長年望んでいて、私が望んでいなかつた『時』だ」

「何を言つてゐるのか、全く分からんだけど……」

「旅立ち」この言葉が、この神秘的かつ魅力的な言葉がこの時ばかりは乾燥して聞こえた。

何の意味ももたない、空氣のよつなもの。

「旅立ちつてどうこいつこと？　僕らこの家の出るの？」

トムは大きく深呼吸をし、ぐっとウイルを見据えた。

これから戦に望む士族のよつて、その眼差しは士氣を帶びてゐる。

「長い物語だ。ここから話し始めるのがいいだらう。お前が旅立たねばならない理由、まずはそこからだ」

静寂がその空間を覆つた。

トムの声は静寂の中で響き、そして静寂の中に消えていく。

「全では、現在この国を治めてるエカルイア家にある」

「エカルイア家、それって王家だよね」

世間知らずのウィルでも、その名はさすがに知つていて
このルーテン国王家。

「この世界の崇高なる支配者、賢族の誉れ高きエカルイア家」

ローレイがそこで初めて口を開いた。

ウィルはその声に嘲りの色があつたのを聞き逃さなかつた。

「王家と僕達が旅立たなければならない」と、何か関係があるの
？」

「大いにありだ」

トムが即答した。

「お前は知らないと思うが、賢族には一つの姓がある。正確に言う
と、あつた。お前が生まれた時はまだ、一家がこの国を治めていた。
だが、今王宮にはエカルイアという名を持つ者しかいない。理由を
知つてゐるか？」

「もちろん、知らないよ」

「もう一つの姓をもつ一族が、耐えたからだ」

「全員死んだつてこと？」

「その一族のほとんどの者が、次々と病死した」

「大変な病気だつたんだね……」

「病気？」

そのローレイの言葉には、また嘲りの調子があった。

「どうして一方の族の者だけが死ぬ病気なんだ？ 公式にはそういうことになっているが、嘘であることは世界の誰もが気づいてる。病気というよりも暗殺といった方がこの場合しつくらからな暗殺！？」

トムは重々しく頷いた。

「裏切りだ。昔は二つの血縁はつまくやつていて、善政をやつていた。だが、当時ある理由で両一族は仲が悪くなり、エカルイア家は一方の一族を排除しようとした。結果今はエカルイア家の独裁政治。今、その一族のトップがご存知、アルノー・エカルイアだ。陰謀が働いていた時は、まだそいつの父親が王座にいたが……」

「アルノー王……」

「アルノー王は君と同一年だな。この国の頂点にいる男だ」

「同じ年でも能天氣のばかと暴君か……。こりや、全然違うな」

ローレイが皮肉たつぱりに言った。

「僕は能天氣のばかなんかじゃない！」

ウィルが怒つて言った。

「そうだったのか……。それじゃあ、世間知らずの弱虫君かい？」

ローレイがいつもの調子で、わざとおどけてみせながら言った。

「違う！！僕は」

「ばかなけんかは二人ともやめるんだ。話を進めるぞ」

トムが大声を出した。

「二人とも？トム、ローレイが僕のことを」

「口を閉じるんだ、ウィル。時間を無駄にしている余裕なんて、全

くないんだ」

ウィルはローレイを睨みつけながらも、言われた通り口を閉じた。ローレイはまだうつすらニヤニヤ笑いを顔に浮かべている。

「よし、それでいい。最初この国の賢族による政治が始まったとき、さつきも言ったように賢族には一家族がいた。ビーグ家とエカルイア家。だが、四十八代の王は女王だった。女王としては2代目だ。名はクララ・ビーグ。王位についてからしばらくし、クララはある青年と結婚し、諸事情により姓を変えた。クララ・カシュー」

ウィルは口をあんぐりと開けた。

偶然？

直感が未だに継続してウィルに警告を発していた。

さらに深い静寂が居間を呑みこんだ。外で美しい声の小鳥が、さえずっている。

「そうだよ、ウィル

トムはウィルをじっと見すえ、ウィルもまっすぐにその目を見つめ返した。

「いや……ラゼル王の息子ウィル・カシュー」

明かされた真実 2（後書き）

読んでくださいありがとうございました。

時が止まつた。

「今なんて言つた?」

「第一王子ウイル・カシュー」

ローレイが何事でもないかのように、きつぱりと言つ。

「え……?」

「君の父親ラゼルはルーテン國の王だつた」

「いや……ちょっと待つて」

「賢帝だつたよ。そして、私の無一の親友だつた。本当に人格とい
い、知性といいすばらしかつた。だが……」
そこでトムの表情は一段と険しくなり、黙りこんだ。

次に口を開いたのは、ローレイだつた。

「カシュー家の悲劇。僕がまだ物心つく前の時だつた。大きくなつ
て、人から聞いたことだが、今から十四年前このルーテン國の中心
の都リフラーにある城、つまり王宮で原因不明の伝染病がはやつた
らしい。だが、おかしいのはその病気にかかるのがカシュー家の者
だけなんだ。最初は、王を引退していた先王、そして王妃、後を追
うように王、あとは詳しく知らないが他にも何人かのカシュー家の
者が死んだらしい」

トムが首を振つた。

「伝染病なんて、聞いてあきれる」

「全く同感ですよ、トムさんおじさん」

ローレイが相槌を打つ。

「それは、もう世界のみんなが思つてることです」

「エカルイア家はもうちょっとマシな口実は思いつかなかつたのか？なぜカシュー家の者だけが、伝染病にかかるんだ？なぜそばにいたメイドや他に城に仕えていた多くの人は、だれも伝染病にかからなかつた？エカルイア家もみな健康そのものだつた。陰謀だよ。誰もがそう思つてゐる。カシュー家の者は、殺されたんだ」

ウイルは話についていくことができず、ぽかんとしていた。

「だが、一、三人は生き残つたらしい。だが、当然もう城にはいなによ。どこかで、ひつそりと身を隠して暮らしてゐるはずだ。君の親戚にあたる人たちだよ」

「僕の親戚……」

ウイルは、そこでたつた今聞かされた話を、ゆっくり頭の中で整理してみることにした。

僕はラゼル王の息子。カシュー家の生き残り。

家族は陰謀で殺された。

トムはラゼル王のバディ。

僕は士族じゃなくて賢族、つまり俗に言う王族。

……。

そして一つの結論に達する。

「は……。あり得ないね……。あり得ないよ、トム」

「何がだね？ ウィル」

トムの声は優しかった。

「もちろん、僕が賢族の一人だとこいつがだよ。一人して僕のことをからかってるんでしょ？」

ローレイは声に苛立ちをにじませた。

「お前つて、思ったより飲み込みが悪いな……」

トムはしばらく、ウィルを直視したまま、拳を額に当てるて考え込んだ。

何かをを思案しているらしい。

その間、ウィルは自分が賢族ではないという根拠を、心の中で挙げていた。

第一、王族の一員なら、何でこんなよれよれの服を僕は着て、こんな山奥に外界とは全く接触なしですごしているんだ？

賢族は世界中と接触して、まとめるのが仕事だろ？

それに、第一王子とかいう立場なら、召使とか周りにたくさんいて、毎日ほつぺたが落ちそうなほどおいしいディナーを金のお盆に載せて運んでくるはずじやないか。

小さい頃に読んだ、絵本の中の王子はそんな生活をおくっていたはずだ。

突然、ローレイがパチンと指を鳴らした。

「やうだ！」

そして、服の左袖をぐいっとまくりあげる。

「お前は、これが何だか知つてるか？」

その二の腕には、銀の太い腕輪がはめられていた。
飾りなどはなく、ただのわつかで、肩より少し下のところにまくらめられていた。ウイルは、その腕輪に見覚えがあった。

この色、この形……。

「これって、トムも……」

「ああ、そうだ」

トムもローレイと同様に袖をまくりあげながら言った。セーリンは、ローレイとほとんど同じものがあった。

ただ、トムのは年季が入っていて、さらに大きなヒビが入っている。ウイルは見慣れていたが、なぜか自分に同じのがついているのだから、見慣れているはずのローレイは顔に驚愕の色を浮かべた。

「トムおじさんそれは……」

トムはローレイを手で遮り、ウイルに向かって言った。

「ウイル、これが何なのか分かるか？」

ウイルは少し頬を膨らませた。

「知らない。トムは教えてくれなかつた」

「悪かった。これは、カラーというものなんだ。このルーテン国の人

人々はみなつけている。みな、生まれるとすぐにつける。これは、不思議な物質でできていてね、その人の成長とともに伸びたり縮んだりするんだよ。つまり、きついとか、ゆるいとかいうことがないんだ。そしてこの色についてだが、この腕輪の色は、そのつける人が属している部族を表す」

「それがどうしたの？」

「腕輪をつけないのは、賢族の者たちだけなんだ」

明かされた真実 3（後書き）

読んでくださいありがとうございました

「なぜお前はカラーツつけてない？」

「ウィルは即答した。

「トムがつけてくれなかつたからだ」

「違う」

ローレイが険しい顔で言った。

「お前が賢族の者だからだ。つける必要がないんだ」

「……」

「それに、お前はトムさんがどんな人だつたか知つてゐるのか？」

「どういふこと？」

「ラゼル王のバディだつたんだ」

「バディ？」

「僕達士族は賢族と契約を結んでゐる。それは、賢族の重要な人物に対し、政治を司る手助けをするパートナーを送るというもの。そのパートナーがバディだ。基本的には護衛だが、もちろん他の手助けも色々とする」

「第一の家臣といつわけだ」

トムが横から言つた。

「もちろん」

ローレイは続けた。

「バディに選ばれるのは、優秀な者たち。国王のバディは一番優秀な者が抜擢される。つまり、トムおじさんはとても優秀な剣士で、僕ら家族の誇りなんだ」

「ウィルは驚いてトムを見つめた。
そこまですごい剣士だったとは、思わなかつた。」

「あり得ない」

「ウィルは苦笑いしながら言った。
「からかうのもいい加減にしてくれ。カラーをつけてない、それが
どうしたというんだ。普通では、異常なことかもしれないが、僕に
とつては何の変哲もないことだ」

「どういふことだ？」

「僕は、君のような外の世界の人とは違つて、この山奥に長年閉じ
込められてきたんだ。だからカラーをつけてないことなんか、何の
不思議もない」

その言葉を聞いて、ローレイはにやりとした。

「たつた今お前は、自分が賢族の者であることのもうとも有力な証
拠を口にしたぜ」

「どうしてお前はここに長年閉じ込められていた？」

「ウィルは怯まなかつた。

そんな理由は分かりきつてゐる。

「トムが極度の心配性だからだよー。」

今までの不満をぶちまけるよつこ、ウィルは声を張り上げた。

「ウイル、それは違うよ
トムが即座に否定した。

「私は確かにお前のことについても心配していたが、それはお前が、そこらへんの者たちとは違うからだ。お前が普通の者だったら、とつぶに山のふもとの町に行くことを許してたさ。何しこの島はこの国のなかでもっとも治安のいいヒシミス島だ。友達を作らせることがぐらい何の心配もいらなかつただろう」

「……」

閉じ込められていた理由を聞かされても、まだウイルはトム達の話を信じじることができなかつた。

あり得ない。
あり得ない。
あり得ない。
絶対ありえない。

「いい加減に認めろよ

ローレイはうんざつしたよつてついた。

「お前が俺たちの話を否定することことは、お前の父親、立派な賢帝だつたらしいが、その方も、そして士族にとつて最高の名誉であるバディの称号を得たトムさんをも否定することになるんだぞ！」

？

「う……」

痛いところをつかれた。

父親はともかく、トムのことを田をねてはウィルはもう何も言えない。

「ウィル、私の田を見るんだ」

ウィルはゆっくりと視線をトムの顔に合わせた。

「私のことが信じられないのかい？私がこんなに真剣に話しているのに、冗談を言つてるとでも？」

トムはまっすぐにウィルを見ている。

ウィルにはその視線が痛かった。

しかし、そらすこともできない。

しばしの沈黙と静止。

ウィルはついに折れた。

「分かった。認めるよ……。とりあえず」

ウィルは力なく言った。

「僕は王族、そしてトムはすんごい剣士」

「ただすごいってもんじやない！」

ローレイが声を張り上げた。

その顔は、その厭味つたらしいいつもの顔から想像できないほど、輝いている。

「武芸の世界では、世界の頂点に立つ男だ。士族はもっとも武芸に優れた部族。そしてバディの称号を得られるのは、一族で頂点に立つ者だけ。トムさんは、さらにその歴代バディの中でもひときわ優

れていたと聞いている」

ローレイが興奮しているのをウィルは肌で感じ取った。
「そんなにトムはす」「のか……」

「やめてくれ！ 私はバティ失格なんだ」

突然声をあげたトムに、ローレイとウィルは驚いた。

「どうして？」

ウィルが驚いて聞いた。

「私はお前のお父さんを守り抜くことが出来なかつた」

「ラゼル王は原因不明の『病氣』で亡くなりになつたんです。トムおじさんのせいでは」

「いや」

トムはローレイをさえぎつた。

「確かにヒレンが亡くなつた時には、全く効く薬がなかつた。だがラゼルの時には、死ぬ少し前に病氣の進行を遅らせる薬ができたんだ。私は届けることが出来なかつた。私は、バティ失格なんだ。みすみすラゼルを死なしてしまつた」

トムの声は少し震えていた。

「でも」

ウィルはトムを慰めたくて必死になつた。思いがけず、わずかな薬学の知識が役に立つ。

「お父さんの病氣はとても進行していたんだ。死ぬ寸前だつたんでしょ？ その薬ができたのは、それならどうひらひしろ無理だ」

「だが」

「薬を届けたところで、セツとお父さんはそんなに生きられなかつたよ」

「確かに数日長く生きられる程の効果しかなかつたかも知れない。でも、その数日で世の中が変わつていたのかもしれないんだ。エカルイア家が政治を握るのを阻止出来たかも知れない」トムは両手で自分の髪を掴んでいた。

「もつと言えば、エカルイア家が絡んでいるに違いないその病気を感染するのを防げたかも知れない」

ローレイが静かに言った。

「母が言つてました。あの病気はまだ解明されていないと。医族の者達が長年必死で研究しても、未だに治す薬ができるいない病気です。トムおじさん、そして誰にも防ぐことは出来なかつたでしょ?」

「そうだよ!」

ウイルは初めてローレイに賛同した。

「僕達士族は至今でもトムおじさんのことを誇りに思つてこます」

「ありがと!」

トムは悲しそうに笑いながら、肩をすくめた。

「でも今は話をすすめよう。話さなければいけないことが、まだ山ほどある」

明かされた真実 4（後書き）

読んでくださいありがとうございました。

- 1・アルノーの横暴をとめる
- 2・そのためにペガサスを見つける

ウィルがしなければならないことを、トムは単純明快にこの2つにまとめあげた。

たったこれだけのことだとでも言つよう。

「ちょっと待つて」

ウィルはさすがにあきれて笑っていた。

「そんな簡単にトムは言つけど、アルノーの横暴をとめろつたって、相手は現国王でしょ？　たくさんの軍隊も持つている。適うはずがないよね？　ハハつ……それにペガサスを見つけるって、ちょっと待つてよ……。だいたいペガサスって実在する生き物なの？　確かにこの国の守り神として人々に知られてるのも僕は知つてるけど、実在するとは聞いたことがない……。それも僕が無知なせいなの？」

「いや」

答えたのは、真顔のローレイ。

「俺も実在しないと思っていた。世界の9割以上の人実在するとは思つていない。守り神ではあるが、それはこの世界の象徴とかぐらいにしか思つてないだろう」

「王族の者とそれと一緒に周りの周りの者だけがこの国の、今は1国しかないから、この世界のとことになるが、その秘密を知ることができる」

トムの声には搖る影がない。
バディ。

国王の第一の家臣、いや片腕とも言つべきか。

ウィルは悟つた。

トムは知つてゐる。

「で……でも、僕が旅にでたところで、僕一人じゃどうすの? とも
……」

「お前一人じゃない。ローレイ君もいる。お前のバディだ」

ウィルは自分の耳を疑つた。

「……。はつ? え……誰が?」

「……ここのローレイ君だよ。わざわざお前のために来ててくれた」
言葉がでないウィルに向かつて、トムは続けた。

「まだ若いが非常に優秀な剣士だ。すく心強い」

「ありがとうございます。トムおじさん」そう言われるなんてとても
光榮です」

ローレイはトムに向かつてしゃしく言つた後、すぐに表情を変えウィル
に向かつてにやつとした。

最悪だ!

ウィルは思つた。

よつによつて何でこんなやつが？

「僕にはバディを選ぶ権利はないの？」

「バディは士族の村で選出され、長老によつて任命される。それに例えお前が選ぶとしても、ローレイ以上にいいバディはいないだろう」

「ウィルは下唇を噛んだ。

まあ、こゝは我慢しても。

「でも僕にはトムもいる… そつだらう？」

ウィルは自分を鼓舞するよつて言つた。

トムをえいれば何とかなる、ウィルはそつ思つた。

だがトムの次の言葉はウィルを再び啞然とさせた。

「私は行けないんだ」

「ど… どつして？」

ウィルが驚いて聞いたとき、カチャリと音がした。

ローレイがスプーンを置いたのだ。

「そのことに關しては、僕も前々から気になつていきました」

「私はもつ年をとつてしまつていて。昔のよつには体が動かないだ

ろう」

「そんなことない！」

「ウィルは必死に言つた。

「毎週僕に剣術を教えてくれてるじゃないか！ いつもすごい剣術を見せてくれるじゃないか！」

「私も行きたいのは山々なんだ」
トムの顔は苦渋に満ちていた。

「でも、私はお前のバティじゃない。お前のお父さんのバティだ」
「でも！」

「それに私は今病気を患っている。それはお前も承知だろ？　ずっと治っていない」

ウィルは黙つた。

確かにそうだ。

フランクじいの薬が全く効いていないようだった。

「だがあもしこの病気が治つたら、そしたらお前の旅に同行しよう。お前の護衛の一人として」

ウィルは呆然と、トムを眺めた。

病気のトムをつれ回すのは、さすがに気がとがめる。
だがシヨックは大きい。

トムと別々になる！

これまでトムとはいつも一緒にいたのに！

不安がウィルを体の奥から襲い始めたが、ウィルはそれをそのまま無理やり丸呑みにした。

今は考えまい。

「トムおじさんは士族の村に帰つて静養なさるのですね」

トムは頷いた。

「お前たちを来週見送った後、フランクと村に移り住むつもりだ」

「来週……」

「ウィルは咳いた。

「本当はもう1、2年先のはずだつた。だが、士族の村からの便りで無視できないことがあつたんだ。そのことについては、ローレイ君のほうが私よりも詳しいだろう」

「ええ、事の詳細は長老から伺っています」

ローレイは少し身を乗り出して言った。

「士族は密偵を各地に派遣しています」

「密偵？ 何のために」

「ウィルが聞いた。

「もちろん、エカルイア家の動きを知るため。士族は常に賢族に忠誠を尽くしてきたが、

今は縁を切つている。だが、横暴を防ぐため情報網今でもをはりめぐらしてはいるんだ。そして今回の気になる情報とは、ポルテフラ島に怪しげな動きがあるというもの」

「ポルテフラ島？」

ウィルはトムを見て言った。

「トムから聞いたことがある。確か枯れた島つて」

「ああその通りだ」

トムが頷いた。

「何故かは知らないが、あの島の生物は多くが死んでしまつたと聞いていい。別名死の島だ。あの島にはもう人は近づかないと聞いていたが……」

「はい、その通りだつたんですが、最近王国の船が度々訪れている

そうなんです。それも人目を避けているかのように、夜に上陸するんです。こちらが派遣しているスパイの情報によると、船でその島に行くのは王国の船では珍しく十数人とか。そのためその怪しい動きを詳しく洗うのは困難なんです」

「「といひ」」とは、僕達は旅に出たら、まずポルテフラ島に向かうの？ その謎の動きを解明するために？」

「いや、そうではない」

ローレイが言った。

「エカルイア家の者たちが怪しげな動きをしているのは確かに気になる」ことだが、その動きもお前がやつたと王の地位につけば封じられる。だから先に都に…」

「でも、そう簡単には僕は王になれない！ なれたとしたら、それは奇跡中の奇跡だ。ものすごい奇跡が起こらないと、トムに言われたことは現実にはならない」

ウイルが蒼白になりながら言った。

トムは否定しなかった。

「確かに奇跡とか何かそういうものがないと、この世界は救えない。危険な旅だ。かつ過酷であるのも確かだ。ただでさえ、王の試練とはそれは大変なものだ」

「王の試練？」

「お前がこれから挑むことになる試練だよ。賢族の者が玉座につくには、まず王の試練と言われる旅に出で、その勇気、知性、行動力など、王として必要な資質をペガサスに承認してもらわなければな

らない」

「承認がなければ……」

「ああ、正式な王にはなれない。今の国王アルノーは承認を得ていない。旅にも出でていなからな。だからやつは正式な王ではない。その証拠にやつは歴代の王たちが持つていた力を持つていなからな」

「力？」

「いや……そんなことは今はどうでもいい。いいか、この王の試練は、国が乱れていないうまに行われたとしてもそれは厳しいものだつた。命を落とす者も、挫折するものもいた」

「命を落とすもの！？」

「ああ、そうだ。しかし、お前はただでさえ大変な試練を、この国が乱れた時代に行わなければならぬい……」

明かされた真実 5（後書き）

読んでくださいありがとうございました。

告知から一週間で、ウイルは今までの知識の量を超えるほど多くのことを学んだ。

一週間はあつという間に過ぎ、いよいよ明日が出発の日になった。

今、ウイルは荷造りをしている。

持つて行くのは必要最低限にしろと、トムから言われた。

ベッドに広げられ衣服を取りあげた時、ある包みが音をたてて、床に転がった。

一週間前にトムから手渡された、王家の木箱。

その蓋には、この国の守り神ペガサスが彫られている。

「でも何の手掛かりもないのに、どうやって探し始めるんだい？」
1週間前そうウイルが聞いた時、トムは棚の引き出しからこの木箱を取り出してきたのだ。

トムの話では、ウイルのお父さん、つまりラゼル王が死んだ時に、突如この木箱が枕元に現れたらしい。
確かに長い歴史を感じさせる風情をまとっている。
だが何か不思議な力を持っているようには見えない。

試練へと導く木箱。

この木箱を手にした時に試練が始まる、ヒトムは言った。

「こり」とは、もう試練は始まっている！

胃がふわっと持ち上がるような感覚。

いけない。

ウィルは自分に言い聞かせた。

深く考えたら、怖くなるだけだ。

自分が逃避しているということは、分かっていた。

情けないと思いもした。でも今のウィルには、全てを受け入れることは不可能である。

ウィルは木箱もリュックに詰め込んだ。

ガチャッとドアが開いて、トムが入ってきた。

「荷造りは進んでるか？」

「うん、もう少しで終わるよ

「そうか……」

気まずい沈黙が流れた。ウィルは、何を言えばいいか分からなかつたので、黙々と荷造りを進めた。

今日は朝から、二人ともろくな会話をしていない。

「これが何か知っているか？」

トムが差し出したのは水晶だった。だが普通の水晶ではない。上に白い小さなつまみがあり、中には銀色に光る液体が入っていた。

「使い方は詳しく知らないけど、何なのかは知っているよ。ルクでしょ？」

「その通り。ゴホッ… これはルクといつこの国の現通貨だ。来て見てごらん」

ウィルは立ち上がりトムに近寄り、覗き込んだ。

「「」のつまみをひねると、順に大きさの違う三つの穴が現れる」説明をしながらトムは、実際につまみをひねって見せた。穴は順に大きくなっていた。

「一番最初の一番小さい穴から出でてくる一滴が一ルクだ。他の二つは、別に軽量力

ツプで量らな」「ホツ…ければならない。高額の物を買つ時は一番大きい穴を使

うといい。分かつたか？」

ウイルは無言で頷いた。

「よし、それでいい」「ホツ」「ホツ」

トムは激しく咳をした。トムの病気は日増しに悪くなつてこるようだつた。

「すまん。ゴホツ、それで「」の中に「」覽の通りあまり多く入つてない。だから、自分で」「ホツ…稼げ」「ホツ」

「どうやつて？」

「薬草を摘んで、薬を」「ホツ…煎じて売るんだ」

「それでトムとフランクじいは……」

「要らないと思っていた知識が、いつどんな形で役に立つことになるか、それは誰も悟ることができない。肝に銘じておきなさい」

ウイルはゆつくつと頷いた。

トムの説教を聞くのは、明日から当分お預けになる。

「だが……お前のお父さんは、そして他の歴代の王たちも試練を楽しんでいた」

「え？」

「確かに危険な旅ではあるし、何から手をつければいいのか分からず八方ふさがりになることもあった。だが、彼らは旅を楽しんでいた。お前のお父さんはよく言つてたよ」

「トムは懐かしむように微笑んだ。

「試練だからと言つて、楽しんじゃいけないという道理があるのかい？」
「つとね」

「試練を楽しむ……」

よほどの勇気がある人じゃなこと口にできなに言葉だと、ウイルが思った。

試練を乗り越えてきた人たちとは、猛者の集まりだったのかもしれない。

「まあ、話はこの辺でやめておいつ。あとはお前が見つけなければならぬことだ」

「うん……」

試練の前に試練の秘密を知つてしまつたものは、試練を乗り越えることはできない。

そういう定めがあるらしい。

試練を乗り越えることができないということは、ペガサスに承認してもらえないということ。

なんて余計な規則なんだ。

ウイルは心の中でつぶやいた。

旅立ち 1 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。
次回やつと旅立ちです。 (TO-T)

次の日、ウィルはいつもよりも、かなり早く目が覚めた。
まだ外は暗い。

隣のベッドから、ローレイの寝息が聞こえる。

ローレイはウィルに背中を向けて寝ている。

ウィルはその背中をぼんやりと見つめた。

1歳しか変わらないのに、自分とローレイが体つきも精神的なものも全然違うことが、嫌でもこの一週間で分かった。

ウィルが旅立ちの日が近くなればなるほど、落ち着きが無くなり不安が増していくのに對し、ローレイは出発を明日に控えても悠然と構えていた。

いつかここを出るんだ！

今まで何度もこう思つただろうか。

太陽に照らされてキラキラと美しく輝く海を眺めながら、希望で胸を膨らませていた。

だが、こんな形でこの山奥を出ることにならうとは思いもしなかつた。

希望なんて少しでもあるのだろうか。

自分の目の前に、壮大な世界が広がるうとしている。ずっと待ち望んでいた「時」が、来ようとしている。

だが、もうすぐ訪れようとしている劇的な変化を前にして、ウィルはひたすらおびえ、うずくまるばかりだつた。

自分を情けないと思いもしたし、激しい自己嫌悪に陥りもしたが、今のウィルにはすべてを受け入れることは到底無理だつた。

朝食時。

みな無言でひたすら食べていた。

力チャヤリ、力チャヤリとスプーンやフォークが食器に当たる音だけが、鳴り響く。

ウィルは、この一週間よりも増して食欲が無かつた。

舌が正常に機能していないのだろうか。

口に何を入れても味がしない。それでも、ウィルは無理矢理朝食を詰め込んだ。

唐突にトムが口を開いた。

「船が出るのは12時。それまでに、まだ時間がある。ウィル、この後少し2人で散歩をしないか?」

外に出ると、朝日が眩しかった。

澄み渡つた青空に雲の白さがよく映えている。

「どうどうの日が来てしまつたな」

トムは苦笑いをしながら言つた。

「お前はずつとこの『時』が来ることを望んでいたが、外の世界がに出たらきっとこのエシミス島が恋しくなるだろう……ゴホツ、ゴホツ」

ホツ

「全然よくならないね」

ウィルは、トムをじつと見ながら言つた。

「ん?」

「病気だよ。咳がまだひどい」

「そうかな」

トムは弱々しく笑つた。

「でも今日は調子がいいほうだ。体がいつもよりも軽い」
二人は並んで、ゆっくりと歩いた。

二人とも、自分たちがどこに向かっているか、言わなくても分かつていた。

この先に海が広く見渡せる場所がある。

「ずっと帰りたかったんじゃない？」

ウィルがこの一週間ずっと聞いてみたいと思つていた質問。
なぜかなかなか言いだすことができなかつた。

「どに？」

「士族の村に」

「……確かにふるさとが恋しくなる時がなかつたって言つたら嘘になるが、俺はここ的生活がとても好きだつた

「閉じ込められていたのに？僕のせいです自由を奪われていたのに？」
トムは、ウィルが何を思つているか理解したらしく、顔をしかめた。

「ウィル、私はお前といられて幸せだつた。これからもできることなら一緒にきたかつたんだ。お前を実の息子のように思つていい。それはお前もよく分かっているだろ？」

ウィルはそっぽを向いた。

「トムは僕がいなかつたら、どにでも自由に生きる」ことができたんだ

「俺は自由だつたや。もともと。自由だつたからここに君と詠まる」
ことを選んだ

「とにかく気をつけるんだぞ。たまには手紙をくれ。士族の村の住所を書いた紙を、この前渡しただらう。宿から送ることができるよ」

「ウイルは別の方を向いたまま、無言で頷いた。

「よし。それはそうと、せしあたつての田…」「ホッ…目的地ちゃんと覚えているかい？」

トムは明るい調子をつぶさにながら言った。

「覚えているよ。華族の人のところだらう。僕のお母さんの妹の…」

…

「そうだ」

トムは頷いた。

「お前のおばに当たる人だ。私も昔よくお世話になつたよ。とても親切な人だつた。手紙でお前のことをちゃんと知らせてある。きっとお前のことを、よくしてくれるだらう。ぜひ俺がよろしくと言つてたことを伝えておいてくれ」

「分かつ」

「トムさまー、ウイル殿！」

向こうから、フランクじいが、はあはあ言いながら走つて来た。手には、ずだ袋を持っている。

「フランクじい

フランクじいは、ウイル達のところまで来ると、息が整つまで両手を膝に当てて下を向いていた。

「フランクじい、どうしたの？」

「ウイル殿……」

フランクじいは、顔をあげた。

「お別れを言いに来たのです。それと、これを渡しに……」

フランクじいは、手に持っていたずだ袋をウィルに差し出した。

「何これ？」

ウィルはうさんくさそうにうだ袋を見ながら聞いた。

「酔い止め、風邪薬などの薬が入っています。売れば少しは生活の足しになるでしょう」

「ありがとう」

ウィルはうだ袋を受け取った。

フランクじいの気遣いが、とても嬉しかった。

授業は恐ろしいくらいつまらなかつたが、思えばフランクじいにも随分お世話になつてきた。ウィルは胸が一杯になり、うだ袋をぎゅっと握りしめた。

ポトリ。

ウィルの額に何かが当たつた。

雨だ。

突然雨が、ザーッと音をたてながら降りだした。

ウィルは空を見上げた。

「晴れているのに……」

3人は、濡れるのもかまわずそこに突つ立つていた。

ウィルは、3人とも同じことを思つていることが、分かつた。

美しい。

縁が雨に濡れ、太陽に照らされ一層みずみずしく輝いている。

でもその一方で、なぜか胸騒ぎがした。

不気味だったのだ。

晴れと雨が混じるという滅多にない現象が、ウイルの不安を駆り立てる。

やがて雨が止んだ。

「トムおじさん！」

今度はローレイが走って來た。

少し顔が青ざめている。

ウイルは、すぐに何かが起きたことを悟った。

トムも何か察知したようで、じりじりからローレイの方に駆け寄った。

ローレイはトムのそばに來ると、間髪を入れずに言った。

「トムおじさん、下の町に王国の者達が来ていますー町の人が言つには、何かの偵察でこの島に。十族のこの前の報告のとおり……」

トムはゆつくりと息を吐いた。

そして言つた。

「すぐに出発だ。船に乗り込んで離れておくんだー。」

一同は一斉に走り出した。

旅立ち 2 (後書き)

読んでくださいありがとうございました。

トムとウイル、ローレイは町に向かって走っていた。

「いいか…客船のところについたら、すぐに中に入れてもらうんだ。
チケットは購入してある。ほら」

トムは、走りながらチケットを2枚差出した。
ウイルは受取るうと手を出したが、横からローレイがチケットを先に取った。

ウイルがチケットを安全に保管する能力もないと考えているらしい。
ウイルは、黙つたまま前を向いて走り続けた。
リュックが思つたよりも重く、息が切れる。

「トム、何の偵察でここに？」

「分からぬのか」

答えたのはローレイだった。

「お前を奴らは探ししているんだ。お前はやつらにとつて、邪魔な存在だからな！」

ウイルは血の気が引いた。

「大丈夫だ。見つかりはしないよ。お前がラゼルの子だと判断する材料を持っていないんだから」

トムはウィルを安心させるように言った。

それでも、ウィルは走るスピードを少し上げた。

ようやく町に入った時、ウィルは人が多いのに驚いた。今までに何度か来たことがあるが、自分の記憶がまちがつていなければ、もう少し静かな町だつたはずだ。しばらくして、ウィルはそわそわしている人が多いのに気づいた。ひそひそと立ち話をしたり、相手に耳打ちをしたりしている人がやけに目立つ。

「王国の者たちが来たから驚いているんだよ」「トムは、ウィルが周りの様子に疑問を抱いているのが分かつたらしい。

「この島は前にも言つたとおり、田舎でとても…ゴホッ…静かな町だ。王国の者が来るなんてこと…ゴホッ…はめつたにない」

「トムおじさん！」

ローレイが突然立ち止まつた。

「前方から……」

ローレイに言われて、初めてウィルは気づいた。

水色の軍服を着た者達が、こっちに闊歩して来ている。道の真ん中にできていた人ばかりも、その者たちが近付くと、両脇に消えていった。ウィルは震え上がつた。ここで、僕は捕まつてしまつたのだろうか……。

「大丈夫だ。さつきも言つただろ、う？」

トムが落ち着きをはらつた声で言つた。

「あいつらはお前の顔を知らない。きっと私のことも気付かないだろ、う。さあ、脇の人々の所に紛れ込むんだ」

3人は脇にいる人々の中に滑り込んだ。ウィルは大丈夫だと分かっていても怖かつたので、近くにいた大柄の男の後ろに隠れた。

「何の偵察だと思う？あんた」

横に立つていたエプロンを着た女性が、大柄な男に聞いた。どうやら夫婦らしい。

「さあ、誰も知っている者はいないんだ。誰かが悪いことをしたんじゃないか？それで、そいつを探しに来ているとか……」

「悪いことって、わざわざ王国の者が十数人もお出ましなんてどれほど……」

「ああ、もしそうならよっぽど悪いことをしたんだ。捕まつたら死刑じゃないか？」

王国の者達の列が近付いてきた。

近くの人々の話し声がぴたりと止み、あたりは静かになった。

闊歩する足音だけが聞こえる。

ウィルは男の影からそっと覗いた。水色の軍服がすぐ近くに見えた。肩にはワッペンがついている。

ペガサスの絵、つまり王家の紋章だ。

ウィルは恐怖心も忘れて、食い入るように彼らを見つめた。

その時だ。

彼らの一人がこちらを向き、一瞬ウィルと目が合つた。どきりとした。

相手はかなり若い。

ウィルとあまり年齢が変わらない。なぜか不思議な感じだ。

彼は、すぐに視線をもとに戻した。

何事もなくその一団は通り過ぎ、人々の話し声が次第に大きくなつていいく。

隣でトムがふーっと息を吐いた。

「さあ、さつさと船乗り場へ行こひ

3人は再び走りだした。

「まだ出発までに2時間ほどありますぜ」

その船員はなまつた話し方をした。

「いいんですかい？王国の者たちが來てると言つて、町は大騒ぎしますわ。見物しなくていいんですかい？」

「かまわない」トムはそつけなく言つた。

ローレイはチケットをその船員に渡した。

「125号室。入つて三つ目の部屋ですわ。まちがえねーよつ」

ウィルはトムを振り返つた。

トムは微笑んでいた。

「笑顔で別れることにしよう。ウィル元氣でな。手紙を忘れるなよ

ウィルは頷いた。

何か言おうと思つた。

だが言葉が見つからない。

後ろから、船員たちが荷物を運び入れながら、威勢のいい掛け声をかけているのが聞こえる。

「今までありがとうございました」

ウィルは「」もりながら、なんとかそれだけを言った。
本当は、言いたいことがたくさんあつた。
いろいろな感情が体の奥からぐつとじみあげてきていた。
でも、言葉にうまく言い表せない……。

ウィルは困惑して、トムを見上げた。

トムはゆっくりと頷いた。
ウィルは悟った。

そう。

いつだつて。

トムは分かつてくれている。

唯一の家族で唯一のウィルの理解者。

そして今、僕は「」の人から離れようとしている。

別離の悲しみと恐怖がウィルの心を一杯にして、ウィルは騒ぎたいといつ強烈な気持ちにかられた。

しかしウィルが次にしたことは、唇を噛んでトムに背を向け、船に向かつて歩き出したことだった。

それがウィルの精いっぱいの理性だった。

唇を血が出るほど強く噛んだ。

こんな時にトムを困らせてはいけない。

その気持ちだけが、ウィルを何とか奮い立たせた。

トムは、背後から心配なつにワイルの後ろ姿を見ていた。

トムは、とするほどひ弱な背中。

頼りない肩。

トムは目を涙でいっぱいませた。

「ローレイ君……」

「分かっています。僕に任せてくれ下さい。何年もの間のためになにか行を積んできただんです」

ローレイはトムを励ますように囁いた。

「あいつは……あいつは、ああ見えても……『ホッ』今はまだ頼りなくとも」

「分かっています。心配しないでください。僕は士族です。そういうトムおじさんの甥です。

その精神は、まだ完璧とは言えなくとも、しっかり受け継いでいるつもりです。そして、あいつが成長したら、その時は、トムおじさんから言われたとおり……」

ローレイは腰に提げている剣をぎゅっと握りしめた。

「うそ、ローレイ君。君がいるから、だいぶ『ホッ』安心できる。ありがと」

トムは再び笑顔を浮かべた。

「」おじさん、短い間でしたがありがとうございました。トムおじさんで会つことができて本当に光栄でした。お体をお大事に

ローレイは回れ右をし、船の中へ向かった。
さうとした、揺るぎない歩調で。

かくしてウィルの壮大な冒険が、幕を開けた。

旅立ち 3 (後書き)

読んでくださいてありがとうございます。

「暇だなあ」

ウィルは小さく独り言を言った。

ここ4日間、ウィルはほとんどテッキの上で過ごした。

海を眺める以外することがなかったのだ。

最初の日は何もかも新しく、興味をそそられるものばかりだったが、すぐにあきてしまった。

一番興味をそそられたのは、飛族。

飛族、別名 蟻族ありぞくは、平均的に身長が低い族で、主に郵便の仕事を請け負っている。

驚いたことに、彼らは海に漂う船にも郵便物を届ける。

「飛族」という名の通り、彼らは飛んで仕事をしている。だが、羽が生えているわけではない。羽を使っているのだ。正確に言うと、彼らは大ワシに乗つて、この世界を飛び回る。彼ら以外に大ワシを扱える人はほとんどいない。大ワシの大きさはここによつてそれぞれだが、大人は最低でも2メートルある。

ウィルは最初大ワシを見たとき、驚いて尻もちをついてしまった。

(ローレイはその瞬間をバツチリ見ていた)

「彼らは世界で一番働き者の族よ。あいつらは、ああ見えてかなり金持ちなんだぜ」

そうケンは言った。

ケンはこの船の船員で、チケット受付をしていた男だ。人なつっこい性格の持ち主で、ウィルがテッキにいる時に何度も話しかけて、今ではすっかり友達になっている。

「おめえさん、名前は？」

ケンにそう聞かれた時、ウィルはとまどつた。初日のことだ。トムの厳しい声を思い出した。

他人に自分の正体を明かしてはいけない。本名も絶対教えるな！「えつと……」

「ウォルト・キャラハンだ」

ウィルは振り返つた。ローレイが立つていて、ぶすっとした顔をしている。

「そ……そ……うなんだ。僕の名前はウイ……ウォルト・キャラリ……キャラ……キャラハン！」

ウィルは慌てて言った。

ローレイは、そのままその場を去つて行つた。

「そ……うか」

ケンはにっこりして言った。

かなり鈍感らしく、ウィルのぎこちない反応を何とも思わなかつたらしく。

「俺はケン・オハラ。よろしく。これから一週間仲良くなれ！」

もう一人友達ができた。

友達といつても3歳の子だ。

名前はカミーユ・オジエ。

母親に抱かれながら、船酔いで気分が悪くて泣いているのをウィルは見つけた。ウィルは酔い止めの薬を譲ることを申し出た。

「いいんですか？」

母親は目を輝かせて言った。

だがその母親は、ただでは薬を受け取ろうとしなかつた。

ウィルは困つて、その場を通りかかったケンに相談したところ、ケンは薬の値段の相場を教えてくれた。それで取引は無事に終わった。

それ以来、カミーユはウィルを見かけると、「お兄ちゃん！」と言つて、手を振つてくれるようになつた。

ウィルは再び溜息ためいきをついた。ケンが友達になつたとはいえ、ケンは仕事があつてずっと話はできない。カミーユは幼すぎる。ローレイは問題外。尻もちをついた所を見られて以来、ウィルはいつそうローレイを避けていた。

離れているつもりだつた。

だが、実際は違う。ローレイは絶えずウィルのことを自分の視野内にいれていた。もちろんウィルに気づかれないところからだが。ウィルが自分の主としていくら不服でも、ローレイは自分のなすべきことを理解していた。

ウィルとローレイが、精神的に全く違つのは、実は当然のことである。

ウィルは長年山奥でのんびり暮してきたが、ローレイは剣を持ち上げることもままならないくらい幼い時から、修行を積み重ねてきた。今自分がいるポジションを掴つかむために、日々の鍛錬たんれんを少しも怠らなかつた。

ウィルはバディがローレイだと分かつた時大いに失望をしたが、ローレイがそれ以上に失望したことは、容易に測り知れよう。賢族けんぞくかつラゼル王の息子とあって、それなりに期待は大きかつた。まさか甘つたれた、無知の少年だとは思わなかつた。

仕方のないことだ、ローレイはすぐに思つた。こんな山奥で世界から隔離されて暮らしていたら、誰だつて……。

そこで、ローレイは少しでも自分の立場を慰めるために、ウィルを観察して、何か賢族の素質のようなものを探すことに、専念し始め

た。今のところ、いくつ失望に終わっているが……。

「はあ」

ローレイもまた、ウイルと同じように溜息をついた。ローレイはウイルより気丈とはいえ、不安がないわけではない。現実をより知っているため、むしろその不安は大きかった。

これから自分たちがやろうとしていることは、1%でも成功する確率があるのだろうか。無茶なことだとあきらめて、エカルイア家の横暴に関しては何か他の策を練るほうがいいんじゃないだろうか。

いや。

長老はきつぱりと言った。ローレイがエシシニス島に旅立つ前のことだ。

我々士族や他の族の者が動くとなると、かなり目立つ。特に士族は、エカルイア家から危険視されている。スパイも続けるのが非常に困難になつてきている。海ももはやエカルイア家の監視下。よつて怪しまれるような行動はできないし、他の族との連携もうまくはできない。下手に動くと戦争が起きる。そしたら多くの犠牲者が出て、取り返しのつかないことになるだろう。

長老はローレイの目をまっすぐ見て言った。

ローレイ、なるべく小さく事を済ませるのがいいんだ。関わる人の数を減らす。そうすれば、犠牲者の数も減らすことができる。このことを肝に銘じておけ。

確かにその通りだ、とローレイは思った。だが、ローレイは納得できない。

「どうしてわざわざ「」のベボを選ばなければならぬんだ？」
このつた理由は、2つ考えられた。

一つは、ウイルがこんな無能な奴だと誰も思わなかつたこと。
もう一つは、こんな責任の重い仕事をやりたいと想つ人がいなかつた。

また、ローレイは溜息をつく。

酔い止めではなく、溜息止めの薬はあるのだろうか。

ローレイはまたと溜息をついた。

2人の少女 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
よろしければ、小説紹介のページで投票をお願いします。

「ドン、ドン、ドン」

誰かが激しく部屋のドアをたたいた。

船に乗つて4日目の朝。ウイルはまだ着替えの途中だつた。ウイルがローレイを見ると、ローレイは顎でしゃくつてドアを開けるよう命図した。

ウイルは指図にむつとしながらも急いで着替えて、ドアを開けた。

立っていたのはウイルと同じくらいの年の少女だつた。頭の上から薄汚いマントをすっぽりとかぶつていたが、肩に優雅にかかっているブロンドの髪にとても不釣合いである。

「何のようですか？」

「あなたが酔い止めの薬を持っていると聞いて……」

少女は息を弾ませて言つた。

「私の連れが、酔いが激しくて大変なの。少し分けてもらえないかしら。もちろんルクはちゃんと払うわ」

少し気取つたような話し方だつた。差し出した水晶には、身なりに似合わずかなり入つている。三千ルクのメモリ近くまで入つていた。

「かまわないですよ」

ウイルはベッドのある所にある薬を取りに行つた。

「でも、少ししかありません。これで最後になります。はい、どうぞ」

「どれくらい飲めばいいのかしら？」

少女は受け取った袋を持ち上げて言った。

「一日二回です。朝と夕に一つまみずつ。二回分はあると思います」

「三回分……」

少女は心配そうに言った。

「まあ、仕方ないわね。ないよりはマシだわ」

少女は自分のバッグに袋をしまった。そのバッグが、華やかな飾りが施してあり、見るからに高価な品物であることにウイルは気付いた。

「それで、ええーっと。いくらかしら。一百ルクくらい？それよりもっと？」

「いいえ」

ウイルは驚いていった。

「二十ルクで結構です」

「二十ルク？」

少女は目を丸くした。

「あら意外と安いのね」

ウイルの水晶に二十ルク移すと、少女はお礼を言つて去つていった。ウイルが部屋の方に向き直ると、ローレイがじつとドアをにらんでいるのが目に入った。

「何だよ？」

「さつきのやつ……」

ローレイはそのまま黙り込んでしまった。決まってこうだ、ウイルは苛立ちながら思った。き誰も何も教えてくれない。

ウイルはその理由が分かっていた。
まるつきり信用されていないのだ。
能無しだと思われている。

その日は雨の日だったので、ウイルは部屋の中にいた。
もちろん、ムカツクローレイも一緒だ。ウイルは、「基本薬学」の
本を開いた。まだルクに余裕はあるが、いつ不足するか分からない。
ルクを貯めて損はないだろう。

読み始めて10分もたたない時。

「ドン、ドン、ドン」

またドアをたたく音がした。

ウイルがまたドアを開けると、立っていたのは先程の少女だった。
今度はもう一人別の少女が後ろに立っている。後ろの少女は、先ほ
ど薬を買いにきた少女の髪が優雅にカールしているのに対し、スト
レートの黒髪だった。

ウイルはドキリとした。

もしかして、渡す薬の種類を間違えたのだろうか？

それで酔いが悪化して、クレームをつけにきたとか？

「な…何か？」

「ずうずうしいことは十分承知よ」

少女は、承知しているとは思えない口調で言った。

「だけど、助けが必要なの。しばらく、この部屋にこもるからだ
ないかしら？」

「ええ…つと」

クレームでなくて、ウィルはほっとしたが、それと同時に思わぬ要求に困惑した。

「**駄目だ**」

後ろから鋭い声がした。もちろんローレイだ。

「俺たちは見ず知らずの人間をやすやすと中に入れるほど、無用心のバカじゃない。他をあたつてくれ」

「…だそうです」

ウィルは申し訳なさそうに言つた。

だが、少女は引き下がらなかつた。

「他はあたしたちが信頼できないのよ。お願ひ、ちゃんと事情は話すわ。ルクもいくらだつて払う」

少女はウィルの手を掴んだ。

「ね、お願ひ」

ウィルは手を振り払うことができず、困り切つて後ろを振り返つた。

「**駄目だ**」

ローレイは迷わず繰り返した。

「俺たちは、ただでさえ人よりも用心」

「あ！」

突然後ろのほうに立つていた少女が、小さく叫んだ。

「ローズ。あの男が」」つちに向かつてくるわ。何か書類を読んでいて、私たちにはまだ気づいてはいないけど。ビツじよつ！ 気づかれるわ

「もう！」

ローズと呼ばれた子はそう言つと、突然ウィルを突き飛ばし、後ろ

の子の手を掴んで部屋の中に入り、ドアをバタンとしめた。

ウイルは当然後ろにひっくり返り、Jの船では記念すべき2回目の尻もちをつくなつた。

「はあ、なんとか助かつたわ」

ウィルは立ち上がりながら、ブーブーとローズに向かつて抗議した。
ローズは全く意に介さないようで、にっこりした。

「あ、私はローズ。ローズ・アルカデルト。こつちはリイ。リイ・ミンスー。よろしく」

「おい」

「一レイが食ってかかるた

「俺たちは君らにかまつてないんだ。下手にめんどこなことにはまきこまれたくない。今すぐ出て行ってくれ。俺が剣を抜く前に

リイとローズから紹介された子は、怯えて数歩後ろに下がった。だが、ローズの方はといふと、怯えるどころか数歩前に歩み寄った。

ローズは顎をつんと上げた。

「めんどうに巻き込まれたくないと言つたけど、無駄よ。明日の午後には、一いの船に乗つてゐる人全員が巻き込まれるわー。」

ローレイは眉をひそめた。

「ここからは取引よ。私たちは、あなた達に重大な情報を教える。

代わりにあなたたちは、私たちをかくまつ

「その情報が、俺達にとつて重大かどうかはわからないじゃないか」

「今さつき言つたでしょ！」

ローズはイライラした調子で言つた。

「船に乗つてゐる人全員が巻き込まれるの

「あの……」

ローズの背後に立つてゐた、リイが言つた。

「本当に聞いていた方がいいと思います。もしかしたら、逃れる手段が何かあるかもしない……。うまく言えないんですけど、本当に重大なことです。信じてください

リイはじつとローレイを見つめた。

さすがのローレイもリイの必死な様子に少し考へてるようだ。

「君たちのカラーは？」

「肌色。つまり、へいそく平族よ」

ローズが答えた。

「平族？」

「ええ、悪い？ もしかしてあなたたちは平族奴隸派の人達？」

ローズは軽蔑するように言つた。

「平族奴隸派？ 何それ？」

ウィルが聞いた。

「ご存知ないのですか？」

リイが目を丸くして言つた。

「平族奴隸派というのは、簡単に言えば、私たち平族が他の族の奴隸となるべき身分だと考へてゐる人達のことを指すんです。平族奴隸派は今のところ少数派ですが、最近増えてきているんです。あなたたちは……」

そこでリイは口をつぐみ、不安そうにウイルを見た。

「もちろん反対だよ！ そんなのひどい！」

ウイルはその話に憤慨しながら言つた。

リイがにつこりした。

「あなたは？」

ローズがローレイにシンとした表情で聞いた。

「もちろん反対派だ。しかし……」

「しかし？」

「それとこれとは話が別だ。まだ君たちの取引を飲んだわけではない」

ローズはフンと鼻をならした。

「あなた、踏ん切りが悪いわね」

「疑問に思うことがある。別に軽蔑しているわけではないが、平族の人たちは貧しい人が多い。なのに、お前たちは大人でもないのにルクをたくさん持ち、そのような（ローレイはローズのバッグを指差した）高価なバッグを引っさげている」

「大人でもないって、それはあなた達も同じでしょ？ それに、このお金もバッグも紛れもなく私たちのものよ。盗んだりなんかしていない。命を賭けてもいいわ！」

ウイルは、ぽかんとしてローズを眺めていた。

今まで女の子とかかわったことがないため、ローズが珍しかった。

ローレイが必死に考えをめぐらしている間、ウイルは女の子ってみんなこうなのだろうか、と呑氣のんきに考えてた。

「取引成立ということでいいかしら？」

ローズは左側の髪を耳にかけながら言つた。

「ああ、そうしよう。」

ローレイはしぶしぶ認めた。

「それでは、まず」こちらの情報からね」

ローズはここで大きく息を吸つた。

「明日の午後、この船は海賊に襲われるわ！」

2人の少女 2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
アクセス数が思つたよりも多くて、感激しています。
ですが、まだ評価が0なので、よろしければ一言でもいいのでコメントをお願いします！

「今なんて

「いや」

ウイルが聞き返そうとしたところを、ローレイが遮った。

「その情報はどこから手に入れた？しんぴょううせい信憑性はどれくらいある？正確な時間はわかるのか？そして」

「ストップ、ストップ！」

ローズが手を上げてうなざりしたように言った。

「ちゃんと答えるから一問ずつきいてくれる？まづ情報源はどこから」と

「さつき私が、こっちに来ると言っていた男です」
リイが後を引き取つて言った。

「ですが、あの男から話を聞いたわけではなく、あの男に届けられた手紙を読んで知ったんです。私たちはあなた方とは違つて大部屋に宿泊しています。つまり、他の人も一緒に寝るわけです。隣がある男でした」

「さつき君はその男に見つかると大変みたいなことを言つていたよな？それは、どうしてだ？」

ローレイが聞いた。

「ローズが落ちている手紙を見つけて、読んだんです。手紙はその男のベッドの下に落ちていました。ローズが読んでいる時、その男は部屋にはいませんでした。けれど、帰つて来たんです」

「あたしはとつさに今手紙を拾つたばかりのような振りをしたわ！でも、その男は察したみたい」

ローズは頃垂れた。

リイはその横で小刻みに震えながら手で腕をさすつていた。

「それ以来私たち、あの男に監視されているみたいで……」

「手紙には何て書いてあつたの？」

ウイルが恐々（こわごわ）と聞いた。

「仲間からの手紙だつたわ」

ローズが答えた。

「」いわらは順調。明日の午後、予定通りこの船を襲う。この前決められた持ち場に必ずいるように。取引相手に金を渡すのは、バヤン島に着いた後。襲撃時に何かまずいことがあれば、赤の服を着てデッキに立つていろ

「正確な時間は書いていなかつたんだな」

「ええ」

ローズは頷いた。

「他に仲間は？」

「見たところでは、もう一人いると思う。その男のもう一方の隣の人。趣味の悪いデザインの毛糸の帽子をかぶつた男で、あたしは一人がひそひそ話で何度も話しているのを見たわ」

「その帽子男が、手紙に書かれてあつた『取引相手』か？」

ローズは首を振つた。

「そ」までは分からな
いわ」

「私の推測では……」

リイがためらひながら言った。

推測では？

「この船の船員が取引相手ではないかと思っています。何の取引なのか、これも推測の域です。けれどもしが海賊ならお金を出して、船に関する詳しい情報を手に入れようとしています」

「確かにその通りだな」

口にレインを頼んだ

たが、その詠が全詠眞実だと示す詠撰はあるか?」

「次マニマバ悪ハツメ

アーティストの名前を記入する欄です。

「あたしたちが、あなた達に必死に助けを求めてる。これが大きな証拠よ！早くどうにかしないと、あたしたちは明日捕らえられるのよ！ まんまとあのアホ顔の男たちに！」

ローレイは右手で顎^{あご}を掴^{つか}みながら、辺りを往つたり来たりし始めた。しばらく4人とも黙りこくつたままだつた。

聞こえるのはローレイの足音のみ。

ふと足音が止んだ。

ローレイは大きくふーっと息を吐いた。
そして。

「ソニーを脱出するしかないな」と

一
脱出

ウイルは蒼くなりながらつぶやいた。

どうして僕はこんなにつけていないのだろうか。……

これから旅は、ずっとこんな風に続いて行くのだろうか。もしさうなら、ゲームオーバーはそう遠くない未来にやつてくる可能性が高い。……。

「あの……」

「リイだ。

「脱出はダメだと思います」

「どうしてそう思うんだ？」

「脱出ボートはもうあの男が壊している可能性が高いと思うんです。手紙の内容から、入念に計画を立てていたことが窺えますし……。それに、ボートで漕ぎ出すのも得策だとは思えません。海に関する専門知識を兼ね備えているならまだしも、素人がすると遭難する可能性が高いと思います」

「確かにボートで脱出するのは危険だわ」

ローズが賛同した。

「それならどうするの？ やすやすと捕まるの？」

ウイルが聞いた。

「もちろん、そなはなにようとか案を考えるのよ……」

ローレイは再び往つたり来たりをし始めた。

「あの……」

「もちろん、今度もリイだ。

「何だ？」

「私に考えがあるんです。少しリスクが高いけど、何もしないで捕まるよりはマジだと思います」

「考えを聞かせてもらおつか。君なら信頼できそうだ」

「君ならって、ちょっと誰と比較して言つてんのよ……」

ローズがローレイに食つてかかった。「なら」とこうといふに皮肉

が込められていたのを、聞き逃さなかつたらしい。

ローレイはローズを氣にも留めず、リイに話すよつ合図した。

「あの……」

今度はリイではなく、ウィルだ。

ウィルは無視されないように、手を挙げて言った。

「何よ？」

ローズが機嫌の悪い声を出した。

「僕まだ分からぬことがたくさん……」

「何が分からぬのよ？」

聞かぬは一生の恥だ。ウィルは自分にそつ言い聞かせて、口を開いた。

「海賊とは一体どんなことをするのか。それと手紙に書いてあつた、バヤン島つてどこにあってどんなところなのか。僕は……訳ありで普通の人よりも物事をよく知らないんだ」

ウィルは俯きながら付け加えた。

ローレイはやれやれといったように頭を振りながら、ベッドに腰かけた。

「君を相手にすると、時間がかかるな」

「はい？ 常識がないつていつても限度があるでしようが！ 22の島を全部知らない人はざらにいるけど、バヤン島を知らない人はめつたにお目にかかるないわ」

ローズは感心したように言つたが、それがウィルをかなりへこませた。

聞くは一時の地獄……。

「ローズ、失礼よ。訳ありの『J様子なのに……。私が教えてあげますね』

ウィルは嬉しくて感謝の眼差しをリイに向けた。

親切な人だ。

こんな人が正真正銘の女の子に違いない。

「海賊は野族の者たちの一つの集団なんです」

「野族？」

「野族とはならず物の集団です。もともと、野族という族は存在していなかつたんですが、さまざまな族から集まつた者達が、自分たちのカラーを灰色に染めて、野族と名乗つたんです。野族はいろいろな悪事に手を染める者が多く……」

「多い」というかほとんど全員でしょ？」

ローズが口を挟んだ。

リイは頷いた。

「そのとおりね。それで、海賊とは一般的に野族で海で悪事を働く者達のことを指すんです。具体的には船を襲つて盗みを働くのはもちろん、人身売買も行っています」

「人身売買！？」

「ええ」

リイの顔に影が差した。

「先程話した平族奴隸派の中心は野族の者達で、平族を手当たりしだい捕まえでは奴隸市にかけるんです。最近では、あまり力のない族の者も市場に狩りだされます」

「市に出された後、どうなるの？」

「貴族の者達が買うのよ」

答えたのはローズだつた。苦々しそうな顔をしている。

「貴族と野族は表立つては関わらないけど、裏では密接な関係を結んでいるわ。上品な顔をして踏ん反り返つていてるくせに、裏でやることはやってるのよね」

「明日の午後、僕たちは捕まつたら……」

「私は確実に市場行きです。あなたたちは、どうかは分かりません。私、あなた方のカラーを知りませんから……」

「そうよ！」

ローズは突然思い出したように言つた。

「私たち、まだあなた達の名前とカラーを聞いていないわ！」

「言う必要があるのか？」

ローレイが抑揚のない声で聞いた。

いつのまにかベッドに仰向けに寝ている。

「当然よ！ 私達はちゃんと名乗つたじゃない！ 人には言わせておいて、自分達は言わないつもり？」

「俺はやすやすと人に名乗らない。名乗るのは必要性がある時だけだ」

「卑怯者！ 私達には名乗らせておいて」

「嫌なら名乗らなければよかつたんだろ」

ウイルは近くにいるローズの熱が上がつていくのを感じた。
助けを求めてリイを見る。

「ローズ、落ち着いて。何か事情があるみたいだし、仕方ないじゃない。とにかく、今は自分たちの身を守る策を練るのが先よ」

「そうだな」

「その時だ。

「ドンドン」「ドアをノックする音がした。

「誰かしら？」

ローズが小声で言った。

例の男ではないかと、警戒しているのが分かる。

ウィルはローレイも警戒しているのを背中で感じた。

しかし。

「おいウォルト！ いねえのか？ ウォルト！」
ケンだ。

「大丈夫だよ。船員のケンだ」

そばで、ローズとリイが力を抜くのが分かった。
ウィルはドアを開けた。

「寝てたのかい？」

ケンは笑って言った。

「おや、友達？」

「うん」

ウィルはローズ達をちらと振り返りながら言った。
同時に田の隅でまだ警戒を解いていないローレイを捕らえた。

「ほらよ」

ケンは一枚の紙をウィルに渡した。

何かのプログラムが載っている。

「何これ？」

「今日『ティナーパーティ』があるんだ！ それはその時の催しのプログラムよ。第二食堂で。船長も顔をだすぞ」

「へえ～」

「音楽の演奏とかもある。楽しいからみんなで来いや。きっと知り合いも増えるぞ。王都リフラードがあるオーラムステッラ島にはまだ6日ほどかかるから、知り合いを増やして楽しんだほうが得だぜ」

オーラムステッラ島。

おばさんの家があるところだが、エカルイア家と貴族もいる世界の中心。

「分かつた。ありがとう」

ケンは頷くと、去つて行った。

「どうするの？出るの？」

ローズがプログラムの紙を覗きながら言った。

「この状態では出れないんじゃない？」

ウイルは惜しそうに言った。

音楽演奏を聴いたことがないので、ぜひとも参加したかったのだ。

「出席したほうがいいと思います」

リイが言った。

「え？」

「だって、出席しなかつたら逆に危ないと思います。特にあの男。私達は奴隸市には最適だから、絶対に逃げられたくないはず。多分このパーティーにはほとんどの人が出席するでしょう？そしたら、男にとつては人に見られず私達を捕まえておく絶好のチャンスになります」

「なるほどね。人と一緒にいる方が安全ね。男達はまだ他の人々に襲来のことを知られたくないはずだから」

ローズが頷きながら言った。

「そうだな」

ローレイも納得したようだ。

やつた！

音楽の演奏が聴ける！
ウイルは能天気に喜んだ。

「それはそうと」

ローズがウイルの方を向いた。

「あなた、名前はウォルトっていうのね。苗字は？^{名前}くらいいい
でしょ？呼ぶ時に困るわ」

「え…えっと…」

「ウォルト・キャラハンだ」

ローレイが脅すような目つきでウイルを見ながら言った。
「名前くらいはいいだろ？俺はローレイ・ジャティス」

「歳は？ 私とリイは一人とも15歳よ」

「き…君たちと同じ歳だよ。ただローレイは一つ上」

「ふうん」

ローズは何かを探るような目で、ウイルを覗きこんだ。
ウイルは冷汗がたれた。隠し事するのは、得意ではない。
「さてと」

ローレイが切り出した。

「ディナーパーティまだ時間がある。作戦会議をしようか？」

ウイルとローズは、同時に膨れ面をした。

リイに特定して言われたセリフだと、はつきり分かったからだ。

2人の少女 3（後書き）

読んでくださいってありがとうございます。よろしければ、感想をください。

「簡単に整理すると、2つの策があります」
リイが言った。

一同はベッドに腰かけていた。
ウィルのベッドにローズとリイ、向かい合わせのローレイのベッド
にローレイとウィルが座っている。

リイ以外の3人は静かに話を聞いていた。
リイは、ローズのはもとより、早くもウィルとローレイの信頼をも
獲得している。

「先程脱出の話があつたけど、まずその前に船長さんとか他の人に
話すこと。そして、この船の進行方向を変えさせる。あともう一つ
は、隠れる。脱出案はさつきも言つたようにやめた方がいいと思
います」

そこでリイは話を切り、他の人の反応を待つた。

「そうだな……」

ローレイは腕組みをして考え込んでいた。

「最初の作戦はより簡単で安全かもしれないけど、私達の話を信じ
てくれるかしら?」

ローズは首をかしげながら言った。

「私もそれを考えました。私達まだ若すぎて、信じてくれる可能性
は低いと思います。そもそも、私達があなた達に助けを求める理由
は、あなた達も子供だったからです。大人の人は相手にしてくれな
いと予想したからです」

「手紙を入手すれば、立派な証拠になるんじゃない?」
ウィルが聞いた。

「確かに……。キャラハンさんの言うとおりですけど」

「ウォルトでいいよ。丁寧語も使わないで。同じ歳なんだから」

「リイは一瞬困惑したらしく口をつぐんだが、すぐにウイルに向かってにっこりした。

「ありがとう、キャラ……ウォルト」

「俺に対しても同じようにしてくれ。それはそりと、さつき何か言いかけてたな」

「あ、はい。えっと……手紙のことだし……だつたわね。もう、手紙は焼かれて無いんじゃないかと思つて……」

「確かに、そうね。私が読んだ後だしね。それに持つていたとしても、隠すことも容易だしね」

「でも、試してみる価値はあると思つた。特に今日はティナーパーティだから」

リイはウイルのそばに置いてあつた、ティナーパーティの案内をちらと見ながら言った。

「ティナーパーティがどうかしたの？」

「さつきティナーパーティに出席しないと狙われる可能性があるって言つてたでしょ？人がいるから。それを、私達が利用するの大部屋に侵入するのが、容易になるとと思つた。ただ……」

「俺がこいつがしないといけない……だな？」

ローレイはウイルを親指でくいっと指さした。

リイが申し訳なさそうに頷く。

「私がローズが食堂にいなかつたら、あの男が探しにくるかもしないので」

「かまわない。俺がやる。お前はここにつらと一緒にティナーパーティに出席しているんだ」

ローレイはウイルに向かつて言った。

「分かった」

ウイルは何でもないよう答えたが、内心すこくほほつとしていた。

「でも無い可能性が高いだろうな。無かつたらどうするんだ？」

ローレイは立ち上がりながら言った。

「それでも、とりあえず船長に言つてみたら？ 失敗しても危険はないでしょ？」

ローズが言った。

「そうね。まあ、駄目でしょうけど。それからのことは、『ディナー・パーティの後で考えましょう。襲来するのは明日の午後つて書いてあつたし……』」

「午後つて一体どれくらいの時間に来るんだろう？ 暗くなつてからかな？」

ウイルは不安げに聞いた。

「それはないとと思つわ」

「どうして？」

「ローズが言つた手紙の内容を覚えてる？ 何か問題があつたら、赤い服を着てデッキに立つようにつていう件。くだりもし襲来が夜だつたら、あの男が赤の服を着てこるかどうか判別しにくいでしょ？」

「どうして白の服にしなかつたんだろう。そしたら、夜でも見えるのに。夜の方が襲いやすいと思つんだけど……」

「おそらく、原因は船員ね」

「船員？」

リイは頷いた。

「うん。船員の服装は」

「白だ！」

ウイルはそう言つたあと、口を閉じリイをじっと見つめた。

「リイって、わざわざから思つてたんだけど、本当に頭いいんだね。僕と同じ年なのに……」

リイはそう言わると、ぱっと頬を赤らめた。

「あ…ありがとうございます」

「もう一つ、夕方に襲う理由があると思つわ」

ローズだ。

「何?」

「奴隸市は夜に行われるのが決まりなの。法的には認められてないことだからね。ま、今の王は見て見ぬふりを決め込んでいるけどね」「見て見ぬふりならまだいい。アルノー王はその奴隸市を推奨しているというウワサを俺は聞いたことがある」

ローレイが厳しい顔つきをしている。

ウイルは自分の足元を見つめた。

ローレイの言つウワサとは、おそらく士族のスパイから得た情報。ということは、ほぼ確実にアルノーは奴隸市を……。

ひどい。

ウイルは唇を噛みしめた。

今まで、アルノーの横暴とか聞いても、あまりピンとこなかつたのが正直なところだ。

でも、今平族であるリイを目の前にして怯えている様子を見ると、アルノーの存在が悪い意味で増してくる。

それと同時に、自分にかかっているプレッシャーの重さが胃にズンとのしかかる。

「さて、行こうか

ローレイがそう言つたのは、陽が沈み始めたころ。ティナーパーティの時間。

一同は無言だった。襲来はまだとしても、やはり緊張はする。

「できるだけすぐに戻つて来る。ついでに非常時のポートも見てく

るが、まあ駄目だろうな

「あの、ローレイ？」

リイがおずおずと聞いた。

「なんだ？」

「もし、ポートが壊されてなく、あなたにも余裕があつたら、ポートを一つこの部屋に持つてきてくれませんか。なるべく、人に見つからないように……。大変危険だと思いますが、でも私良いことを思いついたんです」

ローレイは頷いた。

「分かった」

それから、ローレイはウイルの方を振り向いた。

「お前は、ディナーパーティの会場を決して離れるな。分かったか？」

まるで父親が子供を諭すような口調だ。

「分かってるよ」

ウイルはむくれながら、つぶやいた。

ローレイはウイルを一瞥した後、そのまま軽い足取りで部屋を出て行つた。

食堂は予想以上に綺麗に飾り付けられていた。

カーテンやテーブルクロスなども上等なものに代えられており、音楽演奏が行われるステージも立派に揃えられている。

「すごい！」

ウイルは感嘆した。

「そうかしら？」

そう言つたのは、ローズだ。あまり驚いていない様子だ。

人も、こんなに船に乗つていたのかと思つくらい、集まつていた。

「よお、遅かつたな。ウォルト。来ねえんじゃねえかと思つたぜ」ケンがにこにこしながら、近づいてきた。

手には不思議な形をした楽器を持つてゐる。

「ケン！ その楽器は何？ ケンも音楽演奏をするの」 ウィルはまじまじと楽器を見ながら聞いた。

「おめえさん、知らねえのか？ 我ら船族は皆楽器を演奏するんだぜ。海の上の演奏は最高だからな。それで、これはピーフォという楽器よ。笛の仲間だ」

ケンは、ピーフォをウィルに差し出した。

ピーフォは蛇みたいなクネクネした形をしていた。

「この楽器は全部こんな形をしているの？」

「私、この楽器知つているわ」

横からローズが口を挟んだ。

「確かに、木の枝の中をくり抜いて作る楽器よね。木の名前もピーフオじゃなかつた？」

「その通りだ、お嬢さん」

ケンは感心したふうだつた。

「この楽器の製造法を知つてゐる人は、船族以外はほとんどいないと思つてたんだが……」

「あの、ケンさん？ 今日は立食パーティなんですか？」

リィがあたりを見回しながら、聞いた。

「おお、そうだ。存分に楽しんでくれ。おっと、俺は船長室に行かないといけねえんだつた」

「楽しみにしてるよ。演奏」

そう言つて、ウィルはケンにピーフォを返した。

「ああ、また後でな」

ケンはそう言つと、その場を去つて行つた。

ウィルは、改めて会場を見渡した。

どのテーブルにもおいしそうな料理が並んでゐる。

料理の良い香りが、ウィルの鼻孔をくすぐつた。

「さあ、食べようよ」

ウィルは後の一人に嬉しそうに言った。

人々の賑わい、素敵に飾られた会場、立派な音楽ステージ、よだれが垂れそうな料理。

これらを前にして緊張感を持てどこのは、ウィルには無理な話だ。周りの人々を見ると、もう皿を手に取り、食事にありついている。

ウィル達一行も、他の人がいないテーブルに寄り、食べ始めたことにした。

「い…こんひやにおいひい…も…もひよを食べたのは……初めてだよ！」

ウィルは、口いっぱいにパスタを詰めながらも、一生懸命に話そうとした。

あまりのおいしさに、ウィルは心から感動したのだ。

「そうかしら……。それより、その下品な食べ方やめなさい！ 見てるこっちが恥ずかしいわ！」

ウィルは「ゴクリ」と食べ物を飲み込むと憐れむように言った。

「君って感受性が乏しいんだね」

この幸せが味わえないなんて、と本気でかわいそうに思つたのだ。

だが、ローズはフンと鼻をならし、キツとウィルをにらみつける。

「よくもそつ能天氣でいられるわね。もしかしたら、私達はバヤン

島に連れて

「ああ、そうだつた！」

ウィルは、ローズを全く無視してリイの方を向いた。

「まだバヤン島のことを聞いていなかつたね」

「そつだつたわね」

リイはグラスの水を一口飲むと、それをテーブルに置いた。

「バヤン島はね、野族の島なの。野族の者達の聖地とでも言つのか
しい。この世界で一番田に危険な島なの」

「一番田？」

ウイルは首をかしげた。

「ええ、一番田は枯れた島と言われている」

「ポルテフラ島！」

珍しく自分が知つてゐたので、ウイルはやや興奮して言つた。

「大きい声出さないでよ。誰でも知つてることよ。ポルテフラ島
なんて」

ローズは皿の上の肉をフォークでつつきながら言つた。

無視されたことに相当機嫌を悪くしたらしく、声には毒が含まれていた。

「ローズ」

リイは落ち着いた声で、ローズをたしなめた。
だが効果はない。

「ウオルト、あんたバヤン島がどうへんにあるか知つてるの？」
「知らないよ」

ウイルはローズから皿をそらしながら言つた。
まともに見ると、迫力があつて怖い。

「あんた一体どういう教育受けてきたのよ！ あのね、バヤン島は
この船が旅だつたエシミス島とオーラムステッラ島のちょうど中間
にある。今日はこの船がたつて4日目。オーラムステッラ島まで
はあと6日ほどかかるつて、あのケンという船員が言つてたわよね。
つまり、バヤン島はこの船の近くにあるということなのよ」
「さうか。だから、明日この船を襲うのか。その方が都合がいいか

「うら

ウイルは、怯えるどころか、むしろ感心したように言つた。

今は、何を言われても現実のこととして認識できない。

何しろこんなにすばらしいパーティの最中なのだから。

ローズは呆れたように頭を振ると、食べることに専念し始めた。

ウィルに何を言つても無駄だと思つたらしい。

「あ！ ローズ、男たちがいたわ！ ほらあそ！」

リイはそう言つて食堂の一角を指した。

ウィルが急いで見ると、団体の大きい男2人が、対照的に立派な服を着た一人の老人と談笑している。

男たちは、ウィル達に背を向けるようにして立つており、2人のうち1人はスキンヘッドで、もう一人は髪がぼうぼうに伸びていた。少し離れた背後にはケンが立っている。

ケンはウィルと目が合つとウインクをし、手で老人を示した。

「あのおじいさん、きっと船長さんだわ」

リイが小声で言つた。

「何か情報を聞き出してるのかしら」

ウィルの横でローズも船長達を、じつと見てい。

やがて、会話が終つたらしく髪が伸びているほうの大男がこちらのほうを向いた。

ひげもぼうぼうに生えている。

ローズとリイはとっさに、男に対して背を向けたが、ウィルが見たところ、男はローズ達に気づいてないようだ。

ウィルは皿を持つたまま、男たちをじつと凝視し続けた。

スキンヘッドの男は近くのテーブルに寄り、ワインをグラスに注ぎ始めた。

毛むくじやらの男も近づき、自分のグラスを差し出した。

二人はにやにやしながら、グラスを片手に何やら語りだした。

談笑している二人を見て、ウィルは背筋がゾクつとするのを感じた。

わざわざの幸福感はいつの間にか消えている。

男達が怖かったからではない。

突然激しい嫌悪感が、ウイルの体を駆け巡ったからだ。

急に食欲がなくなつて（既に十分食べていたのだが）、ウイルが皿をそつとテーブルに置いたとき、パツパカパーンと楽器の音がした。ステージの方からだ。ステージの壇上には、華やかな衣装を着た船長が立つていた。にっこりと乗客達に笑いかけている。

「みなさん、こんにちは。そして、初めまして。私はこの船の船長を務めさせていただいている、二ヶ・ドーラと申します」そこでドーラ船長は口をいつたん閉じ、にっこりとして乗客達を見回した。

「エシミス島を発つてから今までの日々は、花の月らしい非常に穏やかな気候でした。波も荒れることなく、比較的快適に過ごせたのではないでしょうか？」

この世界の一年は、4つの月に分かれている。穏やかな気候で花の咲き乱れる、花の月。年中でもつとも暑くなる、海の月。木々が美しく紅葉する、山の月。年中でもつとも寒くなり雪も吹き荒れる、風の月。1つの月は101日。今日は、花の月87日。もつすべ、海の月がやつてくる。

「皆さんに残念なお知らせがあります」

ドーラ船長はやや声を落して言った。

「明日、このうららかな天気がぐずれるということです。蟻族から新聞を受け取つた方の中で、既にご存知の方もいらっしゃるかもしれません。風が吹き荒れ、雨も激しくなるそうです」

「最悪ね……。私達、閉じ込められたつて感じじゃない？」

ローズが唇を噛みながら言った。

会場の乗客達も、不安そうな顔をしてガヤガヤと話しをし始めた。

「こちらは、豪雨に船が耐えられるかどうかを心配しているのだが。

「心配には及びません！」

ドーラ船長は声を張り上げて言った。

会場は再びしーんとした。

「もちろん、大丈夫ですとも。私が、自身を持つて断言させて頂きます。過去にもこの愛しい私の船は、すさまじい嵐の数をなんなくくぐりぬけてきたのです。明日の豪雨なんかには、きっとびくともしないでしょ！」

再びドーラ船長は、乗客達に笑いかけた。

会場が、少しずつ落ち着きを取り戻す。

「さて、そろそろお待ちかねの音楽ステージを始めましょう！」

会場が割れんばかりの拍手で溢れた。

だが、その拍手にウイルは加わっていなかつた。

相変わらず一点に目が吸い寄せられていたからだ。
もちろん、あの男達。

スキンヘッドの男がポンと相方の背中をたたいているのが見える。
そして、ゆっくりと食堂の出口の方に向かって歩き出した。

「さよっとウオルト！」

ローズはそう言つと、ウイルの袖を掴んでぐいと引き寄せた。

「何ぼさつとしてるのよーほら、あの子がさつきからあなたに手を振つてるわよ！」

見ると、カミーユだつた。

無邪気に大きく手を振つてゐる。

「ローズ！ リイ！ スキンヘッドの男が、さつき会場を出て行つた

戻した。

男は既に外に消えていた。

ウィルは胸騒ぎがした。

「すてきな演奏ね」

隣でリイがうつとりして言った。
もう、演奏が始まってるらしい。
でも、ウィルの耳には全く届かない。
何か忘れているような……。

ケンが体を大きく揺らしながらピーフォを弾いている。
とても気持ちよさそうだ。

ウィルは自分に問いかけた。
何か忘れてる。
何を？
思いだせ。

デーラ船長はステージの横に置いてあるイスに座り、目を閉じて体をわずかに左右に揺らしながら聴いている。

あいつらは食堂を出ていった。
何かまずいことでも？
……。

ローレイ！

「

だ。ローレイが危ないんじゃ……」

「そうなの？」

リイはこわごわと辺りを見回して言った。

「目が合つのが怖くて、全然見てなかつたわ

カミーユの笑い声が遠くで聞こえる。

ますますウィルは焦つた。

「どうしよう。ローレイが危険だよ。知らせないといけないんじゃ

……」

「ちょっと待つて！ 馬鹿もほどほどにして…」

演奏を聴き入つていたローズだが、即座にウィルに意識を集中させた。

「下手に動かない方がいいわ。動く方がずっと危険よ！ 確かにローレイはちょっとピンチだけど、アイツなら大丈夫だと思つわ

「そんなこと、分からないうだろう？」

ウィルは完全に落ち着きを失つていた。

もしもローレイに何かあつたら、この旅は早くもゲームオーバーだ。

「ウォルト、ローズの言う通りだわ」

リイがなだめるように言った。

「今はローレイを信じることが一番無難よ。私達にとつても、ローレイにとつても。ローレイがどんな人か、会つたばかりで全然知らないけど、腰に剣を3本もさげてるくらいだから、剣術がすぐれてるんじゃない？」

「3本？」

ウィルはそこで一回落ち着き、眉をひそめた。

確かエシミス島に最初来た時は、剣は2本だった。

トムから剣をもらつたのだらうか……。

一曲目の演奏が終わり、会場は拍手で再び溢れた。
ピーッと口を鳴らす人もいる。
すごい盛り上がりだ。

ローズとリィも再びステージの方を向き、拍手に加わった。

ウィルは大きく頭を振った。

剣のことなんて今考えるべきことじゃない。

「とにかくここにじつとしてなさい!」

拍手をため、ローズが振り向きざまに押さえつけるよつをつ言つた
とき、ウィルの姿は既にそこにはなかつた。

ディナーパーティ 1（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
今いろいろと忙しい時期で、次の更新も遅くなると思います。

ウイルは廊下を走っていた。食堂はあんなにもにぎやかだったのに、ここは静かだ。人は全く見当たらない。

「あのバカ、一体何を考えているのかしら？」

食堂でのローズの怒りの一言。正解は何も。ウイルは何も全く考えていないかった。ただローレイのところに向かつて走っていた。これからどうするかとか、自分が行つて何になるかとか、そんな考えはウイルの頭の中には全くなかつた。ゆえに当然足音のことも考えない。ドタドタと大きな音を立てながら、ウイルは大部屋に向かつて行つた。

「ローレイ！」

これもまたウイルは大声をあげて、部屋の中に入れた。
返答はない。

ローレイを含め、誰もいなかつた。多くのベッドと乗客たちの荷物だけがそこにはあつた。ウイルはその場に、立ちすくむ。そして、肩を落とした。

そこでようやく自分の無鉄砲な行動に気づいた。
いつたい何をしに僕は駆けてきたのだろうか。

僕が応援に来たところで、どうにかなるのだろうか。
答えは、どう頑張つても否だつた。むしろ足手まといになつたかもしれない。だいたいあの男が食堂を出たからと言つて、何がそんなに危険なんだ？ローレイと鉢合わせしたつて、手紙をとるところさえ見られなければ大丈夫じやないか。きっとローレイのことだから、もう食堂に戻つているに違ひない。

ウイルは回れ右して、食堂に向かつてとぼとぼと歩き始めた。きっとローレイやローズにいろいろつるさく言われ、馬鹿にされるに違いない。言われるださうことを想像すると、ウイルの歩調はより遅

くなつた。

「ドン！..」

ウイルの足はピタつと停止した。階下から何かが壊れるよつた音が聞こえた。

数秒後。

「ドン！..」

また同じ音だ。木が折れるような音。ここでこんなに聞こえるのだから、きっと下で何かが激しく損傷しているに違いない。ウイルは耳をすませた。

「ドン！..」

食堂に行きたくないという強い気持ちが、ウイルに素敵な選択肢を与えた。そしてウイルは誘惑に負け、また無鉄砲な行動に出始めた。

一方食堂では、ローズとリイがひそひそと緊急会議を開いていた。

「ウォルト、本当に大丈夫かしら」

リイが溜息をついていった。

「私が演奏にうつとりしていなければ、こんなことにはならなかつたのに」

「何言つてんのよ！」

ローズは憤然として言った。

「あのバカが悪いのよ。何の考えもなしに、しかもたいして役にたたないくせに走り出すから。全くのアホよ！」

「役立たずかどつかは、分からぬでしょ？」リイはなだめるよつに言った。

「分かり切つてるわ！外見に出てるじゃない。あれは100%役立たずよ。それより私が一番心配なのはね、」

リイが声のボリュームを落とすよつ手で示したので、ローズは声をひそめて言った。

「あいつがローレイの足を引っ張つて危険な事態にならないかってこと」

「でも手紙を押収する現場さえ見られなければ、何も危険なことにはならないと思うわ」

「そもそもあの男はどうして食堂を出たのかしら?」

「分からないわ」リイは肩をすくめた。

「単純な理由の可能性が高いと思うわ。ひと眠りしたいとか、……。単純でない場合を考えるなら……」

「考えるなら?」ローズが先を促した。

「みんなが食堂に集まっているうちに、ボートを壊す……とか?」「まだ壊してなかつたらどうこと?でも、それは真夜中でもいいわよね。壊すくらいあのバカでかい男達なら数秒でしょ?どうせボートなんて2~3隻だらうし……」

「そうよね。いくらなんでも考えすぎよね。とりあえず、私達は帰つてくるのを待ちましょ?」

「ええ」ローズは頷いた。

「全然心配することないわ。直にローレイもあのバカも帰つてくるわ」

その頃、「あのバカ」と言われた少年は、は大きな音をさつきから出している部屋の前にたどりついていた。そこは上の階に比べて薄暗く、廊下には等間隔に小さなランプが取り付けられていた。ウィルは息をひそめ、耳をすませてじつと立つていた。ドアはわずかに数センチ開いており、中から光が漏れている。相変わらずで「ドン!」という音は、同じペース続いていた。加えて、ここからは中の人の足音も聞こえた。どうやら一人しかいないようだ。「ドン!」という音の後に数歩動く音が、これも同じペースで繰り返された。ウィルは深呼吸したあと、吸い寄せられるように一步ドアに近づき、そつとノブに手をかけた。自分の心臓がバクバクしているの

が聞こえる。ウィルの頭の中の一部が先ほどから、危険信号を出していた。だが、好奇心の方が断然強い。心が今の緊迫した状況で満たされる。このたまらないスリル感。ここ数日の憂さを晴らすのに最適だ。

別にのぞき見するくらい、何の危険もないさ。ウィルは自分の頭の片隅に語りかけた。溜まりに溜まっていたストレスが、ウィルの理性を狂わせた。バレなければ、どうってことないじゃないか。

ウィルはノブをぎゅっと握りしめた。ノブは冷たく、ひやっとした。続けて、10センチ程ドアをひき、ウィルは顔を隙間にぐっと近づけた。

音の発信者は、ある程度予想はついていたが、あのスキンヘッドの男だった。ウィルに背をむける形で立っていた。ドアの隙間が小さいため、男の右半分しか見えなかつた。男は筋肉が盛り上がり太い右腕を勢いよく下に下ろして大きな音を立てている。そして、何かをまたいで一步前に進み、また右腕を振り上げた。同じ動作が3回続いたあと、ウィルはもつと中をよく見ようとドアをさらに開いた。

あつと声が出そうになるのを、ウィルは何とかこらえた。目に入つたのは、真つ一つに折られたボート達の残骸だつた。部屋は思ったよりも広く、多くのボートが積まれていることが分かつた。もう男の全身が見えた。ウィルが顔つっこんで部屋を見渡している間にも、男はボートを壊し続けた。

ローレイはこのことを知つてゐるのだろうか。ウィルがそう考えた、ちょうどその時。男がふいに動きをとめた。ドアのところから10メートルくらい離れたところ。ウィルの体も緊張で硬直した。

「おかしい」男はうなるように独り言を言つた。

「あと4隻。壊したのが15隻だから、全部で19隻ということになる。20隻と聞いていたのに……。数え間違えたか?」そして男は太い毛むくじゃらの左の足を一步下げ、こちらに向き直ろうとした。

た。

ウィルはビクつとして、すぐに首をひっこめた。そこまでは良かつた。だが慌てすぎてドアをバタンと閉めてしまった。

「誰だ？誰かそこにいるのか？」

予想通り、男の鋭い声がした。続けて、一いち方に向かってくる足音が聞こえる。

ウィルは逃げようとした。だが、足が動かない。ウィルはドアを絶望した目で見つめた。逃げるという頭の命令を体が聞いてくれない。根が生えたかのように、ウィルはその場に立ち尽くしていた。

足音がせまつてくる。

あと4、5歩でアウトだ。動いてもないのに息がはやい。心臓の音がバクバクと聞こえる。

あと2歩。

ウィルはぎゅっと皿を開じた。
見つかる！

ディナーパーティ 2（後書き）

読んでくださつてありがとうございます。
次の更新を来週中にできるようがんばります。
よろしければ感想をください。

次の瞬間ウィルは体がぐいっと何者かに引っ張られるのを感じた。体が大きく揺れ、何者かの強い力が自分の体に加わる。それでもウィルは目をつぶつたままだった。

捕まってしまった。ウィルはそう思った。口を腕でふさがれているのが、目を開けなくてもわかる。自分を押さえている者の息を、すぐ近くで感じる。息の生暖かさを、肌で感じる。

頭の中は真っ白で、ウィルは何者かになされるがままになっていた。

食堂で。

「あまりにも遅くないかしら。ウォルトとローレイ……」
ローズはまた食堂の入口を振り返りながら言った。

演奏の間もう何度も振り返っている。さつきは強気で大丈夫だろうと言つたものの、やはり時間がたつと不安になつてくる。リィも同様だ。

「そうよね……。もう演奏会もあと少しで終わるというのにね。確かウィルトが出て行つたのは最初のほうよね？」

「ええ」ローズは手に持つっていた、演奏会のプログラムを開きながら言つた。

「確かケン達のピーフォーの演奏が終わつたぐらいじゃなかつたかしら……」

「ということは、最初の演奏よね

そこでリィは少し首をかしげた。

「今はプログラム四番よ。まだ三曲しか進んでないわ

「本当だわ！ たつた三曲……。もうかなりの時間がたつた気がするのに……」

「私も同じ気持ちよ」リィは頷きながら言つた。

「でも、もう少しこのままウォルト達を待ちましょう。今はそれが

一番いいと思つわ

「なんだ？誰もいない。逃げたか？」

ウイルは目を閉じたまま、あの男の声を聞いた。だが奇妙なことに、近くではなく少し離れたところから聞こえる。変だ。自分をすぐ後ろで押さえているはずなのに……。

どうなつてゐるんだ？

状況を理解したい気持ちと恐怖心の間で揺れていた針が、ついに一方をさして止まる。ウイルはゆっくりと目を開けた。だが効果はなかつた。目を開けても、あたりは真っ暗で目を閉じてゐると変わらなかつたからだ。軽く腕を動かそうとしたが、自分の背中で押さえられていて、相当力を入れないと動かせないことが分かつた。また少し離れたところから、男の独り言が聞こえてきた。

「まあいい。あの人が取引人なのだから。誰がどうわめいたって、どうにもならないさ」

男が部屋に戻る足音が聞こえた。男がますますウイルから離れたことが、足音の大きさで分かつた。その数秒後、またあの「ドン！」という音が聞こえてきた。

ウイルはゆつくりと、今の状況を整理し始めた。

男は僕から少し離れているところにいる。

男は僕を見つけていない。

僕は何者かに捕まつていて。

分かることはこれだけだ。

結局僕は今危険な状態にいるのだろうか。

次の「ドン！」という音が聞こえたとき、ウイルは瞬時に覚悟を決めた。

そして、3回目の「ドン！」

ウイルは自分の口を押さえている腕に、思いつきり噛みついた。すると、ウイルの口を押えていた腕の力がさらに強くなり、ウイルは呼吸もまともにできないほどになった。ウイルの頭で今までで

一番強い危険信号が発信され、ウイルは無我夢中でもがき始めた。手と足を大きくバタつかせ、なんとか逃れようとした。目には涙が浮かんできた。

「おい、動くな。見つかるだらうが」後ろからささやき声が聞こえ、ウイルはピタリと動きをとめた。聞き覚えがある声だ。誰？この声は誰だっけ？

「話してやるから、さわぐなよ。見つかっちゃうからな」ゆっくりと押されていた腕が、ウイルの顔から離れる。ウイルはすぐには振り返らなかつた。相手が誰なのか分かつたからだ。

「ケン！」

「なんでここにいるの？」

ウイルは驚いて聞いた。自分では声をかなり落して聞いたつもりだが、つい大きい声が出てしまつた。

ケンは質問には答えず人差し指を口の前で立て、静かにするよう図した。部屋が暗くて、その表情はよく見えない。

「一体なぜここに？」

ウイルは、ボリュームをぐつと下げてまた聞いた。

「それは、後でだ」

ケンがそう囁いたのと同時に。

「ドン！」

今までのよりも一際大きな音だつた。隣の部屋から聞こえる。壁が薄いのだろうか？壁を一枚はさんでいるとは思えないくらい、破壊音はよく聞こえた。

「終わつた。壊し残しはないな」

スキニーヘッド男の声だ。声もまた筒抜けだ。向こうの音が筒抜けといふことは、こちらの音も向こうに対して筒抜けということ。ウイルは息をすることにも気を配つた。ケンもまるで石のようにも固まつ

ていた。やがて部屋から出ていく男の足音が聞こえた。廊下の板がきしむ音も聞こえる。その足音が階段の向こうに消えるまで、ウィルとケンは身動き一つしなかった。

足音が完全に消え、静けさだけが部屋に残される。

「もう行ってしまったみたいだね」ウィルは、ほつとしながら言った。

「ああ」ケンの声にはまだ警戒心がにじみ出でていた。

「あ、さつきは助けてくれてありがとう。どうなることかと思つたよ。なんでここにいたの？」

すぐに返事は返つて来なかつた。ケンは部屋の入口のほうに向かい、ドアの前で停止した。

パツと部屋が明るくなる。電気をつけたらしい。

「それはこっちが聞きたい質問だな」

そう言つてこちらを向いたケンの顔には、いつものにこやかな表情はなかつた。

「僕がどうしてここにいたかといつこと？」

「そうだ」

「え……ええと……」

ウィルは困惑して、そのまま口を閉じた。本当のことを言つても大丈夫だろうか。ウィルは、ケンの顔をまじまじと見つめながら考えた。ケンはまつすぐこちらを向いている。ウィルの頭にローレイの厳しい顔が浮かんだ。ローレイがいないから分からぬ。でも、ケンなら信用できる。何しろ僕を助けてくれたんだから。よし、軽くなら大丈夫だろつ……。

「あいつが怪しいって、みんなで話していたんだ。だから、つけてきた。なぜ演奏会の時に食堂を出ていくのか気になつたから

「怪しい？なぜそう思つたんだ？」

「ええと……僕たちはもしかしたらあいつは野族で、この船を襲おうとしている野族の仲間じゃないかって思つたんだ。だつて……「ウイルはここで一旦口を閉じた。

手紙のことは言つていいのだろうか。ローレイの顔がまたもや浮かぶ。ケンはウイルがまた続けるのを、黙つたまま待つて。これ以上ローレイを怒らせる要因を作りたくない。もう十分だ。ウイルは思った。念には念を！

「えつと、だつ…だつて、み…見た目があ…怪しいから。本当にあの髪形とか怪しいよ！もつとも、髪はないけど……。でも、怪しい！とにかく怪しこんだ！ケンだつてそう思うでしょ？」

「怪しいかどうかはさておき、見た目で判断するのはどうかと思うがな…俺は」

ケンは探るような目つきでウイルを見た。その視線が、ウイルには痛く感じられる。何も悪いことしていないので、こんな風に質問をうけるのは嫌だ。

「でも、今見たとおりあいつはボートを壊していただじやないか。ケンも見たでしょ？」

「ああ、まあな。そこの壁に穴が開いているだらう？」

ケンはウイルの背後の壁を指した。ボートが置いている部屋とこちらの部屋を隔てている部屋だ。刺した先には、確かにちゅうじ掌くらいの大きさの四角い穴が開いている。だから音がよく聞こえたのか。ウイルは納得した。

「どうしてここに来てたの？」

「あの穴は俺が、さつき誤つて開けてしまつたんだ。ここは船長室だ。見れば分かるだろうが」

そこで、始めてウイルは部屋を見回した。確かに船長室だ。窓際のしゃれたランプ。金の装飾が施してあるシャンデリア。立派で大きな机。航海に関する本がたくさん並べられている本棚。誰か特別の人を招き入れた時のためにだろうか。上品なソファや天板にガラスをあしらつたローテーブルが置いてあつた。同じ船の部屋とは思えな豪華さだったが、今は壁に穴が開いてるため、少し間抜けに見えた。「ディナーパーティが始まる前、隣のボートの部屋で、そうじをしていたんだ。梯子を動かそうとして、横に抱えた時、ふいにバラン

スを崩してよろけちまつて、梯子の片方の足が壁を突き抜けてしまつたんだ」

そこでケンはいつものケンらしく、にかつと笑つた。

「隣は船長の部屋だからな、さすがに言い出せないそり演奏会のときに修理をしにきたんだ。破片がこっちの船長室に飛び散つてたからそれらを拾い、そして穴をきれいに四角にしたんだ。修理しやすいやうに。そしたら、あいつがやってきた。もちろん止めようとも思つたが、俺も船長の部屋に潜んでいたとなるとさすがに止めづらい。俺も何をしていたんだといふことになるからな。だから電気を急いで消して、穴から様子を窺つてたんだ」

「壊していくのをただずつと見てたの？」ウイルは驚いて聞いた。

「ケンなら止めることができたと思うのに。船長室にいた理由なんて、後で説明すれば分かってもらえたはずだよ」

ケンは横に首を振つた。

「お前さんが言つことももつともだと思つ。だがドーラ船長は俺のあこがれの人だ。だから船長の名譽を少しでも汚すようなことはしたくない。あの時俺が隣の部屋に飛び込んでいつてたら、きっと殴り合いになつて騒動になつたはずだ。ティナーパーテイの人達にも聞こえるかもしれません。そんなことはできない。俺は後で他の乗客に知られないよう、また不安を『えないよう、』ことそりと船長と話し合つて片付けるつもりだ。だから心配するな。それと」

そこでケンは膝を床につき、呆気にとられているウイルの手をがしつと掴んだ。

「このことは、他の客にはふせておいてくれーお願いだ。この通りだ！」

「やめてよ、ケン」ウイルは慌てて言つた。

「言わないー誰にも言わないー約束するよ

「本当か？」

「うん。もちろんだ。それにしても

ウイルはそこで少し首をかしげた。

「ケンは本当にドーラ船長のことを尊敬してるんだね。その人の名前のことと一緒に気を配るなんて」

「もちろんだ」

ケンはゆっくりと立ち上がりながら言った。

「あの人は凄い人だ。どんな嵐の航海も成功させなさった。危険な冒険をたくさんしなかった。俺達船員のあこがれ中のあこがれだ。それに」

ここにケンは軽く溜息をついた。

「船長はあと少しで引退なさるんだ。俺達にこの前おっしゃった。海の人生をそろそろ終えようかと。だから、俺が船長と共に海に居られるのもあとわずかだ」

ケンは真剣な面持ちだった。

ウイルは何と言えばいいか分からず、黙っていた。ただケンの船長への深い思いはなんとなく理解できた。

「話を戻すぞ。先ほどお前さんが言った、あの男が野族でこの船を襲う手助けをしているという考えは確かにしつくつくるわな。そしたら、あの船を壊す理由も説明がつくし」

ウイルは黙つて頷いた。

「とにかく俺が何とかする。お前さんは安心して、早く戻れ。今なら演奏会の後に出てれる、デザートに間に合つぞ。フルーツがたくさん乗つた特大ケーキも出されるんだ」

「助かるよ、ケン」

ウイルは心をこめて言った。

「本当にありがとう。さつきも助けてくれて僕は本当に」

「ガチヤツ」

船長室のドアが突然開いた。

誰かがドアのところに立っている。

ウイルはそれを見もせずに、目を閉じた。

頭に浮かぶのは特大ケーキ。

色とりどりのフルーツと真っ白の生クリーム。
ふんわりとしたスポンジ。

多分お預けだ。

ウィルの束の間の夢はむなしくこの瞬間に散ってしまった。

ディナーパーティ 3（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

ドアに立っていた人物と野族の襲来。
一つの山場ですので、がんばります。

「お前は確か…ウォルトの……」

ケンがドアのところに立っている人物を見てそう言つた時、ウィルはドアの方を見ないまま大きく溜息をついた。先程の危険とは別の危険の到来。見なくたつて、誰だか分かる。しかもその人から発せられている怒りのオーラもはつきりと肌で感じることができる。ドアに立っている人物が数歩、ウィルに近づくのが分かつた。

ウィルは軽く息を、だがゆっくりと吸つた。そして。

「「めん、ローレイ。ぼ…僕つい……」

恐ろしくてまともにローレイの顔を見ることができなかつた。しばらく重苦しい沈黙が流れた。ケンはその場の状況がよく理解できないらしく、不思議そうにローレイとウィルの顔を見比べていた。ウィルがおそるおそるローレイの顔を見ると、ちょっとローレイは口を開くところだつた。

発せられた言葉はとても簡潔だつた。

「戻れ。部屋に。今すぐに」

有無を言わせない絶対的な響きがそこにはあつた。その顔には静かだが、激しい怒りが秘められているのが分かる。

「あの…ローレイ」

「早く…！」

ウィルはローレイの鋭い声にびくつとすると、間髪を入れずに部屋を飛び出した。

自分達の部屋に飛び込み、勢いよくバタンとドアを閉めてから、ウィルはやつと一息ついた。そして部屋の中を往つたり来たりしながら、ローレイの先程の表情を思い浮かべた。

「殺されることはないんだから」

ウィルは自分に言い聞かせた。だが何の慰めにもならない。食べ損

ねたケーキのことは本当に頭から消え去っていた。

待つ。これがこんなにも辛いことだとは、ウィルは今まで気付かなかつた。ただ何もせすじつとしているだけなんて……。ローレイはその後、食堂に戻つたのだろうか。パーティはそろそろ終わるころだらうか。ローレイはこの部屋に帰つてきて、どれくらい僕を叱つけるんだろうか。

ウィルはふに歩き回るのを止め、ベッドに座り込んだ。

「んなはずじゃなかつた

心に浮かぶこの言葉を、ウィルはどうしても打ち消すことはでいなかつた。幼い時分からあんなにも世界に旅立つことを夢見ていた。だけどその旅立ちはこんなものではなかつたんだ。もつと自由に溢れていたはずだ。もつと輝いていた。もつと眩しかつた。現実はと言うと、「自由」なんてどこにもない。それどころか、途方もなく重い課題をつきつけられて、今は「ひびく」を叱られるのをただただ待つているだけ。

ウィルはパタンと上半身をベッドに倒し、腕を不格好に広げたまま、目を閉じた。

運がよければ、ウィルはほんやりと考えた。

運が良ければ、リイがローレイの説教をつまくとこなしてくれるかもしれない。それにしても、待つといつのは本當……。

「おいー起きるんだ、この間抜けーおいー！」
気がつくと、ローレイがウィルを揺さぶつていた。いつの間にか、ウィルは眠りに落ちてしまつていていた。

「あ……僕……」

「部屋に戻れとは言つたが、寝ていいとは言つてないぞ」
ローレイはそつと、ウィルを揺さぶるのをベッドから一歩後ろに下がつた。

ウイルは意識がまだぼんやりとしていたが、ゆっくりと上体を起した。

ローレイの背後に、腕組みをしているローズと不安そうな顔をしているリイが見えた。

「僕、つい寝ちゃったんだ」

ウイルは誰かではなく、自分に向かって言った。頭の回転は、まだ鈍い。

「よくもこんな状況で、そこまでやすやすと寝れるわね、この能天氣！」

ローズが眉をピクピク動かしながら言った。

「仕方がないじゃないか。眠いものは眠いんだから」

ウイルは欠伸交じりに、のんびりと答えた。

その場の4人にしばしの沈黙が訪れた。頭が機能していない者が1名。呆れて言葉が出ない者が2名。皆の後ろで、おひおひしている者が1名。

やがてウイルの頭の中の歯車がゆっくりと動き出す。

「あ……」

ウイルはようやく大事なことを思い出した。この部屋に戻ることになつたきっかけ。自分が非常に危険な状態にさらされていたこと。

「あ……僕さつきは」

ウイルはここでおずおずとローレイを見上げた。

「さつきは、ごめんなさい。僕とさに」

「もういい」

ローレイはふいと顔をそむけた。

「今悠長にお前のぐだぐだした言い訳や反省を聞いている余裕はないんだ。もうすぐ真夜中。あとちょっとで日付が変わるんだぞ」

「そんなんに？」

ウイルは驚いた。僕はそんなにぐつすり寝ていたんだろうか。

ローレイは溜息をついた。本音を言うと、多少ウイルを怒鳴りつけよていだつたが、ウイルの能天氣ぶりに呆れて、怒る気力も失せ

てしまつた。こいつは本当にあの賢帝、ラゼル王の息子なのだらうか。ローレイはそう思はずにはいられなかつた。

「とにかくまず状況整理から始めましょう」

リイが急かすように言つた。

「そうね」ローズが頷いた。

「まずはローレイ、あなたから話して」

ローレイは大きく息を吸うと話し始めた。

「俺は部屋を出た後、手紙を確認に大部屋に向かつた。探したが予想した通り、そこには無かつた。他の手掛けりとかも見つからなかつた。あきらめて立ち去ろうとした時、あのスキンヘッドの男が目に入つた。後をつけたみると、さつきも話したように」

「救命ボートを壊していた」

リイが後をひきとつて言つた。

「その通りだ。だが見つかるわけにもいかず、見ていても仕方ないから食堂に向かつた」

「だけど、ウォルトが食堂にいなかつた」

リイが続けた。

「それでローレイは、ウォルトを探しにまた食堂を出た」

ローレイは頷いた。

「食堂はどうだつたの？」

ウイルが聞いた。

「特に何も無かつたわ」ローズが答えた。

「パーティの終わりあたりでスキンヘッドの男は帰つてきた。相方の男の方はすつと食堂にいて、船長と楽しそうに話していたわ。きっと自分達を信用させよつとしているのよ」

「ありえるわね」

リイは顔を曇らせながら言つた。

ローレイはウイルの方に向き直つた。

「次はお前だ。ウォルト。全部話すんだ」

ウイルは食堂を飛び出した後のこと語り始めた。大部屋に行つた

こと。大きな物音が階下から聞こえたこと。男に見つかりそうになつたこと。そして、ケンに助けられたこと。

ディナーパーティ 4（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
よろしければ、ブログにも遊びに来てください

ウィルは「テッキにただ一人でいた。テッキの手すりに両腕を乗せ、どこまでも広がっている海を眺めていた。美しい景色とは言い難いが、航海を始めて初めて見る景色だつた。寝た方がいいと分かつてはいたが、眠れなかつた。理由はいくつかある。先程熟睡してしまつたこと、またローズにベッドをとられたこと。（「男なら当然ですよ！」）そう言って、ローズはウィルに一枚のバスタオルを渡した。そしてもう一つ、せつきの綿密な話し合いでのことを考えずにはいられないこと。

嵐が来る前だからなのか、雨は降つていらないものの、波がやや荒かつた。雲に覆われて、星も月も全く見えない。暗すぎて雲の形も見えない。

あいつは、何かおかしい。もう近づくな。

ウィルが自分の小さな冒険話を語り終えた直後の、ローレイの言葉。リイもローズもローレイに同意した。ショックだつた。そんなはずはない。ウィルは信じていた。

ケンがあの男達の仲間だなんて、絶対にない。ありえない。

第一僕を助けてくれたじやないか。

男達の手引をしていることが分かるとマズイからな。

ケンは偶然船長室にいたんだ。別にあのスキンヘッド男を手助けしていただけではない。船長室の壁に誤つて穴を開けてしまつて、修理をしようとしてあの場にいたんだ

乗客のことを第一に考えなければならない船員なのに、それを

止めようとしたしないなんて、ましてや報告しようとしたしないなんておかしいじゃないか。

ケンは船長の名誉を守りたかったんだ。

俺が怪しんでいる一番の原因は、最初あのスキンヘッド男をつけた時、俺も隣の船長室に忍び込んだんだ。もちろん誰もいなかつた。俺は軽く偵察をした。海賊らは襲来後間違いなく最初に船長室に押し入ると思ったからな。そして窓に近寄った時、カーテンに一本のロープが巻きつけられているのを見つけた。一応カーテンを縛るひもでカモフラージュされていたが。ロープは窓の外に垂らされていた。何があつたか分かるか？

ローレイはウイル、リイ、ローズを順に見渡して言った。

ロープの先には、一隻の救命ボートがあつたんだ。ボートはロープを切りさえすれば、すぐに水面に置けるよう設置されている。あいつは自分だけ逃げるために、ボートを隠したに違いない。船長室は絶好の隠し場所だ。あの部屋にはベッドがなかつた。つまり夜、船長は別の部屋で寝るということだ。そして、明日は嵐。嵐の時に窓を開けようとするバカはいない。もつとも嵐のような一大事のときには、船長は船長室にこもつていたりしないが……。

船長専用の救命ボートかもしれないじゃないか。

ウイルは必死になつて言った。

隣に救命ボート室があるのに、どうしてわざわざ自分の部屋の隣におく必要がある？

ウイルはまだ反論しようとした。

ねえ、ウォルト。

リイは優しく言った。

私もローレイにもはつきりとは状況が分からぬ。だけどいろいろ考えてみるとケンさんはちよつと怪しい、そうでしょ？ウォルト、あなた言つたわよね？スキンヘッド男はこの船の船員に手引きがいたことを示す発言をしたつて。それがケンではないという証拠はどこにもないわ。

この時ばかりは、リイの言葉もウイルには刺のようを感じられた。

いずれにせよ、たつた半日。その間近づかなければいいことなのよ。襲来が起つたその後は、接触している暇なんてないだろうし。ケンが手引き人かどうかはつきりとは分からぬけど、用心して損する事はないでしょ？あなたの気持も分かるけど……。

リイは僕の気持を分かつていない。ウイルは思つた。船に飛び乗つてから、孤独感に苛まれ続けていた。それを和らげてくれたのが、他でもないケンだつた。初めて言葉を交わした時のあの屈託のない笑顔を今でも鮮明に思い出せる。カミーユも僕を元気づけてくれたけど、何と言つてもまだ流暢に話すことができないくらい幼い子供だ。ケンはウイルにとつて初めての友達だつた。野族の襲来が避けられないというのなら、せめてケンには逃げて欲しい。ウイルはそう思つていた。それなのに……。

「大丈夫だよ。この船は嵐に負けないよ」

ウイルは突然の声にびくつとした。いつの間にか、横にドーラ船長がいた。暗くて顔がぼんやりとしか見えなかつたが、雰囲気で微笑んでいるのが分かる。ケンのことでの考えに熱中しすぎて、自分に

近いづいて来るのに全く気がつかなかつた。

「別に嵐を恐れているわけではないんです。ただ僕は……ちょっと眠れなくて」

「ほほう！」

ドーラ船長はウィルを見下ろした。ディナーパーティでは気付かなかつたが、ウィルよりもずっと背が高く、すらつとしていた。

「ディナーパーティですこし食べ過ぎたのかな？」

ウィルは心臓の鼓動が早まるのを感じながら、ドーラ船長を見上げた。この一か八かの計画は明日の朝食時にする予定だつた。でも考えてみると絶好のチャンス。ローレイもきっと怒らないだろう。

「あの……ドーラ船長？」

「何かね？」

「信じてもらえないかもれませんが……明日の昼か夕方、海の野族がつまり海賊がこの船を襲う計画があるんです」

ウィルはじつとドーラ船長を見つめながら、答えを待つたがすぐに返つて来なかつた。最初にウィルの耳に届いたのは、答えではなく笑いだつた。

「ほつほつほつ……」

暗闇の中でもドーラ船長の灰色のひげが震えているのが分かつた。

「本当なんです！」

ウィル顔を真つ赤にしながら答えた。

「信じてください。船長と今日ディナーパーティで話していた大男二人が野族の一味なんです」

「知つているとも」

「え？」

ウィルは驚いて口をぽかんと開けた。

「あの二人が野族の者と知つていいのじやよ。だがな、あの二人もこの船にちゃんとお金を払つて乗船している。だからわしにとつては、あの二人も客には変わりない」

「でも」

「それにじや」 デーラ船長はウィルを遮って話を続けた。

「野族の計画とやらはこの世界に無数に存在している。その危機をわしは乗り越えてきた。計画の有無にかかわらずわしは、常に安全面に気を配っている。我ら船族の誇りにかけて、この青色の腕輪にかけて、わしはこの航海を必ず成功してみせる」

そこでデーラ船長は自分の左肩をポンと軽くたたいた。

「でも」

ウィルはなおも食い下がつた。

「救命ボートが壊されたんですよ！もし襲われたら」

「あー、君も見てしまったんだね。わしもディナーパーティの後、船員のケン・オハラから報告を受けたよ。全くけしからん話だ。救命ボート代を下船時にきつちり払つてもひつゝもりじや」

「不安じやないんですか？」

ウィルは唖然として聞いた。

デーラ船長は相変わらず微笑んでいた。

「どうしてもわしのことが信じられないよ、じやな」

「いや……そういうわけでは」

ウィルは口ごもつた。

「実はもつすぐわしは船の上の生活にピリオドを打つんじや。だからこそ、残された短い船上生活をわしは、よりいっそう大切に思つておる。どうしても心配なら話すが……」

そこでデーラ船長は一瞬間を置いた。

「航路を少し変えた」

「え？」

ウィルは肩の力が抜けるのを感じた。

「他の乗客達には無駄な心配をさせたくないんで言つてはおらんが、少し遠回りをしておる。君も心配は無用じや。第一わしがこのように寝ずの番をしているのは、なぜかと思うかね？」

「じめんなさい」

ウィルは素直に謝つた。

あの人は凄い人だ。どんな嵐の航海も成功させなさった。危険な冒険をたくさんしなさった。俺達船員のあこがれ中のあこがれだ。頭にケンの声が反すうした。僕達は、案外この難をなんなく超えられるかもしねない。

「さてわしは「コーヒー」一杯飲んで来るとしようつかな

「え？」

「UILははつと我に返つた。

「「コーヒー」じゃよ。君もどうかね？」

「あ…僕は結構です。「コーヒー」はあまり好きじゃなくて…。あ、あのありがとうござります」

「そうか」

ドーラ船長は少し残念そうに言つた。

「そうじやな。安心して、もう君も寝るが良い。あ、そうじや言い忘れておつた」

ドーラ船長は髭を手でいじりながら言つた。

「今君に話したことは、他の乗客には黙つておいてくれ。先にも言ったように、無駄な心配はかけたくないでのな」

UILは頷いた。

「分かりました。お約束します」

「それじゃあ、また朝食で」

ドーラ船長はそう言つと、その場を後にした。

UILはその後ろ姿を見つめた。ケンがドーラ船長を尊敬している理由が少し分かつたような気がした。

その時ドーラ船長が行つた方向とは、別の方向から人影が現れた。

読んでくださいありがとうございました。お読みください。

「『めんなさい。盗み聞きするつもりはなかつたんだけど……』
声でリイだと、ウイルははつきり分かつた。

「別に構わないよ。むしろ今のこと話を手間が省けて良かったよ」
リイが暗がりの中でにっこり笑うのが分かつた。リイは先ほどのドーラ船長が立つていたところに来て、ウイルと同じように両腕をデッキに乗せた。

「ねえ、もしかして僕たち案外野族の襲来を回避できるんじゃない

？」

「ドーラ船長の言つたことを信用して言つているの？」

リイの声はやや硬かつた。

「そ……そうだけど」

「ねえ、ウォルト」

そこでリイは小さく息をはいた。

「信用したくなる気持ちは、私にもよく分かるけど、油断しない方がいいと思うわ。きっとローレイも私と同じことを言つはずよ。考慮するのに値しないと……」

「どうして？」

ウイルは驚いて聞いた。

「確かにドーラ船長は船族で有名な方で素晴らしい人だと思うけど、野族はね、ウォルト、あなたは知らないかもしないけど、優れた船族の人達を過去に多く負かしているの。きっと船を乗つ取られた船長達は、襲撃される前ドーラ船長と同じことを考えていたと思うわ。野族なんかにやすやす船を奪われやしないと」
ウイルは黙つてリイの声に耳を傾けていた。

「航路を変えたからと言つたって」

リイはウイルの心を見透かしたかのように言つた。

「手引きがこの船にいる以上、何の役にも立たないと思つわ。ディ

ナーパーティの前に飛族の者がやつて來ていたし、連絡を取ることもそう難しくはないと思うわ」

「ウィルは気持ちが再び沈んでいくのが分かった。

「リイの言つことは全く正しこうに思えた。ならばやはり明日の午後、野族は……。

じわじわと恐怖心が押し寄せる。

「怖い？」

リイがひつそりとした声で聞いた。

ちょうどその時、厚い雲の間から月の光がさし、リイとウィルの間をも照らした。

ぼやけていたリイの顔がはつきりと見える。

嵐がやつて来る前の、生暖かい風がリイとウィルの髪をなびかせる。

「普通の人なら怖いんじゃないの？」

ウィルは目を海の方にそらしながら言った。

月明かりのせいで、空の厚い雲がずっと広がっているのが分かる。ちらりと横を見ると、リイはその雲をじっと眺めていた。雲は広く広がっているが、リイが見ているのは真正面の一点だけ。まるで今にも自分を襲おうとしている者に、対峙しているように。リイも自分と同じ気持ちであることをウィルは悟った。だが、リイはまっすぐ前を見つめている。ウィルも視線をゆっくりと雲に移した。リイは少なくとも僕よりは勇氣がある。

「リイやローズと出会つてから、一日もたつてないなんて信じられないな」

ウィルはぽつりと言つた。

「そうね」リイはウィルの方に視線を戻しながら、静かに言つた。

「私も同じ気持ちよ。ウォルトやローレイといふと、まるでずっと一緒に旅してきた仲間みたいに、安心した気持になれる」

リイは微笑しながら、ウィルをじつと見つめた。その思慮深い眼差しは、優しくも強かつた。月の光に照らされて、リイの明るい茶色

の目はいつも美しく見えた。

「明日の夜、いや明後日の夜も、一緒に旅できていたらいいね」「つまり、襲撃をうまく逃げ切れればいいね、ということでしょう？」「うん、そういうこと。でも… そんな可能性はどれくらい僕たちにはあるのかな？」

ウィルはわざと明日の朝食には何が出されるか予想するよひな、何気ない調子で聞いた。

「分からないわ」

リイもウィルと同じ調子で答えた。

「でも」そこでリイはふうっと息をはいた。

「きっととても難しいに違いないわ」

「おもしろいじゃないか」

突然背後から声がした。振り返るとローレイが立っていた。暗くてよく表情は見えない。

「おもしろいじゃないか」

ローレイは繰り返すのと同時に、数歩前に出た。月明りにその顔が照らされる。驚いたことに、ローレイは笑みを浮かべていた。

「ここ数日の退屈を紛らわすのにはちょうどいいスリルだ。俺は絶対にマヌケな海賊どもに捕まつたりしない。士族としての名誉にかけても、きっと逃れてみせる。俺達は」

ローレイは、まっすぐウィルを見た。

「こんな所で、足踏みをしている時間はないんだ」

ウィルもまっすぐにローレイを見つめ返し、そして悟った。

ローレイは普通の人ではないらしい。

一人前の士族とは皆こうなのだろうか。

悔しいけど、勇気があつて、冷静で、頼もしいということを認めざるをおえない。

僕もそうなりたい。

ウイルは強くそう思った。

ブログにてキャラクター人気投票を始めました。
ぜひ遊びに来てください！

4人は客室でその時が来るのをじつと待っていた。ウイルは自分のベッドに寝転がり、ローズとリイは反対側にあるローレイのベッドに腰かけていた。ローレイは窓に寄り、外を眺めていた。船は既に嵐の中に飲み込まれていた。船外では風が女性の叫び声に似た音を出して吹いていた。ときどき雷鳴が鳴り響き、雨は激しく船に打ち付けていた。

計画は十分すぎるほど話し合つた。

だがウイルには欠陥がありすぎるよう思えた。やすやす成功するとはどうしても思えない。第一、野族が襲来するといつに、部屋にじつとしていていいのだろうか。僕達は一体何のために何を待つているのだろう。

ウイルは先程の食堂での昼食を思い出した。ドーラ船長はケンなど他の船員と食事をとつていた。一晩寝ていらないせいだろうか、やや疲れているように見えた。船長から自分の目の前の野菜スープに視線を戻すとき、ウイルはケンと目が合つた。ケンはウイルを見てにっこり笑つた。ウイルは曖昧に笑い返すと、急いでスープを飲み始めた。色とりどりの野菜が入つていてとてもおいしそうなスープだったのに、味が全く分からなかつた。船長とケンの微笑が頭を過り、胸がちくちくと痛んだ。

「もう一度言うが、忘れ物はないな

ローレイの言葉でウイルは我に返つた。こんな時に、ウイルは思つた。こんな大事な時にぼあつとするなんて。

「ないよ。ちゃんと何回も確認した

ウイルはそう言つと、上体を起こし足元に置いてあるリュックを持

ち上げた。夜、部屋に散乱していた持ち物を全て詰めておいたのだ。ずっと冷静だつたローレイもこの時ばかりは、少し神経をとがらせているようにみえた。その右手は常に腰に下げている三本の剣の柄に置かれていた。

その時は前置きもなくやつてきた。

「た…大変だ！船長はどーじだ？船長に早く！」

その声は、ウイル達の部屋のすぐ外で聞こえた。ウイルの心臓の心拍数が急激に増えた。

ついに……。

「どうしたんだ？」

部屋の外で別の声がした。

「顔が真っ青だぞ」

「トニー。大変…緊急事態だ！やつらだ。や…野族のやつらが前方から2隻、後方から1隻でこの船に向かつてきている…」
男はかなり焦つていていた。

トニーと呼ばれた男は、大声をあげた。

「何だと？本当か？そんな、まさか。この嵐の時に」

「そのまさかだ。とにかく、密を避難させなければ」

「分かった。乗客達は俺に任せろ。お前は船長を探せ。食堂に向かつたばずだ」

「分かった」

一人の男が足早に立ち去る足音が聞こえた。

ウイルはローレイを見た。ローレイは田でまだだといつ合図をおくつた。

「トニーどうかしたのか？」

「また別の船員が来たらしい。」

「野族だ。ハサミうきらしー」

「嘘だろ？」

「いや、本当だ。さあ、じうじぢやいられない。乗客達を救命ボー

ト室に避難させなければ。アンジエロ、お前も手伝ってくれ「何を言っているんだ、トニー。お前知らないのか?」「何だ?」

「救命ボートは何者かによつて全部壊されちまつたんだ」

「まさか。一体どうすれば?」

「この嵐だ。野族のやつらも手こずるに違いない」

「相手は3隻もあるんだ、アンジエロ。それにやつらの船は我々の船よりも格上……」

「くそ。だがとにかく皆に知らせるべきだ。仲間にも緊急集合命令を!」

「そうだな。手分けして呼びかけよう」

「そう言うと、トニーとアンジエロは大声を出しながら、走りだした。

「大変だ!野族の襲来だ!」

「船員は緊急に操縦室に集まれ!緊急事態だ!」

部屋の中にいても、次第に騒ぎが大きくなつていてることが分かつた。船員たちの大声にまじつて、女性の悲鳴や子供の泣く声が聞こえた。ウィル達が予想したとおり、いや計画通りに混乱が始まつた。聞こえてくる声や物音からして、既に廊下が人であふれ返つているのが難なく想像できる。

「さてそろそろ出発だ」

部屋の外の騒ぎとは対照的に、ローレイの言葉はとても静かだつた。ウィルは無言でリュックを背負つて立ちあがり、リイとローズもそれに倣つた。

そして、一行はローレイ、ウィル、ローズ、リイの順で部屋の外に出了た。

「いいか、計画はあくまで計画だ。」

ローレイの言葉がウイルの頭の中で反響する。

どんな障害物があつても、振り切つて前に進むんだ。

それは目標とかそんな生ぬるいものではなく、命令だった。

何も言われない限り、俺から離れるな。そして、離れろと言わ
れたら、即座に離れるんだ。決して振り返るな。

廊下は既に想像通り、人であふれ返っていた。障害とまでは言えな
いかもしぬないが、ウイル一行はまっすぐに進むのに若干苦労した。
人々の叫びや悲鳴が他の全ての音を飲み込んでいた。ウイルはその
混乱ぶりにややたじろいたが、ローレイのすぐ後ろにピタリと張り
付いたまま進んだ。4人は黙りこくつて、進むことだけに集中して
いた。

障害物。

ウイルは歩きながら考えた。頭に思い浮かぶのは、恐ろしい野族の
姿。筋肉が盛り上がった腕の先には、大きなタガ-が手に握られて
いる。僕は上手く乗り越えることができるのだろうか。いや、僕達
は皆無事に……。考え込むにつれ、ウイルには周りの喧騒が聞こえ
なくなつていつた。恐怖心のためだろうか、自分の時間と周りの時
間が食い違つてゐる気がする。廊下がいつもより狭く思えるのは気
のせいだろうか。ウイルは足元に目を落とした。足は動いている。
僕の頭よりも、足はやるべきことをしっかりと認識しているらしい。
だからなのだろうか、さつきから歩いているという感覚がない……。

とにかく進むことだけ考えればいいんだ。

「 ウィルは自分に言い聞かせた。

今は進むことに集中しなければ……。

障害物。それは僕達がその手から逃れなければならない、野族たち。

だけではなかつた。

「 ウ、ウォルトさん」

その声は、周りの騒ぎにもかかわらずウィルの耳にしつかりと届いた。

足もとから声のする方へと目を動かす。

ひどく怯えた顔つきをした女性。髪が少し乱れている。その女性の腕にはカミーユが抱かれている。

「 オ… オジエさん」

ウィルは無意識に足を止め、その女性とカミーユを見つめた。カミーユは事態をよく理解していないらしく、「 おにいちゃん」と言つてウィルにつっこり笑いかけた。

後ろから着いてきたローズとリィも足を止める。

「 ど… どうなつて いるのかしら」

オジエ夫人の声は震えていた。

「 誰かが… 野族… 海賊がこの船を襲うなんて言つて いるのが聞こえたんだけど、まさかそんな…………」

オジエ夫人の緑色の瞳がまつすぐにウィルに向けられる。その瞳は訴えていた。嘘だと言つてください、と。

ウィルは何を言つべきか分からず、また何かを言つべきかどうかも分からず、オジエ夫人を見つめ返した。

「何をしているのよ！ローレイの言つたことをもつ忘れたの」
ローズがウィルの肩を押しながら言った。

「気持は分かるけど、進むのよ。どんな障害物があつても、進むことだけを考えるのよ」

リイもローズの背後から一步踏み出し、ウィルに言った。
「早く前に進まなければ。取り返しのつかないことに」

「まあ、あなた達……」

オジエ夫人は3人を交互に見て言った。

「どこかに行くんですか。この騒ぎの中、一体どこに……？」
オジエ夫人の顔に残っていたわずかな色も消えていった。カミーユは母親の様子がおかしいのを感じ取つたらしく、不安そうに母親の顔を見つめた。

「おい！」

3メートル離れたところから、ローレイの鋭い声が飛んできた。

「何をしている？早く来るんだ！こんな時に。来るんだ。命令だぞ」

「そうだ進まなければならぬ。
ウィルは自分に言い聞かせた。
進むんだ。
だが、足が言つことを聞かない。

「あの……」

ウィルの横から、ローズがオジエ夫人に話しかけた。

「私達は急いで行かなければならぬ所があるんです。だから……これで失礼させていただきます」

ローズはそう言うと、ウィルをぐいぐい前へ押し始めた。押しの力

により、ウィルの足が一步動く。ウィルはそれでもオジエ夫人をしてカミーユを見つめていた。

「リイも手伝つて！」

ローズが叫んだ。だが。

「リイ？」

ローズの声に何かを感じ、ウィルは振り向いた。

リイは泣いていた。自分の腕で自分を抱きしめるようにして立っていた。

読んでくださいありがとうございました。お読みください。

「リイ……」

ローズは今度は問いかけと言つよりも、つぶやくように言つた。
UILはリイの様子が急変したことに驚き、リイの目を見つめた。
茶色の目にはローズもUILも映つていない。どこか遠くを見ているような目。

「いや……」

小さな悲鳴と同時にリイは床に座り込んだ。両手を耳にあて、震えている。

「どうしたんですか。何が起こっているんですか。教えてください！」

リイの尋常ではない様子に、オジエ夫人は不安を大きくしたようだつた。

UILは困り果てて、その場に立ち尽くした。
周囲の騒ぎはより大きくなつていく。

「リイ、立つのよ。早く行かなきや」

最初に動いたのは、ローズだった。

リイの左腕を驚づかみにすると、無理矢理立たせた。

リイは体を震わせ俯いていたものの、全く抵抗することもなく、ロ

ーズにひかれるまま、前へ進んだ。

「さあ、あんたも行くのよ！早く！」

ローズはUILの横まで来ると、脅すような目つきでUILを見ながら言つた。

「失敗は許されないわよ！」

そしてもう一步ローズが前へ踏み出そうとした時、外からドンとう、何かが破損するような鈍い音が聞こえた。同時に船が大きく傾く。

人々の悲鳴が上がった。オジエ夫人もカミーユをしつかりと抱きな

がら、周りの悲鳴に加わった。

ローズはバランスを失い、前に転びかけたが、危機一髪ウイルの胸倉を掴み、態勢を立て直した。

ウイルは掴まれた勢いで前につんのめりになり、そのまま廊下の壁に顔から激突した。

幸い、船は徐々に態勢をもとに戻した。

ウイルは目を涙で潤ませ、鼻をさすりながらもほっとした。…のは束の間だった。

「時間がない」

次にウイルの服を掴んだのは、ローレイだった。

「今のはこの船が捕らえられた音だ。ローズ！」

ローレイは顎で先に行くよう、合図した。

ローズはローレイに黙つて頷くと、まだ体を震わせているリィの腕を掴み、走りだした。

「さあ、行くんだ。俺が一番後ろを歩く」
有無を言わせない口調。

ウイルもローズの後に続いて、走りだした。

が、進まない。

何事かとウイルは後ろを振り返った。

すぐそこには、オジエ夫人の顔。その左手はウイルの服の裾を掴んでいた。

「どこに行くんですか？私達も連れて行つてください。お願ひします。私達を助けて」

オジエ夫人は顔を真っ赤にし、泣いていた。

「夫が…この子の父親がオーラムステッラ島で待っているんです。

この子は一度も父親に

「今すぐに離せ」ローレイは唸るように言った。

「女だからと言つて、俺は容赦はしない」

夫人は取り乱し膝を床についていたものの、カミーユを抱く右腕と、
ウィルの裾を掴む手は微動だにしなかった。

「お願いし 」

夫人の声は、デッキの方からのすさまじい人々の悲鳴に搔き消された。

ドタドタと逃げ惑う人々の足音も聞こえる。

鈍いウィルでも今すぐに逃げなければならないということが、はつきりと分かつた。

「オジエさん。すみません。離して 」

ウィルが言い終わらないうちに、オジエ夫人の体が大きく傾いた。ローレイが横からオジエ夫人を思い切り押したのだ。ようやくオジエ夫人の手がウィルから離れる。オジエ夫人が床に倒れるのと同時に、カミーユが火がついたように泣きだした。

ローレイは即座に左手でウィルの腕を掴み走りだした。右手は剣の柄の上に置かれている。

デッキからの騒ぎがすぐそこまで迫ってきていたのが分かつたが、ウィルは気にならなかつた。

それよりも何よりもウィルの背中を追いかける、オジエ夫人の嗚咽とカミーユの泣き声。

心臓が張り裂けそうだつた。

仕方がない。僕にはどうにもできない。

ウィルは自分に言い聞かせた。

けれど、涙で視界がぼやけるのを防ぐことはできなかつた。

ウィルとローレイは階段を下り廊下を走つて、なんとかローズと一緒に追いついた。

ローレイはウィルの腕を放すと、まだ力を無くした状態で、ローズに助けられていたリイを支えた。リイは熱があるかのようになつてしまっていた。

「俺がリイを連れていく。船長室はすぐそこだ。早く先に行け」ローズは黙つて頷くと、前に進もうとした。

だが一步踏み出したまま、止まった。

「おう。譲ちゃん、大部屋で一緒にいたな。最近は見かけなかつたが」

ローズの前に立ちはだかつていたのは、スキンヘッドの男だつた。「どこに行くつもりか知らないが、逃がさねえぞ。働き盛りの4人、市場では高い値がつくからなあ」

男はにんまり笑うと、右手をゆっくり上げた。手には大きなナイフが握らされている。

「傷つけられたくないなら、おとなしくロープに縛られるんだ」そう言つうと、男は左手で腰に携えているロープをポンとたたいた。ここまでなんだろうか。ウィルはナイフを見つめながら思った。男が戦い慣れしているということは、ナイフの使いこまれている感じからも難なく想像できる。僕達には到底勝てつ……。

「チツ」

こんな緊迫した状況の時に、味方側から舌打ちが聞こえるなんて、ウィルは露ほども思わなかつた。

ウィルが振り返ると、ちょうどローレイはリイをローズに預けているところだつた。

リイを受け取ると、ローズは怯えた目でローレイを見上げた。

「一体どうするつもり……」

ローレイは何も答えなかつた。だがその瞬間、ウィルはローレイの手が剣の柄にあてられるのを見た。

次のローレイの動作を、ウィルは見ることはできなかつた。ただ顔で、すぐ横を通るローレイの風を感じただけだつた。全ては2、3秒のうちに起こつた。ローレイの踏み込みの音。金属と金属がぶつかる音。何かが壁にぶつかる音。剣が空を切る音。ウィルが慌てて

男の方を振り返った時には、事は終わってしまった。ポタリ。

床に真っ赤な血が一滴落ちる。そしてまたポタリポタリと一滴、二滴。

スキンヘッドの男は、左腕で右腕を押さえていた。血は男の右腕から出でているらしい。右手に握られていたナイフは、男のすぐ横の壁に突き刺さっていた。

「勝負あつたな」

ローレイは剣を男の顔に向けながら言つた。

「くそ！」

男は顔をそむけた。

「潔くロープを差し出せ」

ローレイは剣をいつそう男の顔に近づけながら言つた。

男は観念したらしく、おとなしく従つた。

ローレイのその後の動作も素早く、ウィルは思わず見とれてしまつた。

まず男の腕を縛り、口もロープで塞ぐと、船長室の隣にある救命ボート室に男を連れていき、最後に足を縛つて部屋の戸を閉めた。3分もかけずに、ローレイはこれらのことと器用にやつてのけた。ローレイが凄い実力の持ち主だと分かつていたつもりだが、実際に目の当たりにするとウィルはただ啞然とするしかなかつた。ローズを見ると、ウィルと同じように驚いているのが分かつた。

「さあ、時間がない。船長室に入れ」

ローレイは何事もなかつたかのように言つて、再びリイをローズから受取り、歩き出した。

ウィルとローズは同時に我に返り、後に続いた。

読んでくださいありがとうございました！

船長室には誰もいなかつた。

「よし！俺がボートに乗つた後、リイを次に乗らせるんだ」

ローレイが窓に歩み寄りながら言つた。

ウィルもゆっくりと窓に歩み寄る。

外はひどい嵐。一隻の救命ボートに乗り移るなんて、いくら隠れるためとは言え、自殺行為ではないだろ？

ローレイはカーテンを指差した。

「その前にロープを少し緩めて、ボートを水面に置く必要があるな

「私がやるわ」

ローレイが手が塞がつてゐるので、ローズが前に進み出た。

「慎重にやれよ」

ローレイはリイを支えながら、顔だけ窓から外に出した。

「ボートが水面に浮かんだら、言つてちょうだいね」

ローズは慎重にロープをほどき、緩め始めた。

ローレイが横で「ゆっくり、そのまま」などと、掛け声をかける。

ローレイもローズも顔が今までにないくらい真剣である。

「よし！いいぞ。ロープをまたカーテンにキック結びつけるんだ」

強い雨と風が窓から入つてくる。波は高い。

階上からは人々の足音や悲鳴が聞こえてくる。

ウィルはなぜか取り残されている気がした。自分が緊急事態というステージにいないような感じがする。

「ウィル、リイを！」

ウィルは前に進み出てローレイからリイを預かつた。リイは目を閉じていたが息遣いが若干荒く、少し熱を帯びてゐるようだつた。

「行くぞ！」

ローレイは窓の枠に飛び乗ると、一瞬もためらひなく向ひ側に姿を消した。

ウィルは息をのみ、窓から身を乗り出した。

ローレイは荒れ狂う波の上のボートに、なんとかバランスとりながら立っていた。

足元には雨にぬれた革袋が置いてあった。ボートをここに隠していた人が準備した物だらう。

「さあ、リイを」

「分かった！」

外の嵐の音に負けないよう、ウィルはローレイに叫ぶと、すぐさまリイに話しかけた。

「リイ？ 今からボートに移すけど、大丈夫？」

リイはうつすらと目を開けると、小さい声で返事をした。

「…『」めんなさい。一気に船酔いがきたみたいで……。大丈夫よ」

リイは小さく息を吸うと、ふらふらとウィルを離れ自分の足で立つた。

ウィルはなおも肩を持つて、支え続けた。

ローズも急いで駆け寄ると、リイを支えるのを手伝った。

「ローレイ、行くわよ！」

ローズが外に向かつて叫んだ。

「分かった！」

大声で返事が返つてくる。

「大丈夫よ」

リイはウィル達に支えられながら窓枠に飛び乗ると、少し微笑んだ。動作が弱々しかつたものの、リイもためらひことなく、慎重にロープを伝つて降りはじめた。

足がボートに着くまで、あと數十センチといつところになると、ローレイが後ろからリイが抱きかかえるようにしてボートに降ろした。

「私、先に行くわよ」

ローズがそうウィルに言つた時には、既に枠に乗つていた。

「あんた、すぐ来なさいよ」

ローズはウィルに釘を刺すように言つと、ボートに降りはじめた。

「どうやらウィルの恐怖心を見透かしていたらしく。

ローズもローレイに助けられてボートに乗ると、ウィルに向かって叫んだ。

「いいわよー早く来て！」

ウィルは溜息をつきながら、手を窓枠にかけた。やるしかないんだよ、ウィル。

自分にそう言い聞かせながら、口を閉じ、大きく息を吸う。そして腕に力を入れ窓枠に飛び乗ろうとした時、閉めていた船長室のドアがバーンと大きな音をたてて開いた。

「どうして僕はいつもこうなんだ？」

後ろを振り返らず、すぐにもボートに飛び乗るべきと頭の隅では分かっていたが、体が言つことを聞かなかつた。

ウィルはゆつくつと振り返つた。

「ドアのところに立つていたのは、ドーラ船長。

「お…お前は何しているんだ。そ…そこで」

船長の声は震えていた。その顔は蒼白だつた。

ウィルはもつともな質問だと思った。今自分がいる部屋は、この田の前に立つている人の部屋だ。

船長は足早にウィルに近づいて來た。

ウィルは正直に逃げようとしていることを言おうと思つた。ドーラ船長はこの緊急事態に責任を感じ、少しでも客を安全に逃したい、そう考えているはずだ。

すぐ近くまで來たドーラ船長を見上げ、口を開ひらとした時、世界が突然傾いた。

世界ではなく自分が傾いたのだと気づいたのは、ウィルが床に倒れた後だった。

ウィルは驚いて、自分を突き飛ばした張本人を振り返った。ドーラ船長は窓から上半身を乗り出していた。

「お前達は何をしているんだ。この…」

ウィルはドーラ船長の蒼白な顔が、一気に赤くなるのを見た。ドーラ船長は外にいるローレイ達に向かって、大声で叫んだ。

「この泥棒！ 今すぐにその船を降りるんだ。その船は私の者だ。くそ。野族どもからもらつたルクも乗せてあるというのに」

ウィルは信じられない思いでドーラ船長を見つめた。

「手引き」は目の前にいる、ドーラ船長だった。

ありえない。

ケンがあんなにも尊敬していたのに。船長の名譽をあんなにも守ろうとしていたのに。

怒りが沸々と込み上げる。

「船長のくせに……。信じられない。この」

ウィルは感情任せに大声をあげた。

「人でなし…！」

ドーラ船長はウィルの大声にピクリとすると、ようやく視線をウィルに戻した。

まるで骨董品を品定めするかのような目で、ウィルを眺めた。

ウィルがやばいと思った時には、もう手遅れだつた。

ウィルはドーラ船長に腕をつかまれ、白髪が生えている老人とは思えない力で引き起こされた。

そして気づいた時には、顔の前に綺麗に磨かれていたナイフが突きつけられていた。

「おい！ そこの泥棒！」

ドーラ船長は外のローレイ達に向かって、大声で言った。

「早く降りるんだ。さもないと、この小僧の命はないぞ」

その多くのしわが刻まれた顔には、薄笑いが浮かんでいた。

「くそー。」

救命ボートの上で上手くバランスをとりながら立つていたローレイは、睡を吐いた。

「どうするの？」

ローズが座つたまま、ローレイを見上げた。

「とにかくあいつを助けないと……」

「俺が行く」

ローレイはロープを手にとりながら言った。

「わざと止付けてくる。その間に俺のリュックの中の浮き袋を身につけておけ。リイにも着せておいてくれ」

そつ言つてロープに足をかけた時、今までのよりも一際強い風が救命ボートを襲つた。

救命ボートは風に流され、ローレイはバランスを失つてボートに倒れた。

「早くいかないとあいつが……」

ローズは立ち上がり、ロープを手繰り寄せめるひつぱつた。すぐにローレイも立ち上がり、ローズを手伝つた。

ゆっくりと船はもとの所に戻つていった。

あともう少し。ローズが唇を噛んで、腕に全身の力をこめた。だが次の瞬間ローズは悲鳴をあげながら、後ろに倒れた。風で倒れたのではなかつた。

波でもない。

ボートをつなぎとめいていたロープが切れてしまったのだった。

一方ドーラ船長はウイルにナイフをあてたまま、窓から2メートル離れたところでローレイ達が上がつてくるのを待つていた。外がど

うなつているのか、全く分からなかつた。ローレイ達が上がりつくる氣配も一向に感じない。

「早くしないと、この小僧の命はないぞ」

再びドーラ船長が叫んだ。ナイフが数センチウイルの顔に近づいた。ウイルは目を閉じた。

ローレイはどういう手段をとるのだろうか。また僕のせいでこんなことに……。

でもローレイなきつと上手くやつてくれるに違いない。

ナイフを当てられていても、ウイルは自分でも驚くほど冷静だつた。もちろん心臓はバクバクと猛スピードで動いていたが、パニックに陥つたりはしなかつた。

もしかしたらドーラ船長の何がなんでもボートを取り返したいという必死の気持を感じ取つていたからかもしれないが、それと同時にローレイのことを知らず知らずのうちに深く信頼していたからでもあつた。

自分が置いて行かれるという疑念は、これっぽちも湧かなかつた。ローレイは必ず助けに来てくれる。

「何をするんだ」

驚きのまじつたドーラ船長の声が聞こえたのと同時に、ウイルの体は自由になつた。

振り返ると、ドーラ船長は何者かに羽交い締めにされていた。ウイルはその者の顔を見て叫んだ。

「ケン！」

読んでくださってありがとうございました
感想お待ちしています。

「ドーラ船長はウイルが叫ぶと、血相を変えた。

「お…お前よくも船長に向かつて……」

「ドーラ船長はケンから逃れようともがきながら言った。

「何が船長だ！」

ケンは、ドーラ船長を締めている腕の力をいつそう強くした。

「密を野族の者どもに売る船長が、船族がいつえどこにいる？恥ずかしくねえのか。海色の腕輪の誇りはどうした？一人だけ逃げようとするなんて……」

「離すんだ。離せ。私が好きでこんなことをしたとでも……？」

「あんたが好きでやつたことだろうが、何か理由があつたことどうが関係ない。あんたはこの船を売つた。それが事実だ。お前の名譽なんか、もうこの海の上に存在しない」

ケンは涙に目を浮かべていた。ドーラ船長はあきらめずにもがき続けている。だが、ケンの力にはかなわない。

「俺は最後まであんたを信じようとした。ディナーパーティの始まる前。俺はそうじと嵐が来るんで救命ボートの状態を調べるために隣の部屋を訪れた。綺麗に並べてあつたボートが乱れていたことや壁に穴が開いていることから誰かがこの部屋に入つたことが、俺にはすぐに分かつた。梯子を動かして棚の上にあつた浮き袋が少しうられていることも分かつた。不思議に思ったが、俺はそこまで驚きはしなかつた。嵐に怯えた客が、この部屋に忍び込んでくすねたのだろうと思つたのだ。本当に驚いたのは、音が隣から聞こえて壁の穴を覗いた時だよ。あんたがボートを苦労しながら窓の外に隠すのを、俺は見たんだ。あんたはボートを運ぶのに夢中で、気付かなかつたと思うが」

ドーラ船長はそこで、ぴたりともがくのをやめた。ウイルは息をひそめて、ケンの話に聞き入つた。

ケンは続けた。

「それでも俺は何か理由があつてのことだらうと、無理矢理自分を納得させた。それだけあんたを尊敬していたんだ。だがディナーパーティの時。野族をあんなにも毛嫌いしていたあんただ。見るからに泥腕輪のあの男達と話しているのが、俺の目にどれほど異様に映つたのか分かるだろう。怪しいと思い、食堂を出た禿頭の男をつけてみたら……。それでも、俺はお前への疑いを消そうとした。それなのに……。それなのに」

「うるさい！ 黙れ！！」

ドーラ船長が叫んだ。ウィルは驚いてびくつとした。

「何も知らないくせに、偉そうにするな。ケン・オハラ。私の妻と娘は原因不明の病氣で床についている。薬はまだ開発されていない。このままでは命も危うい。ただ風の噂で、その病氣を遅らせる薬があると聞いた。だが薬を欲している者は五万といて、手に入れるには途方もない額のルクが……。私の貯金したルクでは全然及ばない」船長は急に声の調子を変えた。もう抵抗はしていない。

「お願いだ。行かせてくれ。妻と娘が私を待っている」

ドーラ船長は必死だつた。必死の願いだつた。

ウィルは船長に怒りを感じる一方で、同情せずにはいられなかつた。

「俺はさつき言つたはずだ」

ケンは怒りを押し殺しながら言つた。

「どんな理由があつとも、お前はこの船を売つたのは事実だ。何の変りもない。海を渡る者として決してやつてはなんねえことを、あんたはやつた。俺は許さねえ。あんたは俺と一緒に、密と一緒に野族の捕虜になるんだ。絶対に逃さない」

ケンの意志の固い言葉に、ドーラ船長は全身の全ての力が抜けたようだつた。

だらりと頃垂れ、つぶやいた。

「ナタリー。メイ」

窓の外から叫び声が聞こえた。ローズの声だ。

「ウォルト！ 無事なの？ ウォルト！」

ウィルは振り返って叫んだ。

「ああ、無事だ。ケンが助けてくれた！」

そしてウィルは視線をまたケンに戻した。

ケンは窓の方を顎でくいっと指した。

「行け、早く行くんだ。今野族の者達は上で捕獲をしている」

そこでケンは歯を食いしばった。

「それが終わったら、ここにも降りて来るだろ？ さあ、行くんだ」「ウォルト、大丈夫ならすぐ来て！！ ボートがもう……」「

ウィルはローズの声にまた振り返ったが、さつきと同じようにすぐケンに視線を戻した。

「ケン。僕……」

ケンは大声をあげた。

「いいから行くんだ！！ お前だけでも助かるんだ。行け！ 行くんだ！」

ウィルは口をつぐんだ。そしてくるりと向きを返ると、窓のところに走った。

窓の枠に上ると、ボートをつないでいたロープが切れているのが分かった。

だが代わりにローレイが先に大きな鉤針のついたロープを窓の縁にかけ、なんとかボートを船につなぎとめている。

ローレイがウィルを見上げて言った。

「鉤針を外してから、すぐに飛び降りろ！」

ウィルは最後にもう一度ケンを振り返った。

ケンは笑っていた。

「じゃあ、またな。ウォルト」

ケンは何でもないように別れの挨拶をした。明日も会う予定の友人に挨拶するかのように。またすぐに会えるかのよう。

ウイルは胸がいっぱいになり、そのために言葉が出なかつた。

ケンもカミーユも見捨てて、僕は一体どこに行くのだろうか。
何をするために、自分だけ助かるのだろうか。

答えは出なかつた。

ウイルは鉤針を外した。

そして目を閉じ、飛び降りた。

読んでくださってありがとうございます。
感想お待ちしています。

天性

「海賊船よ！」

ローズの指の先には、3隻の中の1隻の野族の船があつた。 ウィル達が乗つていた、客船とは随分雰囲気や造りが違つていた。 海賊船は客船よりも大きく、デザインが粗雑だつたが全体的にがつしりとしていた。

海賊の船だつた。

海賊船から客船にかけて板が架けてあり、野族の者達が客船にそれを使つて乗り込んで行つたことが分かる。

ウィルが窓から飛び降りると、ローレイは剣を船から抜いた。

救命ボートは荒い波のおかげで急スピードで海賊船に向かつている。

「あれに私達乗り込むね」

ローズがひつそりとした声で確認した。

「ああ」

ローレイが答えた。

「船に残つているのは少ないだつて、救命ボート室とかには人はいないだろう」

「それにしても」

ウィルが浮き袋を身につけながら、言つた。

「僕達ラツキーだよね？自分達でこがなくとも、この波があの船まで連れて行つてくれるんだから。結構速いスピードで」

海賊船まであと2メートル程。

「それでもないみたいよ！」

ローズが悲鳴のような叫び声をあげた。

荒波を走るボートは速すぎた。

「突撃だわ！」

「飛び込め！」

ローレイは叫ぶと、リイを腕の下にかかえ海に飛び込んだ。ローズとウィルも間髪入れずに飛び込んだ。

4人は海賊船に衝突せずに済んだが、乗り手がいなくなつた救命ボートはそういかなかつた。

救命ボートが海賊船にぶつかり、鈍い音がした。

ウィルは泳いだことなど一度もなかつたが、直前に身につけた浮き袋のおかげで助かつた。

ウィルは感動して、隣に浮いていたローズに話しかけた。

「浮き袋って、本当に優れものだよね？」

「良かつたわ！荷物が無事だつた。やつぱりついてるわ！」

見事に無視された。

ローズの後について、足を不器用にバタつかせながらウィルはボートに近づいた。

波が荒いため、ほんのちょっととの距離でも近づくのに苦労した。縁をつかんでボートの中を除くと、真ん中に大きな亀裂が入つていた。

「本当にラッキーだつた。各自荷物をとるんだ」

ローレイはそう言つと自分とリイの分をとつた。

続いてローズとウィルが荷物を手に取つた。

「良かつ……」

急に黙り込んだウィルを見て、ローズが不思議そうに聞いた。

「違う……」

「え?」

「これ、僕のじゃない」

ウィルが手にしたのは、ボートにもともと乗せてあった革袋だった。つまり、ドーラ船長が準備していたもの。もう一度ボートの中を確認する。

ない。

ボートの上には何も乗っていない。

ウィルは顔から血の気がひいていくを感じた。

薬や『基本薬学』の本なんてどうでもいい。

そんなの糞くらえだ。

ルク……。

ローレイも持っているからなんとかなるだろ?。

ウィルはボートの向こう側にいるローレイを必死の面持ちで見つめた。

ローレイは気づいたらしく、同様に顔が真っ青になつていた。

「どうしたの? そんなに大切なものが入つてたの?」

ローズがローレイとウィルとを交互に見比べながら聞く。

波が船に激しくぶつかり、大量の水しぶきがウィル達にふつてきた。

大切な物。

そうだ。

大切な物。

僕達にとつては唯一の道標だったんだ。

この国の守護神、そして王家の紋章ペガサスが刻まれた、古びた木箱。

絶対に失つてはいけなかつた。

大きな波のせいでウイルの身体がふわっと浮き上がる。同時にウイルの胃も浮き上がるような感じがした。

「あら？」

ふと我に返ると、ローズが目を細めてウイルを見ていた。

「何？」

短い言葉に大きな絶望感をこめて、ウイルは聞いた。

「あんた、持つていいんじゃない」

「何を？」

ウイルは今度はいらいらしながら聞いた。

「リュックよ。あんたの背中！」

ウイルはいきおいよく首を回る限界まで回した。

あつた。

ウイルはリュックをしっかりと自分で背負つていた。服が水を吸収し重くなつていて、リュックの重みに気がつかなかつたのだ。

そういえば、浮き袋を身につけるので精いっぱいで、下ろす時間がなかつたんだ。

「あんた、本当に間抜けね。きっとそれは天性のものだわ」ローズが確信したように言つた。

一方ローレイは何も言わなかつた。

実を言つと、ほつとするのと呆れ返るので何かを言つ余裕がなかつたのだ。

しゃべりくして、ローレイはポツリとつぶやいた。

「乗り込むぞ」

天性（後書き）

読んでくださつてありがとうございます。

今回の話は少し遊びました。（笑）

次回は眞面目にがんばります！

感想をお待ちしています
更新の励みになります！

「どうやって乗り込むの？」

ウィルはローレイに大きな声で聞いた。

今、4人は海賊船を見上げていた。

「早くしないと……」

そこでウィルは言葉をきり、リイとローズを順に見た。言葉を続けなくとも、言いたかったことは明白だった。リイは目を閉じたまま荒い息をしている。さつきよりも苦しそうだ。ローズはしっかりと目を見開いていたものの、紫色になつた唇を震わせていた。

激しい雨と荒い波が、着々と4人の体力と体温を奪つていった。

「ちょっと待つてくれ……」

見ると、ローレイはズボンのポケットを探つていた。

「くそ、手が震えてうまく動かねえ……」

その直後ローレイが取りだしたものを見て、ウィルは舌を巻いた。やつぱりローレイはただ者じゃない。

大きなかぎ針つきのロープ。

ローレイはそのかぎ針を右手に持つと、海賊船を見上げた。客船とは違い、海賊船のデッキは低い位置にある。

そのためロープをかけるのに、さほど苦労はしなかつた。

4人はすみやかに海賊船に乗り込んだ。

皆無言だった。それだけ、船の上に上がりたいという気持ちが強い。野族の者達も雨に打たれながらデッキに立つてているのが嫌なのか、そこには人がいなかつた。

「身を低くしろ」

それでもローレイは慎重さを捨てなかつた。

一同はローレイの後について、看板から階下に続く階段の前まできた。

ローレイは立ち止まり、靴と靴下をぬぎ、リコックにしました。

「足をふくんだ。全身も軽くふいてくれ。服はしぶるのがいいだろうな。ぽたぽたしずくが落ちると、後で見つかりやすいからな」

3人は無言で言う通りにした。

「それくらいでいいだろう。少しずくが垂れても仕方ない。乾くのには時間がかかる」

ローレイが三人を見渡しながら言つた。

「（）からはやつらがいる可能性が高い。できるだけ足音を立てるな。声も出すな」

だがその忠告はウィルならまだしもローズとリイに言つ必要はなかつた。

リイはもともとぐつたりしていて、歩くのも弱々しかつたし、ローズはローズで寒さのために顔は蒼白で体を震わせており、話したりどすどす歩いたりする元気はなかつた。

ウィルもややぐつたりはしていたが、ローズやリイよりはましだつた。

ローズやリイはウィルよりも長い間雨に打たれていたからだらう。ウィルはふと湧き上がつた疑問を口にした。

「あの、ローレイ。（）に身を隠せそうな部屋があるか分かるの？」「分かるわけないだろ？」

ローレイは眉をひそめながら言つた。

「だが、だいたい予想はつく。行くぞ」

ウィルは口をきゅつと閉じ、リイ、ローズの後に続いた。

認めるのは悔しいが、ローレイの言つ通りにしていれば大丈夫という思いがあつた。

廊下を歩いた後、4人はさらに下へと続く階段を下りた。階上に比べ、そこは薄暗く少し汚かつた。ランプの数も少ない。

4人はなるべく静かに歩いたが、そこまで気をつかなくとも外の嵐がその音を消してくれていた。

ローレイが立ち止まつたので、後ろの三人も止まつた。突き当たりの部屋。

ローレイは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「5、6人くらいまでならいける、だが、それ以上は……。いや、その可能性は極めて低い」

そしてローレイは後ろの三人に呼び掛けた。

「行くぞ」

静かにドアノブを回し、わずかにドアを開ける。

ウイルはローレイがそうするものだと思つた。

だが、違つた。

右手は剣の柄に置き、左手でドアノブを回し、音は立てなかつたものの、いきなり大きく開けた。

そのため4人の視界に一瞬で一人の男が入つてきた。

「お……お前達は一体……」

「一人か……ラツキーだ」

部屋にいた男の言葉は無視して、ローレイが言った。

「暴れられると、他の奴らに聞こえるかもしけねえから、さっそく」
そういうと、ローレイは飛び出した。

「ひいいい……」

男の悲鳴と同時に、ドスンという音がした。

ウイルが急いで部屋に入ると、男は尻もちをついていた。手には何も持つていない。

自分に向けられた、ローレイの剣を怯えて見てている。

ウイルは少し首をかしげて、男を見つめた。

スキンヘッドの男達とは随分違った体格をしていた。

団体はでかいが、がつしりはしておらず、雪だるまのよつこまるまると肥っている。

身長もあまり高い方ではなかつた。

少し長めの黒髪はぐしゃぐしゃだ。

「い.. 命だけは助けてくれ！」

男は嘆願した。

ローレイは呆れ返つた顔で肩をすくめた。

「おいウイル、俺の背中のリュックからやつきたロープをとつてくれ。そしてローズ、部屋に入つてドアを閉めてくれ」

「どうやら、部屋はビンゴのよつだね」

ロープをリュックから取り出し、手渡しながら言つた。

その部屋には古びたイスや机、本などガラクタばかりが置いてあつた。

ローズとリィは部屋に入ると、壁によりかかつて座り込んだ。

「やうだな」

ローレイは相槌を打ちながら、男の両手を縛つた。男は抵抗しなかつた。余ほど怖かったのか、自分から両手を差し出していた。続いて尻もちをついた格好のまま、両足を縛る。

「ちよつとでも、大声を出したら」

ローレイはきつく縛りながら脅した。

「命はないと思え」

男は何度も激しく頷いた。

「名前は？」

ローレイが男に聞いた。

「キリル・ベート……」

ローレイを怯えた目で見上げながら、男は答えた。

ローレイはにやりとした。

「よろしくな、キリル」

その表情は野族の奴らよりも恐ろしかった。

ウィルは寒さのためか、あるいはローレイの恐れじとのためか小さく身震いをした。

読んでくださってありがとうございます。
感想をお待ちしています。

海賊船の倉庫に乗り込み、2時間ほどたつた頃。

ローレイによるキリルの尋問は既に終わり、倉庫の中の5人は無言のまま座り込んでいた。

誰も一言も話さない。キリルを除いた4人に関しては、その気力も残されていない。

ウィルも乗り込んだ時はまだ良かったのだが、倉庫に入つて安心したせいか、この数時間で疲れがどつときた。ローレイが倉庫の隅で見つけた毛布を身にまとつているが、毛布の中で体が震えていた。海賊の者達に見つかった時のことを考え、服を脱いで乾かすこともできない。

リイとローズの容態はさうにひどかつた。2人とも発熱をしているようで、はたから見ると意識があるのかどうか分からない。特にリイはよほどの高熱が出ているらしく、ときどきうなされて、小さく何かつぶやいていた。

ローレイは士族の村で小さい頃から修行を積んできたため、体力には自信があったが、昨晩準備や偵察などでほとんど寝ておらず、またエシミス島を出発してから四六時中神経を尖らせていたので、さすがに疲れ、その目は空中の一点をぼんやりと見つめていた。

キリルの尋問は円滑に進められた。キリルは内部情報を漏らすのに何の抵抗もなかつたようだ。自分の命をかけるほどの仲間及び首謀者への忠誠心はなかつたらしい。

この襲来の首謀者はウーラ・グラーク。海賊として名高く、今回は3隻の海賊船を仕切つている。幸いウィル達が乗り込んだ船とは別の船に乗り込んでいるらしい。酒が好きで、いつも手には酒が握られているらしい。この船の海賊たちはほとんど客船に乗り込んでい

るが、バヤン島に着くまで客船に待機するという計画であった。今頃は客船の食べ物で宴会をしていだらうとキリルは言った。

ここまで来て、運はようやくウイル達の味方してくれた。バヤン島に着くまでこの今いる部屋にいても、見つかる可能性は極めて低いらしい。だがローレイは油断せず、ドアの前にほこりをかぶついた本棚を置き、簡単に開かないようにし、野族の者が部屋に入つてくる前に窓から外へ逃げられるようにした。

「それで、お前は何をしていたんだ？」

ローレイの最後の質問はこれだった。

「もうじだよ。お…俺は雑用係なんだ」

ローレイは馬鹿にしたように鼻をならした。

「馬鹿にしたきやすればいいさ。まつとうな人間にも野族にもなれない俺を」

この時だけキリルは声を荒げた。

「だけどこの方がいいんだ。下手に命を懸けなくともすむ。危なく

なつたら逃げられる。小心者の俺には」これがふさわしいんだ

キリルの声は次第に小さくなつていき、最後は自分に言い聞かせる

ようだつた。

「そうだな。まあ、俺達にはお前が好都合だった」

ローレイはそう言つと、尋問を終わらせた。

一時間以上続いた沈黙の後、ふいにローレイが立ち上がつた。

他の者達の視線がローレイにそそがれる。

ローレイは窓のところに静かに歩いて行つた。

「足音……」

「え？」

ウイルがローレイに聞き返した時、頭上でドタドタという音がした。客船から数人野族の者が戻つてきただ。入港準備。キリルがそう言つていた。

「時間みたいだな」

ローレイは振り返って言った。

その顔は今までよりも険しかった。

「これからが、もしかしたら一番の難関かもしない。体力もあまり残っていない。しかも、これから足をつける島はバヤン島。安全に休息をとれる場所があるかどうか分からぬ。でも、死ぬ気で力を振り絞れ。でないと、本当に死ぬからな」

「ああ、そうだ」

同調したのは、仲間ではなく敵だった。

キリルは何度もしきりに頷いた。

「バヤン島。それは恐ろしい島さ。騒動や犯罪が絶えない島。闇の島つて言われているんだ。特にお前たちみたいな野族でない者達には、とてつもなく危険な場所だろうな」

「どんなに危険だろうが、俺にとつては野族になり下がつて掃除なんかをさせられるぐらいなら、死んだ方がマシだな」

ローレイはキリルの方を見ずに答えた。

「こんなクズと話している場合じゃなかつた。行くぞ！」

ローレイの呼び掛けた3人は、それぞれフラフラしながら立ちあがつた。

ウイルはふうっと息をはくと、リイに駆け寄り支えた。

リイの顔の表情を見ると、立つてているのが奇跡のように思えた。

「浮き袋があるから溺れはしないだろう。泳ぐのは数十メートルだけだ」

『その数十メートルが今の僕達にとつては…』ウイルはそう言いかけたが、すぐに思い直して口をつぐんだ。ローレイだつてきっと分かってる。僕よりもずっと賢く、ずっと有能なんだから。僕はおとなしく従うのが一番だ。

「手のロープだけ切つてくれ！」

窓から飛び降りる準備を始めたウイル達に向かって、キリルが唐突に叫んだ。

「こんな状態で仲間に見つかったら、ひどい仕打ちにあう。なあ、

いろいろ教えてやつただろつ・足のロープは君達が行つてからひまぐ
く。もちろん君たちのことば、仲間にならぬよ「みやこ

ローレイは振り返つて溜息をついた。

「話したらお前がひどい顔で金づるだらうへ。仲間のせいで

読んでください。ありがとうございます。

少年はいつもの道を走っていた。

何度も通っている道なのにやはり落ち着かない。

心臓がバクバクと鳴るのをおさえることができない。

外が怖い。部屋の中にいたい。

外に出るといつもそう思う。

外に出てきてしまったことをいつだつて後悔するんだ。

だが仕方がない。

ここに暮らしている以上、外に出ないと死んでしまう。

それに、たつた一人の自分が敬愛する人を困らせる事になる。

それだけはしたくない。

行き場のなかつた自分を受け入れてくれた人だ。

それがどんなに小さなところだろうと、あるのと無いのでは天と地の差。

その場所が無ければ、俺の行く場所なんて無い。

この世界のどこにも。

港で開かれる市場。

この島では比較的安全な地域だが、それでもやはり危険に満ちている。

商人達は多少の危険は顧みない。

金のために、この島の港までやつてくる。

真夜中の市場に。

少年は汗ばむ手をさらさらと握りしめた。

その手に握られている袋の中には、頼まれた買い物と蟻族の者からもらった小包が入っている。

少年が走っているのは堤防。

ここなら人がいたらすぐに認知できる。

昼なら。

だが今は真夜中。

この島の住人にとっては活動の時間。

身を潜められる壁などがない分、建物で入り組んだ所よりは安全だ。

少年の左手には砂浜、そして海が広がっている。

今まで読んできた本の中では、海はたいてい綺麗なものとして扱わ
れていた。

だが自分には理解できない。

ここは海は海賊達のフィールド。

海賊達の世界。

この海は毎日哀れな人々も連れてこられる。

リンチに会う人々。

奴隸市に出される人々。

手持ちの物をすべて奪い取られるだけで済んだのなら、それはとて
も幸運だ。

今日も奴隸市が開催されるらしい。

何でもあの悪名高いウーゴ・グラーケ主催だとか。

今回の犠牲者は何人だろうか。

自分にできることは、ほんの少ししかない。

人助けにはお金がかかる。

無一文の俺には何も……。

そこで少年は思考を停止させた。足も同時にとめた。

暗闇に包まれた砂浜で、うごめく人を目の端でとらえたのだ。

息を切らせながらその人影を見つめる。よく見ると、1人ではない。4人いる。いる、のだろうか？

2人は膝をついている。この2人は「いる」に違いない。

だがあの2人は砂浜に倒れていた。

この砂浜で倒れている人はそんなにめずらしくないが、大抵絶命している。

2人は遺体として、あそこに「ある」のかかもしれない。

近づかない方がいい。危険だ。

今すぐここから離れる。

いつもだったら、そう思う。即座にこの場所を後にしているはずだが不思議とこの時だけは、そのように思わなかつた。

直感が告げていた。

行け、と。

あの人達は安全だと。

行かなければならぬと。

少年は吸い寄せられるように、その人たちのもとへ向かった。

闇の島 3 (後書き)

読んでくださいありがとうございました。

次回は誰かさんの過去にせまつます & メモ・#9835 ;
おたのしみに!!

「兄さん、 やるつい早く！」

6、7歳くらいの男の子が、自分よりも頭一個分背の高い少年の服の裾をつかんで言った。

「もうちょっと待ってくれ。今、このまき割を終わらせるから」

兄と呼ばれた少年は笑いながら、また斧をふりあげ薪を割った。

「少し下がっている。危ないからな。ちゃんと勝負してやるから」

男の子は素直に2・3歩下がった。

「今日は僕が兄さんに勝つんだ。昨日の夜も一人で僕修行していたんだ」

男の子は兄の背後から大きな声で言った。次に男の子は自分の開いた両手を見つめた。

「手に肉刺ができるくらいやつたんだ」「まだまだ俺にはかなわないよ」

まき割の少年は手を動かしながら、答えた。

「俺の方が数年多く修行しているんだ」

「今日こそ勝つさ。絶対勝つ！」

「もう百回も聞いたよ、その言葉」

兄の笑い声に、男の子はムツとした顔をした。

確かにその通りだ。

何回も、何回も手合わせしても、兄さんにはかなわなかつた。たくさん、たくさん練習しても。

しばらく沈黙が続いた後で、男の子はやや元気を無くした声で言った。

「いつになつたら、兄さんを抜くことができるの？僕は一生兄さんには勝てないの？」

「さあな、それは君次第だな。不可能ではないぞ。鍛錬を続けるこ

とだ

少年はそう言いながら、また薪を割つた。

「俺達は、ライバルだからな」

場面が変わつて、そこは人里離れた野原。だがその日は多くの人が見物に来ていた。

人々は目の前で繰り広げられている、1対1の戦いに息を飲んだ。

何と美しい。

もはや強いとかそういう次元の話ではなかつた。

闘つてている2人の少年の身のこなしには、少しも無駄がない。まるで舞つてているかのように、2人は戦い続ける。

顔は真剣だ。

一瞬たりとも気を抜かない。

先に気を抜いたほうが負け。

誰もがそれを分かつっていた。

名誉をかけた戦い。

この試合で見事優勝を勝ち取つた者には、一族にとつて最高の荣誉が与えられる。

その称号は、最強の者にだけ与えられる。

この試合が開かれるのは約30年ぶり。

この日のために多くの者が修行を積んできた。

ここに多くの熾烈な戦いが行われ、多くの者が悔し涙を落した。

この試合のために、今までの人生全てを賭けていたと言つても過言ではない。

今は最終試合に上り詰めた2人が、もつ目の前にある栄誉を賭けて戦っている。

何ということだらう。

よりによつてなぜこの2人なのか。

この先2人はどうなるのか。

観衆はもちろん、試合で敗れ意氣消沈していた者達も、我を忘れてその試合を見つめていた。

世界最強の者同士の試合。

誰もがそう思った。

2人はほぼ互角。

試合は今までの試合の中で一番長引いていた。

闘っている2人の真剣な顔にやや疲れが見え始める。

闘っているうちの1人。

赤茶色の髪をした少年は一度一步下がった。

同時に相手も動きを構えたまま、ぴたりと止める。相手のことは何もかも熟知している。

一番よく知っている相手。

一番多く手合させをしてきた相手。

それは相手にとつても同じ。

前からうすうす気づいていた。

最後の試合に誰と戦うことになるのか。
誰と向かい合つことになるのか。

幼いころは、いつもその背中だけを見ていた。

努力してもなかなか距離を縮めることができなかつた。

だが今は違う。

少年は相手を真っ向から睨みつけた。
今は「うして同じフィールドに立つている。

少年は大きく息をはき、そして足を踏み出し、相手のところに飛び込んだ。

予想通り、受け止められる。
しばらく押し合いが続く。

黙目だ。

少年は思った。
このままでは後ろに跳ね返される。
そうはさせない！

少年はまたもや一步下がったが、今度は間髪を入れずにまた前へ飛び込んだ。
また受け止められる。

観衆のほとんどは思った。
また同じだ、と。

だが違つた。

少年は相手が受け止めた時、やや後ろに押されたのを見逃さなかつた。

体力はどちらもあまり残っていない。
集中力もあと少ししか続かない。
極限状態が続いている。
何て過酷な試合だろう。

どうする？

残された体力をどう使う？

少年は自問した。

そして答える。

持久戦では負ける確率が高い。
ならば。

残された力を腕にこめ、少年は剣を振り上げた。

今までの修行の日々が走馬灯のように頭の中を駆け巡る。

少年は勝負に出た。

早く試合を終わらせないと、自分の勝率はがくんと下がる。

相手の剣に迷うことなく、何度も何度も打ちつけた。

相手も負けてはいない。

何度も何度も受け止める。

今までそうだったじやないか。

少年は自分を勇気づけた。

俺はあきらめることを知らずに、何度も立ち向かって行つたんだ。

そしてそれは今も同じだ。

剣と剣のぶつかり合う音が、野原に響いた。

そして。

少年の最後の力をかけた、立て続けの押しの攻撃。

ふいに相手が少し後ろによろめいた。

さつとその表情に不安の色がよぎる。

少年は見逃さない。

迷うことなく、全身全靈で相手に向かつ。

覚悟はとうにできていた。

一人の剣が持主の手を離れ、空中を舞う。くるくるとまわりながら。

その場にいた全員の目がその剣を見ていた。

その剣は皆に終わりが来たことを告げた。

わっと観衆が沸きあがる。

剣をなくした相手は、静かに一人その場を後にした。

「まあ、頑張れよ」

一言だけ少年に残して。

笑おうとして失敗した顔で。

ふと少年が観衆に目をやると、母親の姿が目に入った。

興奮している観衆の中で、母は一人泣いていた。

うずくまって。

体を震わせて。

覚悟はできていたんだ。

少年は唇を噛みしめながら思つた。

これが士族の者の、上を田指す者の定めだ。
情けが通じるような甘い世界ではない。
分かつてはいたはずだ。

兄さんだつて。

とつぐの昔にさきていたんだ。

兄を追い越し、一番になる覚悟は。
「バディ」の称号を手にする覚悟は。

何かを得、何かを失う覚悟は。

闇の島 開話（後書き）

最近忙しくてなかなか執筆が進みません。

小説サイトのランディングでいつもクリックをしてくださる皆様。
ありがとうございます。

それだけを励みにがんばっています。（^-^）

次回は閑話休題。お楽しみに

「あー、目を覚ました。大丈夫か? 目を覚ます直前、アンタうなされ
てたぞ」

ローレイは、ぼんやりと自分を覗き込んでいた少年を見つめた。
ボロボロの服を着ており、肩につくほど伸びた髪もボサボサ、顔には泥がついている。

「ローレイ、起きたの?」

少年の後ろからウィルの声が聞こえた。

ローレイは、ベッドからがばっと上体を起こした。
そこは小さな部屋だった。壁のあちこちが壊れていて、みすぼらし
い部屋だった。

「ここはどこだ?」

「まだ寝てたほうがいいんじゃないかな?」

近くにいた少年が慌てて、ローレイをまた寝かそうとした。
その手をローレイは受け止め、きつぱりと言った。

「大丈夫だ。それより質問に答えろ!」

「そんなコワイ顔するなつて!」

少年は苦笑いをした。

「ここはピエールじいさんの家だよ。僕たち助けてもらつたんだ」
ウィルはローレイをなだめるように言った。

ローレイはウィルのその口調が気に食わなかつたらしく、ブイツヒ
横を向いた。

「ご機嫌ななめつて感じだな」

近くにいた少年が笑つた。

「あ、遅れたけど俺はアミン・メンぐ。よろしく」

ローレイは無視を決め込んだが、アミンは構わず話し続けた。

「あんた一日じゅう寝ていたぜ。もう夜だ」

ローレイはそっぽを向いたまま顔をしかめた。

さつきまで見ていた夢が、鮮烈に頭の中に残っていた。

あの時の兄の顔。

笑い損ねた顔。

あの後兄は行方知れずになつた。

母ナニーは「お腹がすいたら帰つてくるでしょう」なんて言つて笑つていたが、そうではないことを誰よりも理解していたに違いない。夜中に母が一人で泣いているのを何度もローレイは見た。

一番見たくない夢だつた。

よっぽど疲れていたのだろうか。

自分の体力を読み間違えたなんて。

ローレイは唇を噛みしめた。

「バディ」失格だな。

運に助けられるなんて、情けない。

「おや、目が覚めたのか」

部屋に一人の老人が入つてきた。

人を安心させるような穏やかな雰囲気を持つた人だつた。

「この人がピエールじいさん。この家の主だよ」

ウィルが説明した。

「昨日の夜のことを覚えているかの？」

ピエールが優しく聞いた。

ローレイは少し気を和らげ、老人の方を向き頷いた。

「だいたいは。こいつにここへ連れてきてもらつた」

ローレイはアミンの方を向いた。

海に飛び込んだ後、危惧していた通りリィとローズは完全に荒れ狂う海の中で意識を失つてしまつた。

ウイルと協力してなんとか2人を砂浜まで引き上げたものの、そこでウイルも当然のことながら力尽きた。さらにローレイも自分でも驚いたことに立つてもいられないほどに疲労に襲われた。

行く末が真っ暗に思えた時だった。

アミンがどこからともなくやつてきたのは。

結果的に良かつたとは言え、アミンを警戒するべきだったのに、その気力もローレイには残つていなかつた。

「……ハつ当たりして悪かつた。悪い夢を見てしまつて……」

ローレイは素直に謝つた。悪い夢のせいでハつ当たりなんて、さらには情けなかつた。

激しい自己嫌悪に陥る。

「助けてくれて本当に感謝している。情けないが、お前に助けてもらわなければ今ごろどうなつているか……」

「いじつてことよ」

アミンは笑いながら言つた。常に笑つてゐる少年だった。

「それよりお前腹へつているだろ？俺の作ったお粥があるぜ。薬草が入つてゐるから栄養満点だ。おいしつぜ。俺は料理が得意なんだ」

「それがいい。何か口にした方が、回復も早いじゃろ。アミンの料理は本当にうまいぞ」

アミンに続いて部屋を出ると、そこは粗末な台所だった。

「汚い家だが勘弁してくれんかの？」

ピエールが言つた。

「いえ、とんでもない。助けてくれただけでありがたいのに」

「そこに座つてくれ」

アミンがローレイの前にあつたテーブルを指した。

「今お粥を出すから」

ローレイはおとなしく黙つとおりにした。

アミンのお粥は本当においしかった。

スプーンを口に運べば運ぶほど、体がポカポカと温まり、回復していくのが感じられた。

ピエールはローレイの真向かいの席に座り、ローレイがお粥を平らげるのを田を細めて見守つていた。

「ここつもさつき起きたばっかりなんだ。何があつたのかは、ここつから聞いたよ」

ウイルの方を指しながら、アミンがローレイに言つた。

「後の一人はかなりヤバイ状態だつたけど、今はなんとか落ち着いたよ。まだ隣の部屋で寝ている」

「本当に助かった。恩にきる」

ローレイはそう言つと同時にスプーンをカチャリと皿に置いた、既にお粥を食べ終わつていた。

「だからいいって」

アミンは両手を振りながら、照れたように言つた。

「俺も嬉しいんだ。こんなに安くで人助けができるなんて」

「どういう意味？」

ローレイが機嫌が悪いのを恐れ後ろでそわそわと見守つていたウイルが、口を挟んだ。

「この島では人助けをするのに途方もなく金がかかるんだ」

ウイルはアミンの言つていることが理解できず、首をかしげた。

「ピエールじいさんは、野族に捕えられ奴隸市に駆り出される子供たちを助けるためにこの島にいるんだぜ」

アミンは誇らしげに言つた。

「まさか市で金を出して子供を買つてているのか？」

ローレイが驚いて聞いた。

「ああ、そうじゃよ」

ピエールが頷いた。

「野族の者達に金を払うなんて、本当に口惜しくて嫌なのじゃが、

それが一番安全に子供を助けられる方法なのじゃ」

「だが、金が相当かかるはずだ。助けられるのはほんの数人だろ?」

「そのとおりじゃな」

ピエールは顔を曇らせた。

「わしの財力は見ての通り、ほんどのない。ただ双子の兄が絵の才能があつてのう、その絵を売りさばいて、稼いだお金の一部をわしに送ってくれるんじゃよ。それでも助けられるのは、犠牲者のほんの一部。でも何もしないよりはずつといいとは思わんかね?」

ローレイは黙つたまま、ピエールを見つめていた。何かを考えているようだった。

ピエールは続けた。

「わしに助けられた子供たちは、何か胸に残るかもしれんし、そうでないかもしれん。しかし、胸に何かが残つたものはきっと自分もまた何らかの形で力になろうとする。憶測でしかないが、そうなればより多くの子供たちが助けられる。現にな、わしが助けた子供のうちの一人がこの前わざかだが、わしにお金を送つてきたよ。これで他の子を助けてくれとな」

ピエールの曇つていた顔がぱつと輝いた。

「わしはその心づかいが本当に本当に嬉しかったのじゃ。この気持ち分かるかの?」

「分かります」

数秒間をおいた後、ウィルは力強く答えた。

心の底からピエールのことを、凄いと思つた。

自分はカミーユ達を見捨てることしかできなかつたが、この老人は違つ。

僕とは大違ひ……。

感動すると同時に、苦い気持ちが残る。

自分の無力さ、未熟さを改めて思い知らされる。

カミーユの泣き声が、オジエ婦人の真つ青な表情が、ケンの何気な

い風を装つた笑顔が、今でもはっきりと、はっきりすがるくらい脳裏に残つてゐる。

いつか僕もピエールみたいに、人の役に立てる日が来るのだろうか。ウィルは暗澹とした気持で考えた。

読んでくださってありがとうございます。
感想お待ちしています。

ローレイが寝ていた部屋の隣の部屋が開く音がした。
振り向くと、肩にショールをかけたリイがいた。

まだほんのりと頬が赤いが、とても顔色が良くなっていた。

「リイ、もう大丈夫なの？」

「ええ、大丈夫よ。手厚く看病していただいたおかげでね」
リイはウィルに向かつてにっこりした。

「そんなに大それたことはしてねえよ」

アミンが笑いながら言った。

「でも、本当によかつた。あんた相当やばかつたからな。そこに座つてくれ。あんたにもお粥を出してあげるから」

アミンはローレイの隣の席を示した。

リイはふと真顔になつた。

「私たちを助けてくれてありがと『いざこま』した。この恩は一生忘れません」

これ以上にないつていうほど丁重に、リイはアミンとペーパーハーるじいに向かつてお礼を言った。ウィルは見ていて、身の引き締まる思いがした。

ピエールはやんわりと微笑んだだけだが、アミンは少し慌てた。

「あんた、大袈裟だよ。そんなに大したことはしてねえのに……」

「いえ、この野族の島に死にかけの状態で乗り込んできて、このように無事でいられるのはほとんど奇跡と言つても過言ではあります」

せん

リイは、まっすぐにアミンを見て言った。

「いえ、この島でなくても私は回復できる見込みはなかつたはずです。本当にありがとうございました。言葉では言い表せないくらい感謝しています」

アミンは照れたのか目をそわそわと動かし、口元もつながら言った。

「と…とにかくそこに座ってくれ

リイが席につくと同時にお粥が出された。

リイはスプーンを口まで持つていき一口食べた後、溜息と同時にスプーンを皿においた。

「どうしたの？食欲がないの？」

ウィルは心配して聞いた。

「ううん、そんなんじゃなくて……」

リイはそこで少し俯いた。

「私はローレイとウォルトにもお礼を言わなきゃいけないの……」

「え？」

「あんな大事な場面で、意識を失うような状態になるなんて……。足手まといとかいう次元の問題じゃないわよね。見捨てて行かれて当然だったのに」

ウィルは客船で部屋を出た直後のことと思い出した。オジエ夫人と話している時に、突然リイが急変した。船酔いといつても、あんなに急に容体が悪くなるなんてことは……。

「まあ、契約は契約だからな。お前達と俺達はあの船で取引をし、俺はその取引を守っただけのことだ」

ローレイはゆつくりと、屈託のない口調で言った。

その時ウィルは後ろから、全く意に介していない風を装つたローレイを見つめていた。

ローレイの優しさが感じられた。リイの罪悪感を和らげようとしている。

初めて客観的に見て、少しだけローレイのことが分かつたような気がした。

だが。

ふとウィルは思った。

足手まといになつたのが、僕がローズだつたら果たして同じことを言つてくれただらうか。

答えはすぐに出なかつたが、ウイルは今度ゆつくり一考する価値があると思つた。

一方リイの硬い表情は変わらなかつた。

「言い訳をするつもりじゃないけど、少し話を聞いてほしきの」

そこでリイは顔を上げ、ピエールの方を見た。

「ピエールさんにもぜひ聞いてほしいんです。さつきそこの部屋で起きた時、聞こえたんです。あなたが奴隸市に駆り出される子供達を助けていると」

「わしらは膽をもう少し小さくして話すべきだつたようじやの」

病人を起こさないよ」

ピエールは、穏やかに笑いながら言つた。

「何かこの老いぼれに話したいことがあるなら、謹んでお聞きしましょ」

リイはピエールに向かつて弱々しく微笑み、話し始めた。

オーラムステラ島の南西にある平族の集落。

忘れもしない、あれは紅葉の美しい、山の用50田のこと。

リイが8歳の誕生日を迎へ、あまり日がたつていない時だつた。

「リイ、そろそろお使いにいってくれる? 夕食の材料を買ってきてほしいんだけど」

「はい。そういうお母さん、おばあちゃんに手紙を書いてたよ? 私ついでに市場にいる蟻族の人に出してくるよ」

リイはにっこりして、大好きなお母さんに向かつて言つた。それはいつもと変わらない口。

母セリーヌが台所について、居間には3歳の妹シャウがいる。

「リイは本当に気が利くのね。お父さんに似て頭のいい証拠ね。あ

なたならきっとこの先どんなことだってできるわ」

セリーヌは優しい眼差しで娘を見つめながら言った。

居間のすみに置いてある本棚には、輝くような笑顔のお父さんの写真が置いてある。

お父さんは2年前に病氣で亡くなってしまった。

生計はお母さんが洋服を作つて、立てられている。

決して豊かな暮らしではない。

家は狭い上に、いつ崩れてもおかしくないほどだつたし、家がある土地の地主、レズィア男爵と言つて下流貴族であつたが、ここ最近借地料が値上がりしていくなかなか期限内に払えず、いつ追い出されてもいい状態だ。

それでもリイは幸せだった。

お金はなくとも、大好きなお母さんと妹たちと暮らしていた。

貧しいなんて平族に生まれたからには当たり前のことで、ここ平族の集落にはリイの家族のように貧しい人々ばかりだったから、自分を惨めには思わない。

それに数日前には、立派な誕生日会をお母さんが自分のために開いてくれた。

友達もたくさん呼び、セリーヌはお金がないのにもかかわらずおいしいケーキを作つてくれた。御馳走もすばらしかった。

8年間で一番素晴らしい誕生日会だった。

「手紙は出さなくてもいいわ。ちょっと書き忘れたことがあつたから。はい、これルクよ」

セリーヌが本棚から小さな水晶を出してきた。水晶には首から掛けるための紐がついていた。

「落とさないようにな。それから、これが買い物リスト」

リイは水晶とメモを受け取つた後、首をかしげた。

「この水晶、いつものと違うね」

「ええ、そうね。昨日本棚を掃除していたら、お父さんが昔使っていた水晶が出てきたのよ」

「へえ、そうだったの」

リイは遠い日を思い出していいるかのよう、「ほんやりとして言った。

セリー・ヌはそんなリイを思慮深げに見つめる。

セリー・ヌの目はリイと同じ明るい茶色だ。

「それはそうと、こつもよりルク多く入つてゐるね」

リイは嬉しそうに言った。

「また服がいい値段で売れたの？」

セリー・ヌはにっこりした。

「そのとおりよ。だから今日はちよつとした御馳走を作るわ。それよりリイ、落とさないよにしつかりと首にさげなさい。そして水晶は服の中に入れるのよ。最近強盗とか多いらしいから」

リイは素直に言うとおりにした。

リイが水晶を服の中に入れるのを見届けると、セリー・ヌは玄関のドアを開けた。

「それではいってらっしゃい」

「いってらあつちやあい！」

シャウもセリー・ヌの後ろから、大きな声で呼びかけた。

「うん！ 行つてきます！」

リイは元気に返事をすると、駆け出した。

市場に向かつて。

いつものように。

あの抜け道を今日も通つてこいつ！

リイは走りながら、考えた。

それは最近リイが見つけた抜け道だ。

抜け道といつても壊れた塀の穴をくぐり、今は空き家の庭を通りだ

けなのだが、普通の道を通りも数分早く市場に着くことができ
る。

リイはその抜け道を発見したこと得意に思い、何度も母セリーヌ
に自慢した。

セリーヌはいつも優しく微笑んで、辛抱強くリイの話を聞いてくれ
る。

お使いの度に通る抜け道。

後にリイは何度も抜け道を通りたことを悔やんだ。

塀をぐぐった瞬間、何者かに取り押さえられた。

「おとなしくしろ
低い男の声だつた。

口を腕で強く抑えられ、苦しかつた。

煙草と酒のにおいがした。

目がかすみ、意識を失う直前に頭にセリーヌと妹たちの顔が浮かん
だ。

「おかあ……わ……」

「それからは悪夢を見ているみたいだつたわ」

そう語つたリイの目は、どこか遠くを見ていた。

その場の者は、皆沈黙していた。

ウィルは、今リイはここにこじして安全にいると分かっていても、
先を聞くのが怖かった。

リイは続ける。

「もう分かると思うけど、私はバヤン島に来るのは2度目なの。こ
こで奴隸市場に駆り出されたわ。市場はそれはもう恐ろしかつた。
自分に値段がつけられるのよ。まるで物であるかのよ」

「申し訳ないの？」

ピエールが静かに言った。その目には悲痛な色が見られる。

「わしはその時あなたを助けなかつた」

「いえ、とんでもありません。ピエールさんを責めるためにこの話をしたんじゃないんです。ええ、もちろん違います」

リイは両手をふりながら、慌てて言った。

「それに別の子供を助けてくれたんでしょう。それで良かつたんですね。私は運良く、良い伯爵家に…か…買われたのですから」

「でも、そこを脱走してきたんじゃないのか？」

ローレイが鋭い声で聞いた。

「嫌だつたから抜け出して来たんだろう？」

「いえ、伯爵様にはお世話になりました。普通の召使みたいに扱つてもらつて。確かに抜け出してきたことは否定しませんが、それはいろいろ別にあつて……」

「いろいろ」が何なのかウイルは聞いたかつたが、リイの表情を見て聞かない方が良いと判断し、別の質問をした。

「ローズとはどこで？」

「えと…同じ伯爵家に仕えていたんです」

「といつことは、ローズも以前この島に来たことがあるといつこと？」

「それは分からぬいわ」

リイは少し思案するよつて言つた。

「ローズはあまり過去を話したがらないの。どうか聞かないであげてね」

「分かつた」

ウイルは頷いた。

リイとローズは傍目からは何も感じなかつたが、実は話すのもつらい暗い過去があるのだろう。

それに比べると、僕は随分幸せに育つたな。

ウイルは、一人小さく苦笑した。

「つらかったろうね」

ピエールがリイに向つて静かに言つた。

「話してくれてありがと」

リイは一瞬泣きそうな顔をしたが、すぐに真剣な顔つきに戻つた。
「奴隸市に駆り出されたことあるからこそ、ピエールさん、あなた
のお金や危険を顧みない行動が本当に嬉しいです。本当に」

「ありがとう」

ピエールは微笑んでいった。

「さあ、アミンのお粥を食べなさい。そしてもうひと眠りすれば、
体調もぐっとよくなるはずだから……」

ウイルとローレイは静かにお粥を食べるリイを見守つた。

実はこの時台所の4人以外にリイの話を聞いている者がいた。

その人物はドアに背中をつけて話を聞いていたが、話が終わつたこ
とが分かると、足音を忍ばせてベッドに戻つた。

リイはお粥を食べ終わると、ベッドの部屋に戻つた。

ベッドは2つ置いてあり、1つにはローズがすやすやと寝ていた。
この家は引き取つた子供を一時的に住まわせるため、ベッドが多く
ある。

2階にも部屋があり、ベッドがあるとアミンが言つていた。
ここはもともと宿屋だつたそうだ。

リイは静かにベッドに横になつた。

天井をぼんやりと見つめていたが、ふいに目から涙がこぼれてきた。
奴隸市に駆り出された思い出が、とてもなく恐ろしいせいではな
い。

値段をつけられたこと、悔しさを感じたからではない。

涙の理由は伯爵家にひきとられてから1年がたつた頃、寒い風の月のことにあつた。

リイは町の路地を歩いていた。

市場での買い物を言いつけられたからだ。

市場にはたくさんの人だかりができていた。

夕食の材料の買い出しのためだ。

雪が降る日だつた。

白い息を吐きながら、リイは頼まれた野菜が売つている店を探していた。

買い物はあの事件以来、好きではなかつた。

いつも早く終わらせることだけを考えた。

皮肉なことに一度奴隸になると、身の安全は保障される。

それでも、リイは買い物が、特に一人での買い物が嫌いだつた。

店から店へと目を走らせていると、ふいに一人の男と目が合つた。

体が凍りついた。

あの男だつた。

忘れもしない。

1年前のあの日。

人生が狂つた日。

逃げたい。

だが体が動かなかつた。

目が男に釘付けになる。

男はリイをじつと見た。

何かを思い出すように数秒顔をしかめていたが、合点したような顔になると、にやにやしながら、リイに近付いてきた。

「よお、久しぶりだな」

あの時と同じように煙草と酒の匂いがした。

全身に震えが走つた。

逃げたい。
離れたい。

「お前、今は安心して町を歩けるんじゃないか？その前にあるもののせいで」

リイは何も言わず、ただ震えていた。

男は構わず話し続けた。

「俺を恨むなよ。あれは正式な取引だったんだ」

リイは言葉の意味が分からず、一度恐怖心を停止させ、男の顔をまじまじと見つめた。

「今頃、悪くない生活をおくつてると思つぜ。お前についた値段の半分は送つたんだから。俺も良心的だみな」

「な……何の事を言つて……」

「お前の母親のことだよ。セ……セーラー……いや、セザンヌだったかな？まあなんでもいい。お前の母親は俺と取引したんだ」

世界が止まつた。

「お前は売られたんだよ。母親にな」

今まで自分をからうじて支えていたものが、音をたてて崩れしていくのをはつきりと感じた。

「かわいそうにな」

リイの責ざめた表情を楽しむように眺めながら、男は言った。

「でも、あの女も母親らしいところはあつたんじゃないか？お前が首から下げるるルクは取り上げるなつて、俺に頼んできたもんな」

嫌だ。聞きたくない！

あの後リイは必死に男の言つたことが嘘だと、信じるよつて努力しようとした。

何度も何度も嘘だと自分に言い聞かせた。

あの男はそつやつて人をどん底に陥れる最低なやつだと。

だけどそう信じ込もうとすればするほど、多くの疑念が生じた。

どうして男はあの抜け道で待ち伏せしていた？

人通りがほとんど無いところで、なぜ私が来ると知つていた？

あの男はなぜ服の内の水晶のことを知つていた？

一度も見ていないのに、なぜルクを持っていたと？

どうしてあの日、お母さんは私に手紙を頼まなかつたの？

私が市場に行けないと知つていたから？

どうしてあの日、水晶にいつもより多くのルクが入つっていたの？

わざわざ服の内に隠させて、もしかして餓別のつもりだつたの？

ねえ、どうして？

長い年月がたつた今でも、リイの心からは血が流れていた。
長い年月がたつた今でも、涙が止まらなかつた。

闇の島 5（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
お陰様でPVアクセスが10000突破しました！
こんな駄文を読んでくださって、感激です。
今後ともよろしくお願いします。

それからしばらぐの間、ウイル達はピートールの家でお世話をした。

アミンの作るおいしい「飯も手伝つて、4人は順調に体調を回復していった。

その日、ウイルは目覚めの良い朝を向かえた。体がすく軽く感じた。

今までよっぽどストレスと疲労が溜まっていたのだろう。朝御飯の手伝いをしようと思い、ベッドが立ち上がるうつした時、隣のベッドに寝ていたはずのローレイに呼び止められた。

「おこー！」

「ローレイ…起きてたの？」

「話がある。ここを出ることについてだ」

ドスンと重い物がウイルの胃に落ちてきた。

「もう…出発するの？」

「いやまだ方法を考えていなかり、今すぐというわけにはいかない」

ウイルはほつと胸を撫で下ろした。

良かつた。

「だが」

ローレイが釘を刺すように言った。

「こんなところでモタモタしているわけにはいかないだろ？？方法を見つけ次第、すぐに出る。まあ、商人達の船に乗るのが妥当だと思うが」

そこでローレイは言葉を切り、考え込んだ。

ウイルはしばらくローレイを見つめていたが、今まで一番気になつていた質問をした。

「リイとローズはどうあるの？」

「取引は終わった」

ローレイは簡潔に答えた。

予想通りの返答だった。

ウィルはがっかりした。

さらに気分が沈む。

いつからかローズとリイに仲間意識が芽生えていた。きっと絶体絶命の危機を、一緒に乗り越えてきたからだ。ここでお別れか。

「そうだね……」

ウィルは小さくつぶやいた。

「おひ、おはよひ、ウォルト」

台所に行くと、アミンがさわやかな笑顔で挨拶してきた。手にはフライパンが握られており、中ではベーコンがじゅうじゅうと音をたてて焼けていた。

「おはよひ」

ウィルもつられて笑顔で返した。

アミンの笑顔は好きだ。

いつも温かい気持ちになる。

「僕も手伝うよ。何をすればいい?」

「ありがとう。野菜を切ってくれるか?」

「分かった」

ウィルはアミンの隣に行き、野菜を切り始めた。薬作りで包丁はよく使っていたので、慣れていた。

「ピエールさんは?」

「部屋でいろいろしているよ。ああ見えて、結構やらなければならないことが多いんだ」

「凄い人だよね。本当に」

「そうだよな」

アミンはベーコンを皿に盛りながら、相槌を打つた。

「あの……アミンもピエールさんに助けられたの？その……」
「ウイルは口ひもつた。」

アミンはすぐにウイルの聞こづとしていることを悟った。

「いや、俺は違うよ。ただ拾つてもらったんだ。路上を一人さまよつているところを」

「この島で？」

「ああ」

その時テーブルを拭いていた、アミンの顔が少し曇った。

ウイルはそれを見逃さなかつた。

「じめん、余計な事を聞いた」

「いや、いいんだ」

アミンはきつぱりと言つた。

だがその後、しばらく気まずい沈黙が流れた。

ウイルの包丁の音だけがむなしく響いた。

ウイルは誰かが台所に入つてくるのを期待したが、誰も来なかつた。ローレイはまだ部屋で何やら考え方をしている。

「あのな、俺……」

唐突にアミンが口を開いた。

「俺：きっと軽蔑すると思うけど……俺：野族なんだ」

ウイルは息を呑んだ。

「汚らわしいだろ？？」

アミンは自嘲するように言つた。

「父親が野族なんだ。母親は知らねえ。結婚なんてしてなかつたみたいだし。父親は大方の野族のように、ろくでもない人だつた。俺は野族の腕輪をつけられた後、すぐに捨てられたよ」
ウイルは言葉が出なかつた。

「野族の腕輪を見たことがあるか？」

アミンの顔からはいつものさわやかな笑顔が消えていた。

ウイルは言葉なく、首を横に振つた。

「暗い緑色なんだぜ。腕輪から腐つてゐる感じがする」

アミンはそう言つと、左腕の袖をめぐり始めた。

肩に近いところで、アミンの言つたように暗緑色の腕輪が現れた。

「これは純野族の腕輪だ」

「どういう意味？」

ウイルは腕輪を恐る恐る見ながら、小さい声で聞いた。

「生まれた時から野族という者は、実は少数派なんだ。たいていは他の族の落ちこぼれが自分の腕輪を暗い緑色に染めて野族になり下がるんだ」

「ヒビが入つているね」

「ああ。外したかったからな。こんなの。憎んださ。俺はこの腕輪のせいで、この島に縛られている。他の場所に行つたって、周りの人から敬遠されるだけだろ？」

ウイルは黙つてアミンを見つめた。

「でも、この腕輪びくともしない。まあ、外すことができたとしても俺は血も腐つてゐるけどな……」

「そんな……」

ウイルは絶句した。

うまく言葉にはできなかつたが、アミンは間違つてゐると思つた。何か言つてあげたいと思つたが、無言でいるしかできなかつた。

「そんなの関係ないだろ？」

ウイルが振り返ると、いつの間にかローレイが台所に入つてきていた。

ローレイは腕組みをしたまま、壁に寄り掛かっていた。

「野族がどうとかである前に、お前はお前だ。親なんて、ましてや腕輪なんて関係ないだろ？ 大事なのはお前自身だ。お前がどうあらがだ」

ウイルが言つたかったことを、ローレイが代弁してくれたかのようだつた。

アミンは不思議そうにローレイを見つめた。

「お前はピユールじいさんと回じいとを言つだな。でも、ここの腕輪は外れないんだ……」

「腕輪なら外せるよ。ちゃんと職人に頼めば、外してもらえる。あとは好きな族に入れよ。どこの族でも、長老もしくは長の許可が下りれば入れるはずだ」

「でも野族の者を受け入れてくれる族なんて

「確かに難しいかもしだれないが、」

ローレイは遮るように言った。

「不可能ではない。後はやはりお前次第だ」

そこでアミンは口を閉じた。

顔が明るい表情になつていて。

「ありがとう」

「よかつたのう、アミン。わしの言つた意味が分かつたじゃらう？」

今度はピユール、続いてローズとリイが入ってきた。
どうやらアの向こうで盗み聞きをしていたらしく。

「たまにはいいことを言つじやない」

ローズが余裕の笑みをたたえながら言つた。

ローレイは顔をしかめると、ふいと横を向いた。

「ありがとう。話して良かつたよ。すつきりした」

アミンはいつもの笑顔で言つた。

「リイのお陰だな」

「え？」

リイが驚いたように聞いた。

「リイの昨日の話を聞いて、感動したんだ。あんたは自分の過酷な運命にも真っ向から立ち向かってきただろ？ 話を聞いて、俺は心を動かされたんだ、リイは強いよ」

リイはまじまじとアミンのくしゃりとした笑顔を見つめた。

崩れていくものもあれば、積もっていくものもあるのかもしだれない。
まだはつきりとは分からなけれど。

その狭い台所に暖かな空気が流れた。

つこでにおこしからなべー／＼の匂こも漂つていた。

「さて朝食にしようかの」

ピールは楽しそうに言った。

その言葉を合図し、一同はテーブルにつき始めた。

だがウイルはしばらくはやつと突つ立つていた。

あのアミンの腕輪に入っていた亀裂。

前にも見たことがある。

そう、エシミス島のあのなつかしい小屋で。

トムの腕輪にも同じような亀裂が入つていた。

トムはどうして…どうして士族を辞めたいと思つたのだろうか？
いつ、そんなことを？

ローズの自分を呼ぶ声に、ウイルははつと我に返つた。
そして無言で食卓についた。

読んでくださりありがとうございました。
ストーリーがなかなか遅々としてしまうかもしれません。 (泣)
展開を早くするよう、がんばります! (^-^)

ローレイは突然ピエールに切り出した。

「あの、ここを出ることについてですが……」

それは、太陽が傾き始めたころ。

アミンの腕輪の話を聞いてから、数日経つた日のことだった。皆、台所に集まり、アミンが焼いたアップルパイと共にお茶をしている時だった。

ウィルは沈んだ表情でローレイを見た。そろそろ切り出すのではな

いかと危惧していたところだった。

ピエールは途端に悲しそうな表情をした。

「もう出発せねばならんのじゃな？」

「ええ、先を急いでいるので。お世話になりっぱなしで、誠に申し訳ないのですが、適当な船を見つけ次第出発するつもりです。こいつと二人で」

ローレイはウィルをちらりと見ながら言った。

ウィルには考えすぎかもしれないが、今のセリフがピエールよりもリイとローズに向けられたように思えてならなかつた。特に最後の部分。

ローズとリイの方見ると、ローズは何か言いたそうな顔をしていたが、リイがそれを止めるようにローズの手に優しく触れた。その目がローズに語つていた。駄目だと。

ローズはリイの目を見て不服そうな顔をしたが、一瞬の間の後観念したように目を伏せた。

「どうやってこの島をでるつもりなのじゃ？」

「市場の商人の者たちの船に乗り込もうと思っています。ルクをある程度出せば乗せてくれるでしょう。ここ数日夜の市場にアミンに連れて行つてもらい、観察をしていましたが、ここまで危険を冒してやつてくる者です。金の亡者である彼らは、きっと引き受けにく

れると思います」

「そうじゃな、確かに彼らは引き受けんじゃろな。現に商人の船に乗つて出でていくものも少なくはないからな」

そこでピールはお茶を一口飲んだ。

「じゃがな、わしから提案があるんじゃが……」

「どんな提案でしょう?」

「確かにオーラムステッラ島に向かつと言つていたな?ここからおそれく船なら4日はかかるが、飛んで行つたら2日でいける。どうじや、飛ぶのは、嫌かね?」

「飛ぶ……?」

ウイルは目を丸くした。

アミン以外の他の者も驚いていた。ローレイも一瞬驚いて固まつていたが、はつとした表情になると口を開いた。

「あの……飛ぶといいますと……。どうやつて?」

「正確には乗つていくというのかの。大鷲に」

ピールは楽しそうに言つた。皆が驚いているのが、面白いらしい。

「大鷲?ですが、大鷲は蟻族のもの共しか扱えないと聞いてあります」

「蟻族に頼めばいいじゃろ」

「蟻族は飛ぶことを誇りに思つてゐる。『飛ぶ』という他の者には決して得られない自由を第一に大切にしている。確かに蟻族の者は金に目がありませんが、そんな簡単に承諾するとは思えな」

「するんだよ。承諾。ピールじいさんが頼んだならな」

アミンがじれつたそうに言つた。

「市場で助けた子供たちも、その大鷲で他の島に送つてある
「速くて安全じゃからな」

ピールが付け加えた。

「ですが、どうして……?」

ローレイはまだ納得がいかないような顔をしていた。

「頼みを聞いてくれるのは、一人の蟻族の者だけじゃ。以前そやつ

が嵐のせいで倒れているのを助けたことがあっての。その恩返しに

子供達を運んでくれるんじゃ。ちょうど3日後に会つ約束をしている。どうじや？ 安全性を考えると一番いいと思うのじやがな

ローレイはしばらくピールじいの爛々とした田を見つめていた。

その後、なぜかふと笑みをたたえ、口を開いた。

「本当にじご迷惑かけてばかりで申し訳ないのですが……

「了解どころじやな？」

「… よろしくお願ひします」

ウィルは信じられない思いで2人を見ていた。

飛び。

まさかそんな日が来るとは思わなかつた。

正直もう船はうござりだつたので、ウィルはピールの提案がすぐ嬉しかつた。

「さて、わしは今晚出かけねばならんのでな。準備をしてくるとしよ」

ピールが椅子から立ち上がりながら、言つた

「あれ、今晚だつたつけ？」

アミンが頭を搔きながら言つた。

「そうじやよ。アミン、お前さんにも来てもらつから

「分かつてゐよ、じいさん」

アミンはピールを遮つて、言つた

「ちゃんと準備しておく」

ピールは柔らかにほほ笑み、台所を後にした。

ピールが出て行つた後、ウィルはアミンに聞いた。

「どこかに行くの？」

「ああ、今晚奴隸市が開かれるらしい

氷のように重くて冷たい空気が、場に流れこんだ。

「でもな、悔しいけど、救えて一人だな……」

ウィルは田の端で、リイがカップをぎゅうっと握りしめるのを見た。

「どうやってその一人を選んでるの？」

ローズの声は、なぜかとても小さかった。

「一番年少の子を助けてる。選ぶということは本当につらいが、ピエールも言ったようにだからと言つて何もしないのはおかしいと思つたんだ」

「僕も行く

それは唐突だつた。

ウイルはカップの中のお茶を見つめながら、ぽつりと呟つた。

「え？」

アミンが聞き返す。

ウイルは顔を上げると、はつきりと言つた。

「僕も行きたい。連れて行つて！」

「駄目だ」

答えたのではアミンではなく、案の定ローレイだつた。

「自分の立場を踏まえて行つてるのか？」

ローレイの一睨みに、ウイルは一瞬たじろいだが、すぐに自分を奮い立たせた。

「でも行きたい！」の田でしつかりと見ておきたい！」

ウイルの声はだんだん大きくなつていった。

「そりや危険だらうし、見てもつらくなるだけだと思つたが、見ておきたいんだ。そうするべきな気がする。アミン、連れて行つて！」

「俺はいいけど……」

アミンはちらりとローレイを見た。

「前から思つてたけど……」

ローズが口を挟んだ。

「ローレイつてやけにウォルトには過保護じゃない？」

ローレイは表情を硬くして、完全にローズを無視した。『好きでやつてるんじゃない！』とその表情が訴えていると、ウイルは思った。

「ローレイ……」

ウイルは勇気を出して、ローレイをまっすぐに見た。仲間で、同じ年代のローレイをどうしてこうも恐れないといけないのか、という考えはこの際頭の隅に押しやつた。

「行きたい。ローレイも一緒に行けば、安心でしょ？・ローレイも一緒に来れば大丈夫でしょ？」

「安心じゃない」

ウイルのローレイを持ち上げる作戦は瞬時にガタガタと崩れた。

「密船脱出の時によく分かつた。お前は、ヘマをすることにかけては、人を抜きんでている」

「な……」

これにはさすがにウイルも顔色変えたが、爆発ギリギリのところでブレークをかけた。

自分自身に冷静になれと、言い聞かせる。

これはきっと大事なことだ。

そう直感が告げている。

それに……。

自分の感情をおさえ、一言一言噛み締めるように言った。

「見ておきたいんだ。見ておかないといけない気がする。そこに何がある気がする。そこに…僕がこれから…これから進むのに…」

ローレイもまっすぐにウイルを見た。

しばらくの間二人はお互いの目を見つめ合っていた。先に目をそらしたのは、ローレイの方だった。

「……ヘマをするなよ」

「え？」

ローレイはそのまま無言で立ち去った。

「あら、珍しくあなたが勝つたわね」

ローズがのんびりと言つた。

『珍しく』ではなく初勝利だ。

ウイルは、ローレイが姿を消したドアを振り返つた。

気のせいかもしれないが、ローレイの先程の挑発は、わざとしてい

るよつに思えた。まるで、ウイルがどう出るのかを見ているかのようだ。そしてウイルは感情を抑え、ローレイの合格基準を満たした。だからローレイはウイルの申し出を聞き入れた。なんとなくそんな気がした。

実際ウイルの感じたことはまんざらでもなかった。
部屋をローレイが立ち去る時、満足げに緩んだ口元をリイは叩いていた。

認められし者 1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

この章から木箱やペガサス、王家の秘密について迫ります。

「お酒のにおいがす」「……」

UILは歩きながら、顔をしかめた。

UIL、ローレイ、アミン、ピエールは真夜中に開かれる奴隸市へ向かっていた。ローズとリイは腕輪の色のため、この島をふらつくと非常に危険なので家に残ることになった。もつとも一人は「行きたい」とは、決して言わなかつた。

あたりには酒場や胡散臭い店が所狭しと立ち並んでいる。

人通りも多く、4人ははぐれることのないよう細心の注意を払つていた。

「あいつらは毎晩毎晩大量の酒を飲んでいるからな……」

UILの前を歩いていた、アミンが答えた。

「そして酔いつぶれて、昼すぎまで寝ているんだ」

普通の町だったら、UILはキヨロキヨロとあたりを見回しながら進むところだが、今度ばかりは肩を縮ませて、前だけを見て歩いた。それくらい、危険な町だった。町を歩いている人のほとんどが、健全ではなかつた。あの客船に乗つていた大男一人のようなやつらが、ここにはうようよいのだと思うとUILは吐き気とめまいを感じた。すぐに「行く」と言い出したことを後悔し、弱音をほとんど吐きそうになつたが、なんとかこらえた。

見ておかなければならぬ。

どうしてそう思うのか、UIL本人にも分からなかつた。

ほとんど直觀だ。全く根拠がない。

だがその直感が、UILの忍耐をかるつじて持ち堪えさせていた。

「そここの坊や」

もくもくと前を進むウイルに話しかけてきたのは、露出度の高い服をみにまとつた女だつた。酒の臭いがきつかった。

「どこに行くの？ねえ坊や、私と一緒に少しお話をしましょ。お姉さんが、かわいがつてあげる。あなたのそのかわいい顔、私は好きよ」

けばけばしい顔、だらりと垂れた金髪の髪、酒の臭い、話しか方。どれを取つてもウイルに激しい嫌悪感を抱かせるものだつた。こんな女もいるとは、ウイルはついぞ知らなかつた。ウイルは無視を決め込んだが、女はしつこくついてきた。ウイルの歩調に合わせ、横を歩いてくる。店の薄暗い明りに、左腕にある暗緑の腕輪がぼんやりと照らされていた。

「ちよつと、冷たくしないで。お姉さん、傷ついたやう」

女は最後まで言い切ることができなかつた。突然声もなくバタリと倒れた。

ウイルは驚いて、倒れた女を見つめた。通行人でその女を気にする者は、ウイル以外誰もいない。

「早く行け」

後ろを歩いていたローレイが、どすの利いた声で言つた。

「でも、なんで突ぜ？」

ウイルはそこで口をつぐんだ。ローレイがちょうど一本の剣を腰に下げているところだつた。どうやら靴におさめたまま、後ろから剣で殴つたらしい。

ウイルは無言で前に向きなおり、再び歩き始めた。

虫唾が走るくらい嫌な女だつたが、それでも女だ。少しだけ氣の毒に思えた。

「着いたぞ」

アミンが振り返つて、言つた。

誰とも目が合わないよつて、下を向いて歩いていたウイルは顔を上げた。

そこは町の広場のようなところだつた。

「ここ？」

ウィルは訝しげな顔をしながら、あたりを見回した。

人ごみが今まで通つてきた中で一番ひどかつた。ここにいる人々は動かず止まつてゐるので、通りから人が流れ込むにつれ、混雑はますますひどくなつてゐるようだつた。

市場という割には、そこにはほとんど何もなかつた。

大勢の人以外に目に入るものと言えば、古い木のステージと白い大きなテントだけだ。

キヨロキヨロしているウィルの肩を掴みながら、アミンは言った。

「俺は白いテントの前に張つてある、リストを見てくる。今日売り出される人々の性別や年齢が乗つてゐるんだ。ローレイとウォルトはピエールじいさんからはぐれないうるようにしてくれよ」

「了解」

ウィルはなおも辺りを見回しながら、上の空で答えた。アミンは少し困った顔をしたが、ウィルの背後にいたローレイの「大丈夫だ」という目配せを受けた後、にかつと笑いテントの方へ走つて行つた。

「そんなに珍しいかね」

ピエールがゆつたりとした、口調で聞いた。

混雑の中でも、不思議とピエールの言葉は静かに聞こえた。

「い……いえ……」

ウィルは見回すのをやめ、少し俯いた。

場にそぐわない浮薄な態度を非難されたようで、なんとなく恥ずかしかつた。

「予算は1000ルク……」

「え？」

ウィルは顔を上げた。

「1000ルクを上回つたら、助けることができん」

「だいたい、いつもはどれくらいなんですか？」

「毎回違うが、平均して700ルクというところかの……。年少の

子はやや安い値がつくもんじゃ」

「安い……」

ピエールは、口を閉ざしたウィルが何を考えているか察したように言った。

「人は、お金で買えるものではないのじゃがの。甚だ承知いたしかねることじやが、これ以外適当な救出法がなくてな」

「じいさん！」

人ごみに揉まれながらも、テントの方からアミンが戻ってきた。

「今日は6歳の男の子が最年少みたいだぜ」

「そうか。ありがとう、アミン」

ウィルはふと疑問に思つたことを口にした。

「周りの人達つて、多くが野族の人っぽいけど、奴隸が買えるほどお金を持つているの？」

「いや」

アミンが答えた。

「こいつらは、貴族や他の族の金持のやつらに雇われてここに来ている。やつらは代理で奴隸を買つた後、依頼者のもとに送り届けるんだ」

アミンが言い終わると同時に、ステージの方から大音量の声が聞こえてきた。

「レディース＆ジェントルマン！！」

見ると、ステージに場にそぐわない白い背広を着込んだ男が立つていた。わざわざセットしたのか、髪が優雅にカールしている。

ステージの男の呼びかけに、周りの人々が「ウオー」と歓声を上げたが、その歓声を上げたどの人も恐ろしいほど「レディース＆ジェントルマン」からかけ離れていた。

「毎度ありがとうございます！ 今日もたくさん出品される予定です。盛り上がりがとうございます！」

男の呼びかけに応え、広場の人々がまたもや一斉に大声を上げる。身震いしたくなるような人々の熱気が感じられた。

「それでは一人目！」

ステージの男がステージの脇へ移動し、テントの方を手で示した。テントの中から一人の団体のでかい男がやせ細った少年の腕を乱暴に引っ張りながら出てきた。少年は抵抗することなく、男に引っ張られるままステージに上った。

目がうつろだつた。

近くで少年を品定めする声が聞こえてきた。

「見るからにひ弱だな」

「そうだな。きっとすぐに使い物にならなくなる」

ウィルは目の前の光景に呆然とした。

アミンが耳元で囁いた。

「あの少年がつけている、金属の太い首輪が見えるか？銀色のやつ」

「ウィルは唾をぐくりと飲みながら頷いた。

「あれは奴隸の証なんだ。あの首輪を外すには鍵が必要で、その鍵は奴隸を買った者、つまり主人に渡される」

ステージの男が叫んだ。

「14歳、男。それでは行きましょう！」

「200ルク！」

ウィル達の近くにいた男の声で、競りが始つた。

「300！」

「450！」

非常に速いテンポで値は上がつていつた。

ウィルは次第に競りの声が聞こえなくなるのを感じた。信じられなかつた。

こんなに恐ろしいことが、ここでは当たり前のように行われている。異を唱える者はどこにもいない。

少年の生氣のない顔をウィルは直視することができなかつた。

「1350！」

甲高い叫び声と共に、少年の競りが終わつた。

少年は男にまたもや引っ張られながら、ステージを降りテントに戻

つた。

2人目は10歳の少女。

3人目は18歳の少女。

そして、4人目。

5人目。

競りは滞ることなく、順調に進んでいった。

銀色の首輪をはめた者達の顔は、どれも深い絶望に満ちていた。10歳前後などの幼い子供達の中には、競りの間泣き叫ぶ子もいた。8歳の男の子は泣き叫びながら、自分を抑えている男の腕の中で激しくもがいていたが、一発激しく男に殴られると意識を失ったのかピタリと静かになった。

ウイルは目が熱くなるのを感じた。

やめる。

やめてくれ。

叫びだしたかつた。

おかしい。

同じ人なのに。

間違っている。

やめてくれ！

ウイルの心の叫びも虚しく、次々と人に値が付けられていった。
そして、14人目。

ウイルは棍棒で殴られたような気がした。背後でローレイが身じろぎをするのを感じた。

テントから現れた人。

それはオジエ夫人だつた。

すっかり変わり果てた形をしている。
体はやつれ、髪は乱れていた。絶望に打ちひしがれた表情をしている。

「34歳、女性！芸族出身！」

ステージ男の声を合図に、また競りが始まる。オジエ夫人はぼんやりと、どこか空間を見つめていた。ウィルの頭の中で子供の泣き声が反芻する。

カミーユ。

カミーユはどうしたのだろう？

まだ幼かつたから、奴隸にはできないはずだ。

「アミン」

ウィルはかすれ声で聞いた。

「働けないくらい幼い子は…野族に捕えられたとして…親子で捕らえられたとして、どうなるのかな？」

「まず親子が引き離されるのは確実だな」

アミンはあっさりと答えた。

「んで、子供は、生きていられたら、それはすくなくラッキーということだ」

とどめとも言える衝撃に、ウィルは頭がくらくらした。

カミーユ。

あの時、僕はカミーユを見捨てた。

そして自分だけ助かつた。

なぜカミーユは捕えられ、自分は捕まらなかつたのか。

カミーユを見捨ててまで逃げる価値が、自分にはあるのだろうか？

ウィルはもはや何も聞こえなかつた。何も見えなかつた。

小さな男の子がステージに出てきたのも、ピエールが「750ルク！」と叫んだのも気づかなかつた。

ただその時、息をするのがとても苦しかつた。

胸が張り裂けそうだつた。

大声で叫びだしたかつた。

なのに、自分にはどうすることもできない。

ウィルは爪が食い込むほど、両手の拳を握り締めた。

絶望的な無力感が次第に怒りへと変わり始める。
ウィルは心の底で沸々と湧き上がるものを感じた。

自分への怒り。世界への怒り。

怒りで震える全身を、ウィルは抑えることができなかつた。

読んでくださいありがとうございました! ついでに

はつと氣付くと、ウイルはピエールの家の前に戻っていた。
いろいろと頭の中が混乱していたため、市場の終わりや帰り道など
何も目に入らなかつた。

「あれ、アミンは？」

ウイルはあたりを見回しながら言つた。

「何、寝ぼけているんだ？」

ローレイはピエールに続けて家に入りながら、呆れたように言つた。
「さつきの6歳の子供を引き取る手続きをするため、まだ残るつて
言つてただろ」「うっ。」

「せうだっけ？」

「お前が顔色が悪かつたから、先に帰るよう促してくれたんだ」

「……」

「おかえりなわー」

台所でリイとローズが出迎えた。

「ウォルト、顔色が悪いけど大丈夫？」

リイが心配そうに聞いた。

「え……あ……うん」

ローズは無言でウイルをじつと見つめていた。

「私お茶を入れますね、ピエールさん」

リイはにっこりとして言つと、お茶の支度にかかつた。

「これは、嬉しいの。ああ、せうじや、ウォルトとローレイ」

「何ですか？」

ローレイが答えた。

「非常に言いにくい」となんだが、蟻族の者にお金を払わないといけないんじやが

「あ、僕持つてきます」

ウイルはそう言つと、急いでリュックを取りに台所を出た。

自分たちが泊まらせてもらっている部屋に入ると、ウイルは溜息をついた。

湧き上がった激しい憤りに、ウイルはどう対処すればいいのか分からなかつた。

無力感、怒り、困惑。

さまざま感情が混じり合ひ、ウイルを混乱させていた。

自分はどうすればいいのか？

それが差しあたつての大きな問題だつた。

「ウォルト、自分を責めちゃ駄目よ」

ずっとと考えに耽つていたウイルは、我に返つてリイを見た。アミンを除く5人は、台所でゆつたりとお茶をしていた。

「え？」

「あなた、自分を責めてるんじゃないかと思つて」

「……」

「さつきローレイから聞いたんだけど、船で会つた親子の母親が市場に出されていたらしいわね。でも、それは決してあなたの責任じゃないわ」

リイは的確にウイルの考えていることを当てていた。

「ウォルトが野族に捕まつたところで、状況は少しも変つてなかつたわよ」

ウイルはやや俯いた。全くもつてその通りだと思つた。

「そうよ」

ローズが横から身を乗り出しながら言つた。

「気にしすぎるのは、よくないわ。つらくとも、忘れることも大事よ」

「……」

分かつてゐる。

ウィルは思った。

分かつてゐるんだ。

あの時自分にはどうしようもなかつたつて。

選択肢はなかつた、助けることはできなかつたつて。

でも、悔しい。

悔しくて、悔しくて、それなのに何もできない自分が腹立たしい。

何かできるようになりたい。

ピエールさんのように、人を助けられるようになりたい。

いつか、いや早くそなりたい！

突然、ポツリとローズが言った。

「光つてゐる……」

「え？」

ウィルはローズの視線の先を辿つた。

そこには、さつき部屋から持つてきた、ウィルのリュックがあつた。ローズの言うとおり、光つていて。いや、正確にはリュックの口から光が漏れていた。しかもただの光ではない。それは紫、紅紫色の強い光だつた。

ウィルはおそるおそるリュックに近づいた。その場にいた者達の、強い視線を感じた。

ウィルはゆっくりと光溢れる、リュックの口をのぞきこんだ。予想通りだつた。あのトムからもらつた木箱が、光つている。ウィルは震える手で木箱を掴み、取り出した。

薄暗い部屋の中で、その光は美しく輝いた。ウィルは我を忘れて、その木箱の光を見つめた。その他の者たちもみな見とれているようだつた。一人を除いては。

「ウォルト、どうして王家の木箱を？なぜ……？もしや、おぬしは

……」

ピエールはそこまで言つと、口をつぐんだ。その声に、いつもの穏やかさはなかつた。

ウィルは、ゆっくりとピエールを振り返つた。

ピエールは食い入るように、ウィルの顔を見つめた。

「わしとしたことが、どうして今まで気付かなかつたのか。似ているではないか。そつくりだ。……エレン殿に」

ピエールは大きく息を吸つて言つた。

「先帝…ラゼル王の息子。……ルーテン国賢族カシュー家の末裔ウイル・カシュー」

ウイル・カシュー。

自分の名前なのに変な感じがした。

久しくこの名前を、呼ばれていなかつた。

「なんですつて！？」

ローズは驚愕した表情で、叫んだ。その横にいたリイは、顔色を変えていた。

「あなた…ウォルト・キヤラハンとやらは偽名」

「そんなことは、今はどうでもいい。ウィル、その木箱を開けるのじゃ」

ウィルには、何がなんだか分からなかつた。ピエールが、木箱が、自分の正体が。

ウィルは救いを求めて、ローレイを見た。だが失望に終わる。ローレイも全くこの状況を理解できぬでいるらしかつた。

「とにかく開けるのじゃ」

ピエールは繰り返した。

どうでもいいや。分からない。

ウィルはやけくそになり、その木箱を開けた。

開けるやいなや木箱の中から、4つの小さな丸い光が勢いよく飛び出でてきた。

ウィルは驚いて、木箱をほとんど落としかけた。

やはり紅紫色に光つてゐる。光は螢のように木箱の周りを円になつ

て、飛び始めた。

ウイルは木箱の中を見て、あることに気づいた。

「あ…中に…」

空だつたはずの木箱の中には、一枚の紙が入つていた。その紙は折りたたまれて入つていたが、ボロボロで一目でかなり古いものだと分かつた。

「もともと入れていた紙か？」

傍に来たローレイが聞いた。

ウイルは激しく首を横に振つた。

ローレイはゆつくりと手を伸ばすと、紙をとつた。

その瞬間、くるくる木箱の周りを回つていた光が、一気に散らばつた。

その光の一つは真っすぐに、ウイルの方へとやつてきた。

後ずさりする間もなく、光はウイルの心臓があるあたりにぶつかり、まるでウイルの体内に吸収されていくように消えた。

同時にリイ、ローズの悲鳴が部屋に響き渡る。リイやローズ、また

驚いた横顔を見るにローレイにも同じ現象が起きたらしかった。

ウイルは息を飲んだ。

「一体……」

「怯えることはない」

ピエールは落ち着きを払つていった。

「全では紙に書いてある」

「何で書いてある……？」

ウイルはローレイに小声で聞いた。

ローレイはゆつくりと紙を開き、読み始めた。

汝らをルクパーティ・エカルイアの名において、認めん。

認められしものは、王の試練を課される者。

その者はその証として、ラージャの恩恵を得ん。

試練を課すものは世界の民。

王の選定者はラージャ。

認められざる者に口外することなかれ。

さもなくば、死が汝を待つのみ。

「ということじや」

ローレイが読み終わると、ピエールがいつも穏やかな顔で満足げに言った。

この場でたった一人、状況を理解しているらしい。

後の4人はただただ呆然とするだけだった。

「質問をする」という打開策に最初に行き着いたのは、ウィルだった。理解できない、訳が分からぬといつた状況に対し、4人の中で一番免疫がある。

「ピエールさん、何が何だかさっぱりなんですけど……」

「ウィル・カシュー。それはおぬしらが理解せねばならぬことじやよ。わしに聞いてはならぬ。おぬしは認められし者。つまりわしが話したところで、わしは死ぬことはない。だが知る者から答えを得た者は、王にはなれぬ。トム殿から聞いてはおらぬのか？」

「き……聞きました」

ウィルはがっかりして答えた。

「ただ少しだけこの木箱について、ヒントをあげよう。王宮の者達の常識程度なら、ラージャも許してくれるだろ？」

ピエールはそこで椅子に腰をかけた。テーブルの上で手を組み合わせ、そして口を開いた。

「この木箱は王家の秘宝の一つ。初代王ルクパティ・エカルイアの宝じや。王位につく者は皆一つラージャの恩恵を受けた宝を作る。ルクパティの宝が、それなんじや」

「ラージャって誰なんですか？紙にも書いてありましたが……」

「ラージヤはペガサスのことじやよ。その木箱は秘宝の中でも、もつとも強いラージヤの力が宿つておる」

「ちょっと待つて！」

ローズが口を挟んだ。

「ラージヤ……つまりこの国の守護神ペガサスは実在するっていうの？」

「いかにも」

ピエールは頷いた。ローズもリイも信じられないというような顔をした。

「ラージヤと王家のつながりは古来から続くもの。それはルクバティとラージヤの契約により長い間続いている。木箱は王の選定にも使われるが、それ以外のことでも大きな役割を果たしている。木箱は本当に素晴らしい秘宝じや。その力は計り知れぬ。おぬしら4人が巡り合つたのも、わしと出合つたのも、もしかしたらその木箱の力によるものかもしだれぬ」

質問すれば訳の分からぬこの状況も、少しは收拾がつくだろうと思つたが、ウイルはピエールのヒントを聞いて、ますます混乱していった。

「それにしても」

ピエールは嬉しそうにウイルを見た。

「エレン殿にそつくりじやの、ウイル。無事に生きていて良かつた。未来に少し希望が見えてきた。長生きも悪くないかもしだれんな」

「ピエールさん、あなたは一体……？」

「わしは……」

そこで少しピエールの表情が曇つた。

「今は言わないでおこう。もし次に会つことがあるなら、その時に教えよう。その時は既にわしが誰なのが知られているかもしだれないがな」

ピエールは数秒ウイルを見つめた後、立ち上がつた。

「さてわしは口をつかり滑らせてしまわないよう、退室すること

にする。おぬしらも時間が必要じやろ。ゆっくりじっくり考えるが良い。答えはきっと見えてくる。その木箱を王たるもの導くために作られた。ウィル・カシュー。おぬしが本当に王の素質があるのならば、必ずや試練は達成されよ。」
ピエールはそこまで言つと、その場を後にした。
後には「認められし者」4人が残つた。
途方に暮れた状態で。

まず試練に乗り出すことができるかどうか、それすらも分からぬ状況だった。

認められし者 3（後書き）

読んでくださってありがとうございます！！！
感想＆評価、お待ちしています

た。 ウィル、ローレイ、リイ、ローズは、ウィルとローレイの部屋にい

どこかで見たことがある光景だった。

一方のベッドにウイルが座り、向い側のベッドにリヤとロースが座る。

部屋には重箱が、沈黙が続いた。

動した。

たが、そこでまた行き詰る。

長く長く続いた沈黙の後、最初に静寂を破ったのはリイだった。

「ウォル…え…えつと…」

リヤは思い切って口を開いたものの、すぐにはほんていて原因を察した。ウイルは荒てて言った。

「ウイル…ウイルでいいよ！」

リイが沈黙を破ってくれたのが、とても嬉しかった。

一人でこのまま悶々と考えていたら、気が変になりそうだつた。

「それでは、まちがいないのね。あなたは……」

「名前はウイル・カシュー。それは、まちがいないよ。15年間そ

の名前を呼ばれて育つたんだ。ただ、僕には自分が何物かはつきりとは分からぬ。というか、自覚がないんだ。僕だって、つい最近知ったことだから

「いや、こつが王家の者であることは、100%まちがいない。残念なことにな」

ウイルには反撃する気力が残されてなかつた。それにローレイの最後の言葉は、自分でももつともな意見だと思つてしまつた。

「そんなことないわよ」

リイが優しくフォローした。

「あなたが王様だったら、きっと素敵な国になるとと思う。あなたみたいに優しい人がなつてくれたら……」

「…………ありがとう」

ウイルは素直にお礼を言った。たとえ嘘だとしても、気を使ってくれ

「なんばくかう」

ローズがキツとウイルを睨みつけた。

「どうきの底一書ハル一うつニ

「これない？」

ウイ川は言われた通り 木箱からまた紙を取り出し 読んだ

つのサ

「つまり、誰かに話したら……」

死ぬんだわ

卷之三

ローズはベッドを立ち上がり、ウィルに詰めよつた。

卷之三

あなた、責任どんなさいよ！こんな物騒な捉、あなたのせいでしょ！？」

- そんなん

「それは」ちらのセリフだな

腕組みをしてローズを見ていたローレイが、しつかり聞こえるよつ

「何がこっちのセリフだな、なのよ！？」

ローズが予想通り、食つてかかつた。しかも、ローレイの口真似付きで。

「迷惑しているのはこっちだろ！お前たちを助けたせいで、この木箱は何を血迷ったのか、お前たちを「認め」た。お陰で、俺達はこれからも、お前たちに縛られることになった。本当に厄介だ！いい迷惑だ！」

「その迷惑だつたら、私達もでしょ！？」

ローズはすごい剣幕だつた。ウイルは直視するに堪えなかつた。

「あんた達がこんなめんどうな奴らだと分かつていたら、密船でもきつと別の人間に頼んでたわ！」

「助けてもらつた身分でよく言つよな。砂浜で死にかけてたくせに。ほつといてくれば良かつたんだ」

「何ですつて！？もう一度言つて」

「ストップ、ストップ！」

ついにリイの制裁が入り、ウイルはほつと胸を撫で下ろした。リイはローズとローレイの間に入つて、言つた。

「もつと有効な時間の使い方をしましょう。前に進むために考えるのよ。後悔とか馬鹿なケンカとか何ももたらさないわよ」

ローズとローレイは、はつとしたような顔になると肩を落とした。だが、まだ睨み合つている。

険悪なムードを何とかしようど、ウイルも頑張つた。二人とも考え込むような、難題繰り出してみる。

「あの光は何だつたと思う？」

「ラージャの恩恵とかいうやつだと思うわ」

「……」

リイが即答してしまつた。ただ、リイはその後に付け足した。

「それが、どういうものかは分からないわ。でも、あの光が紙に書いてあつた恩恵だということは、まちがいないと思うんだけど」

ローズはローレイを睨むのをあつさつとやめ、質問した。

「どうして？」

「あの光は紅紫色だつた。紅紫色はペガサスの象徴よ

ローレイも睨むのをやめた。

「象徴……。ペガサスとかに詳しいのか?」

「全然」

リイは慌ててローレイに向つて手を振つた。

「でもね、王宮の歴史とか王家の秘宝とかペガサスに関する本が好きだったの。王立図書館で関係する本を読み漁つたわ。もちろん、核心に触れた本は皆無だつた。でも事実かどうかは分からぬ伝説は、好きだつたから結構知つてゐつもりよ」

「王立図書館?」

ローレイが不審そうに眉をつりあげた。

「あそこにはある程度身分の高い者じゃないと、入れないと聞いたが……」

「あ……仕えていた伯爵家の方が、いつも連れて行つてくれたの」「伯爵家にしては割と親切じゃないか……。それでも抜け出していくなんて、相当嫌なことがあつたのか?」

「いろいろあつたのよ!」

答えたのはローズだつた。少し顔が赤かつた。

「あんたはきっと知る必要があると考へるでしうけど、大事なのはこれからでしょ。誰だつて触れられたくない過去は持つてゐわ!」ローレイはややこきり立つてゐるローズを怪しげに見たが、何も言わなかつた。

「聞きたいことがあるんだけど……」

ウイルが割つて入つた。

「あのエシミス島発の客船、オーラムスツテラ島行つたでしょう? どうして逃げてきたのに、またもとの島に戻ろうと?」

「あの時、王国の軍隊が来てたのよ」

答えたのは、またローズだつた。

「それがどうかしたの?」

「私達を捕まえに来たかと思つたわ。それで、慌ててあの船に乗つ

たの

「まさか。たかが奴隸2人のために王国の軍隊が、動くと思ったのか？」

ローレイが信じられないという顔をして、言った。

ローズはまたもや反発をした。

「そうよ、悪い？あんたは奴隸の世界を知らないのよ。私達は運がよくてできたけど、普通だつたら逃げられる可能性はかなり低いわ」「そうなの？」

ウィルが聞いた。

「その通りよ」

リイが頷いて言った。

「銀色の首輪。あれを付けている限り、私達は主人なしで外泊ができないの。夜にさまよつてたら、周りの人に通報される。そして通報した人は、お金がもらえる」

そこでリイは一度口を閉じ、まっすぐにウィルを見つめた。

「ウォル…じゃなくてウィル、奴隸制度は貴族と野族の間だけで成り立つていると思つたら大間違い。脇でその制度を受容している人が多くいる。それが制度を確固たるものにしているわ」

「つまりこの国全体が、問題ということだね？」

「ご名答。未来の王様」

リイは、につこり微笑んだ。リイは少しじこまかしたが、笑顔の裏の真摯な望みをウィルは見逃さなかつた。

「それで、この島を出てどこに向かうの？」

ローズが腕組みをしながら、聞いた。

答えたのはローレイだつた。

「オーラムステッラ島。華族の村に行く。こいつの母親の妹がいるんだ」

「エレン様は華族出身だつたわね。華族の中でも際立つ、絶世の美女だつたらしいわ」

「それにも」

リイが考え込みながら言った。

「華族に行くなんて、これは導かれてるのか、偶然なのか……」

「どういうことだ？」

ローレイが聞いた。

「よく分からんんだけど、裏で王家と強い結びつきがあるみたいなの。オーラムステッラ島と行つても、北西の山の向こうの田舎に華族はいるのに、王家は代々華族とのつながりを大事にしているわ。まあ、行つて調べるしかないわね」

ウイルはリイを感嘆の眼差しで見た。

リイは「認められし者」で当然だと思った。すく心強いふと気付いた。

肩の荷が前より軽くなっている。

最初は王になるなんて絶対にあり得ないとつてたけど、今はほんの少し、ほんのほんの少しだけ道が開いた気がする。

認められし者 4（後書き）

読んでくださってありがとうございました！
次回オーラムステッラ島へ！

「ウィルは、言うべき時が来たと確信した。

「僕は君に会つてから、体のあちこちが傷つけられている」
出発で忙しい朝。そんな場合ではないと分かっていても、今回はもう我慢ならない。

「君は人を一体何だと思っているの？僕は君のクッショunjじゃないんだ！」

「あつや。とにかく、そこをどいて。邪魔よ。通行の邪魔」
ローズは全く臆さなかつた。むしろ、強烈な睨みを効かせてくる。

ウィルは負けじと、目のあたりにぐつと力をこめた。

「だいたいあんたがぼおつと、いつもいつも突つ立つてたからそつなるんでしょう？」

「違う。君がいつも僕を激突の楯にするんだ。今日だつて椅子に足を取られたあと、壁ではなく真つすぐに僕の所に倒れてきたじゃないか。おかしいよ。角度がおかしい」

「ああ、もう！ ツベコべうるさいわね。そこどいて。荷造りがまだ終わつてないんだから」

ローズは、手に持つているリュックを激しく振つた。

「倒れる方向を決められるなんて、君つて本当にすごいよ。技術も根性も。見てよ。おかげであちこちに痣ができるんだ」

ウィルはいくつかの痣を見せようと、体を捻つた。

だが当のローズはリュックを掴んでない手を腰に当て、顔は別の方に背けていた。全く見ていない。

ウィルが一生懸命ローズの前で体をくねらせてはいる時、ローレイとリイが近くを通つたが、

ローレイはあからさまに怪訝な顔をし、リイは困惑した顔をしたが、かかわらない方がいいと判断したらしく一人ともそのまま過ぎて行つた。

「 そこの馬鹿。 じきなさいよ 」

ローズが低い声で唸つた。

ウィルはようやく体捻りをやめると、溜息をついた。

「 君もリイみたいな性格だつたら良かつたのオヴァツ ! 」

言い切る前に、ローズのリュック顔面に凄い勢いで飛んできた。あまりの痛さに、ウィルは両手で顔を押えて座り込んだ。

そこにはもう、ローズはない。

今までで一番痛いと、ウィルは涙をにじませながら思つた。

「 おう、終わつたか ? 」

にこにこしながら、アミンがウィルのもとにやつてきた。

「 笑い事じやないよ 」

ウィルは手で鼻をさすりながら、抗議した。

「 ものすごく痛い。 鼻が折れているかもしねない 」

「 う~んと 」

アミンはそう言つと、ウィルの顔を覗き込んだ。

「 大丈夫だ、ウォルト。 正常に鼻は前を向いてるよ 」

「 そう? よかつた 」

アミンは木箱関連のことを、全く知らない。そのためローズ達はまだウィルのことをまだウォルトと呼んでいた。ウィルは姓を名乗らなければ、関係のない人でも大丈夫ではないかという申し立てを他の3人にしてみたが、ローズの言葉で即却下された。

あなたの年代またはそれより下の年代で『 ウィル 』と名乗る人は少ないわ。 だつて不吉じやない。 悲劇の王子の名前なんて。 あなたは毒殺されたという噂も結構ひろまつてゐるよ。 私だったら絶対にそんな名前、子供につけないわね。

ウィルはようやく立ち上がると、聞いた。

「 ヴィタリーは? 」

「 まだ寝てるよ。 体がまだ完全に回復していないから、起こさない 」

でおこりうと思つんだ」

ヴィタリーとは、この前の奴隸市で助けられた男の子のことだ。ここに来た日は強いショックのせいか、衰弱しきつっていたが、手厚い看病のおかげで順調に回復してきていた。

「きつとあいつ悲しむだろうな。リイが行つちまうか」「うだね」

ヴィタリーはこの数日で、かなりリイに懐いていた。リイは必死でヴィタリーの看病をしており、寝かしつける時には美しい子守唄まで歌つていた。

「元気にやつていけよ」

アミンがウィルの背中をたたきながら言つた。

「あーあ。お前たちがいなくなると寂しくなるな。当初は2人出発の予定だつたのに、一気に4人になつてしまつたからな」アミンはくしゃつと笑うと、鼻歌を歌いながら台所に向かつた。ウィルは複雑な思いで、その背中を見つめた。

「船も海もこりこりよ」

ローズが、海に背を向けながら言つた。

昼過ぎ、ウィル、ローレイ、リイ、ローズ、そしてピエールは海岸に立つっていた。

この島は、昼は夜と打つて変わつてとても静かだ。

波が打ち寄せる音だけが聞こえる。

アミンはヴィタリーのために残ると言つて、一行は再開を約束してピエールの家で別れた。

ピエールが空を見渡しながら言つた。

「もうそろそろ来るころじや」

ローレイが突然ウィルを振り返る。

「へマをして落ちるんじやないぞ」

「お、落ちないよ」

「ビバだか」

ローレイはにやりと笑つた。

「IJの前船の上で、大鷲に驚いて尻もちをついたのはビビの誰だ？」

「ウィルの顔は真っ赤になる。

「な……」

「あー来たわ」

横を見ると、リイが空の一点を指せしていた。

その先には小さな影が3つある。

ローレイの意識もそちらに向かはれる。ウィルはちらりとローレイを見た。

気のせいだらうか。

久しぶりに、ローレイの顔に余裕が戻っているように見える。ここ数日、何となくローレイの元気がないことをウィルは感じ取っていた。

もしかしたら、ただの思い過ごしかもしれないが……。

「ウィル殿」

気づくと、そばにピエールが来ていた。

「また会えることを願つていて」

「僕もです。ピエールさん。ありがとうございます」

「聞くのを忘れておつたが、トムは元気かね？」

「あ……少し体調を崩してしましが、大丈夫だと思います。今頃士

族の村でゆっくりと休養をとっているはずです」

ウィルは話しながら、心がしくしくと痛むのを感じた。

「そうか。それは良かつた。ところでそのルクパティの木箱、それは時と場所を選ぶと言われてある」

「時と場所を選ぶ……？」

「そうじゃ。とにかく強大な力を持つておるとこうじじゃ。その木箱に力を引き出させるには、王の素質が無ければならん」

「素質……」

「一方でもう一つ必要なものがある」

「それは何ですか？」

「それはウィル殿、お主が見つけなければならぬ。今の世界を見ることじゃ。田をそらさずに、できる限り見ておくのじゃ。そうすれば、きっとお主なら見つけられるとわしは思う」

「バサッ」という音がして、三羽の大きな鷲がウィルたちの田の前に降り立つた。

もちろんウィルは、こんなに近くで大鷲を見たのは初めてだ。相手を見る大きな目は鋭く、その爪は人の命を一裂きで奪えそうである。

一番ウィル達に近い所に降り立った大鷲の背中から、一人の蟻族の者が降りて来た。（背が低いために、正面からは見えなかつた。）降りてきた蟻族の者は、ピエールと同じくらいの年齢で、白髪と白鬚がボウボウに生えている。ウィルはフランクじいを思い出した。フランクじいも背の高い方ではなかつたが、この田の前の蟻族の者はさらに慎重を縮めた感じだ。

「こんにちは、ピエール」

甲高い声だ。

「変わらず元気そうじゃな、レラ。ルクは受け取つたかの？」

「もちろんだ、恩人よ。さもなければ、私はここにはいない。前払いは蟻族の基本中の基本だ」

「その通りじゃな。紹介するぞ。左から、ローレイ、ウォルト、リイ、ローズ。こちらは飛族のレラじや」

「そしてこつちが」

レラがピエールの後を引き取つて言った。その視線は大鷲に向けられている。

「私が乗つてきたのが、雄の大鷲カパッチ。その隣がカパッチの双子の弟チリ、そしてその隣がまだ若いメスのアクイラだ」

当然のことながら、大鷲は愛想を振りまかない。むしろどう猛にウイル達をにらみつけている。ウィルは思わず後ずさりをした。その時、信じられない言葉を聞いた。

「かわいい！」

目と耳を疑つた。

ローズが恐れもせずに、アクイラに歩み寄つてゐる。

「止まれ、危険だ」

レラが甲高い声で叫んだ。ローズの足がピタリ止まつた。

「大鷲は私ら蟻族以外の者には懐かない。特にアクイラはまだ若いから凶暴だ。一人で近づくな」

「そうなの」

ローズはじつとアクイラを見つめている。アクイラは爪で砂浜をかいて砂を大きく散らしていたが、目の端でローズを捕えていた。

「でも何だか、大丈夫な気がするわ」

そう言つと、ローズはレラが止めるのも聞かず、一気にアクイラに近寄り、頭を撫でようと手を伸ばした。

その時だつた。アクイラが突然紅紫色の光につつまれた。

「え……」

ウイルが瞬きをした後、その光は消えていた。

ローズは驚いて伸ばしかけた手を寸前で止めている。

ちらりと見ると、ローレイにもリイにも表情に驚愕の色が浮かんでいた。

だがレラはと「アクイラの散らしていた砂が目に入つたらしく、しきりに田をこすつており、ピエールは和やかに微笑んでいる。驚くべきことが続けて起こつた。

アクイラが突然甲高い鳴き声を上げたかと思うと、ローズの伸ばしかけた手に頭を押し付けてきた。頭突きではない。誰がどう見ても、それは甘えだつた。

ようやくこするのをやめたレラは、田を見張つた。

「そんな……。アクイラが……？」

「まあ、いろいろと世の中には不思議なことがあるものじゃ」

ピエールがどりなすように言った。

「さて、レラ。そろそろ出発した方が良からう。夕方までに着かな

いと、この4人を待つてゐる者達が心配するじやろつかな
先日ローレイは華族のウイルのおばに、行く旨を伝える手紙を出して
いた。

「ああ、そうだな。ではウォルトとローレイや。チリの方に来て
くれ。慎重に」

ウイル達を誘導しながらも、その日はまだアクイラにそがれてい
る。ウイルは振り返つて仰天する。ローズは今やアクイラに抱きつ
いていた。リイが少し困惑したように、後ろに立つてゐる。ウイル
のすぐ後ろで、ローレイが誰に言つわけでもなくつぶやいた。ウイ
ルは心の底から、同意してしまつた。

「似た者同士」

「さて、お別れじやな」

ピエールは大鷲の背中に乗つた4人に向つて言つた。

ウイルは潮風を肺いっぱいに溜めこんだあと、口を開いた。

「本当にありがとうございました」

他の3人もそれぞれピエールに向つて、お礼を言つた。

「ウォルト、わしの言つたことを忘れるでないぞ」

ウイルは力強く頷いた。

「近いうちにまた手紙を書くぞ、レラ」

「分かつた」

ピエールに別れの言葉を述べると、レラはカパッチに呼びかけた。

「行くぞ、カパッチ」

大鷲は人間の言葉を理解するらしい。それとも気持ちか。

カパッチは大きな羽を砂浜で2・3回羽ばたかせると、一気に飛び
立ち、ローレイとウイルを乗せたチリ、ローズとリイを乗せたアク
イラもそれに続いた。

今日の空は、吸い込まれそなくらい青かつた。

花咲く村 1（後書き）

まちがつて原稿のデーターを消してしまい、やる気ゼロになつてしま
たちょこみるくです。

読んでくださつてありがとうございます。
よろしければ、感想＆評価をお願いします

飛び立つて、どれくらいの時間がたつただろうか。今のウイルにはそんなことは、どうでも良い。眼前に広がる世界に全てを奪われていた。

太陽に照らされ、きらきらと青く美しく輝く海。緑に輝く島々の景色もとても綺麗である。

海の月らしい青と緑のコントラクションだと、ウイルは思った。心地よい風が、ウイルの髪をなびかせる。

大鷲の羽の力強く動く音が、さらなる興奮を呼んだ。前にいる、ローレイは飛び立つてから一言も口をきいていないが、きっとウイルと同様感動しているに違いない。嘗てない、最高の気分だった。

その島が視界に入った時、ウイルは驚いた。指をとして、聞く。

「あの島は……？」

だがローレイは何も答えない。

仕方なく、近くを飛んでいたレラに大声で聞いた。

「あれは、ポルテフラ島だ」

レラも大声で返す。

「見れば分かるはずだ。枯れていの木が目立つだろ？」

ウイルはその島を凝視した。

美しい景色の中で、その島は明らかに汚点だ。

確かにレラの言うとおり、枯れ木が目立つがそれは島の一部に過ぎず、他の部分は黒くて何も見えなかつた。

近づくにつれ、島が大きく見えてくる。

ウイルは長い間、その島を見つめ続けた。

島の真上あたりという所で、ようやくウイルは気が付いた。

島はそれ自体が黒いのではない。

いや、もしかしたら黒いのかもしれない。

だが今黒く見えている理由は、黒いスマッグのような不得体の知れないものが島のほとんどを覆っていたからだ。

レラがカバッチをチリにぴったりと横につけ、ウイルに向かって言った。

「最近、妙な噂を聞く」

「どんな噂？」

「あの島はもともと死の島なのだが、ここ最近その環境がさらに悪くなつていつているらしい。不思議な病気が、一つの種類に限らず蔓延しているという話だ。ポルテフラ島のすぐ東にある、小さい島が見えるか？」

「うん、見える」

黒いスマッグのせいでその島全体は見えなかつたが、正常な縁を持つ小さな島が確かにそこにある。

「あれはエコイカウン島。あの島で病気が蔓延しているという話だ。それに最近、上流貴族の使いがあの島によく来ている。どいつも不穏な動きがある。私達は極力ここには近寄らない」

ポルテフラ島に怪しげな動きがある

トムの小屋で聞いた、ローレイの報告。その怪しげな動きを封じるためにも、早く王になれとトムは言った。

だがもし遅れたらどうなるのだろうか？ なれるかどうかさえも、難しい状況というの。

そう考えると、胸がざわつく。

一体この島で何が……？

そこで思考停止させ、ウイルは無理やりその島を視線から外した。気分まで悪くなってきたからだ。

後で考えよう。

後で、リイに相談してみよう。

ウィルはそう心に決め、他の所に田をやつた。そこで水平線にもう一つの島が見えてきたことに気づく。かなり大きい島だ。海岸線がずっと横に伸びている。聞かなくても、あの島が分かつたような気がした。

一番大きい島だと聞いた。

この世界の中心。王都がある島。レラが叫んだ。

「オーラムステッラ島だ」

ウィルは興奮の波が押し寄せるのを感じた。

この国の繁栄の中心。その一方で、今の元凶の中心ともなっている。その島の上空にたくさんの大鷲が飛んでいる。そして港には、数えきれないくらいの船。

だんだんと、その島はウィルに姿を見せ始める。

島の東部に、大きな岩山が見えた。そのふもとは森林で覆われている。非常に獨特な形だ。

頂上は西部の方に向かつて伸びているが、一つの山を頂上から真下に一つに割つたように、その先は崖になつていて。直角三角形の直角を西側の地面に据えて、置いたような感じだ。

「あれは……？」

レラが答える。

「『世界の果て』だ。もちろん、知っているだらう？あれは私達蟻族の聖地もある」

さすがに「世界の果て」のことは、ウィルも知つていて。この世界で一番高い山。一番近くに近いところ。

レラの声には誇りが混じつているのを感じ取れた。

「あの頂上には蟻族の者しか、行くことができない。普通の人には、あの岩山を登ることは不可能だ」

「行ったことがあるの？」

「もちろんだ。だがあの天に向つて細く伸びている頂上には、足をつけたことはない」

「どうして？」

「恐怖に氣を失うと言われている。一寸先は、世界で一番大きな崖だ。私達の中でも、あの頂上に立つた者は、少ない。相当の精神力の持ち主でないと、立つことはできないと言われている。クリストフ・ボーディンを知つているね？」

「知らない」

ウイルは即答したが、レラは顔をしかめた。氣を悪くしたようだ。『私達蟻族の英雄だ。有名なんだが……。彼はあの『世界の果て』の頂上で、大鷲を操る力を手に入れたと言われている。私達の族はその時代奴隸として扱われていたが、それ以来確固たる地位を会得した。自由を手にしたのだ。空を飛ぶという自由、それは私達のみに与えられた『自由』だ』

ウイルは黙つて、レラの話を聞いていた。なんとなくレラのことは、好きになれない。

蟻族の者は皆こうなのだろうか。自分達に誇りを持つことはいいことだと思うが、少し自尊しすぎているような気がする。それにルクへの執着も、聞いていた通りすごい。

「大鷲を扱うことができる力。それは私達蟻族の証でもあり、クリストフ以来代々受け継がれてきた貴重なものもある。特別な、選ばれた力だ。君らは幸運だ。一時とはいえ、飛ぶことができたのだから。普通の人は決して

レラの長い話に適当に相槌を打つてゐるうちに、島の中心が近付いてきた。

海岸近くとは雰囲気ががらりと変わり、大きな城が密集している。上空には蟻族の者が多くいた。レラに片手をあげて挨拶をし、飛び去つていく蟻族も何人かいだ。

ひゅんつという風の音と同時に、一羽の大鷲がウイル達の乗つているチリの右横に並んだ。

後ろをついて来ていた、アクイラだ。

「見て！」

ローズの興奮した声が隣から聞こえる。

「私の言つことを聞いてくれるの！ アクイラが私の言葉を理解するの！」

レラはローズに気づかず、まだ何かを話し続けていた。

「あの大きな城の集落の中に宮殿があるのかな？」

「まさか……」

ローズが信じられないといった顔をした。

「宮殿はもつともつと、大きいわ！ もう少し北にあるわよ」

「ここらへんの地理を知っているの？」

答えたのは、ローズの後ろにいたリイだ。気のせいか、少し顔が曇つていて見えた。

「私達が仕えていた伯爵家の城は、ここのあるの」

「大丈夫よ。絶対に見つかりっこないわ」

ローズはリイにといつより、自分に言い聞かせるように言った。

「あら」

ローズは、ずっと黙っていたローレイの顔を覗き込むようにしながら、言った。

「顔がすごく青いわよ、ローレイ」

ローレイは何も答えない。不思議そうにしていたローズの顔に、笑みが広がった。

「分かった！ あんた高所恐怖症なのね！ 案外かわいいところあるじゃない」

ローズは遠慮なく、笑い始めた。ローレイは相変わらず、無言だ。だがウイルはその背中から、不吉なオーラが出てくるのを確かにしつきりと感じた。ローズの笑いとは反対に、ウイルは恐怖を感じる。リイもウイルと同じだつたらしい。ローズの気をそらすのをねらつたかのように、一点を指さして叫んだ。

「見て！ 宮殿よー、ほら、シャーンティヒ宮殿」

ローズの注意も、ついでにウイルの注意をそちらに向かわれる。息を飲んだ。

真っ白な宮殿だった。しかも周りの大きな城に比べ物にならないくらい、大きい。

優雅な建築様式。美しい庭園。その中央には大きな噴水がある。周りにはたくさんの塔が立ち並び、敷地内にはいくつか森もある。花が咲き乱れる中庭。堂々とした威厳を感じさせるファサード。全てが壮大だった。

「敷地内を全部回るには、一週間かかるそうだ」

いつの間にか蟻族の話を終わらせていたレラが、横から言った。

ウイルはローレイの背中の横に身を乗り出しながら、食い入るように見つめた。

自分はここで生まれ、お母さんとお父さんはここで暮らし、ここで死んだ。

エカルイア家の者は今ここでいる。

言つまでもなく、自分と繋がりの深い場所。

ウイルの中で、さまざまな感情が混じり合い、そしてこみ上げていた。

読んでくださいてありがとうございます。

眼前に広がる多いな城と町。そして空と海。大鷲に乗つて飛行しながら、ウイルはこれまでに感じたことのない感情に戸惑つていた。

なぜだろう。

不思議な感情が下からぐつとこみあげてくる。大声で叫びたい気もした。

泣きたい気もした。

目を閉じ静かにしてたい気も同時にした。この感情を言葉で表すことは不可能だった。

いろいろ迷つた拳句、ウイルがした行動といえば大きく目を見開き、今この場所から見える光景を可能な限りはつきりと頭に焼き付けようとした。

「あそこが華族の村だ！」

そうレラが叫んだのは、もう日が傾き始めてるころだつた。レラの指の先には山があり、その向こうには限りなく広がつている花畠が見えた。

「あそこが……」

ウイルがつぶやくと同時に、レラが隣で叫んだ。

「着陸態勢！」

これまで平氣だつたウイルも一気に青ざめた。視界が急スピードで変わり始めた。空が猛スピードで遠くなり、町が同じスピードで近づいてくる。髪が上になびいた。リイの悲鳴が聞こえる。

つまりは……落ちてゐる！

「ああああああ！」

「ウィルは恥も忘れて、声の限り叫んだ。ローレイはどうだつたか分からぬ。だが、ただ一人ローズはこの「落ちむ」、という瞬間を満喫していた。

「最高！このスリル癖になりそつだわ！」

「はあ、はあ、はあ……コホ、コホン。もう僕……はあ……一度としない前かがみになり息絶え絶えになりながらも、ウィルは宣言した。硬い地面の上に立つ喜び感じながら。

「情けないわねえ……」

手を腰にあて、しゃきつとした姿勢のローズはウィル、そしてその隣で気持ち悪そうにかがんでいるローレイを見ながら言った。時は夕暮れごろ。

周りには一面に花畠が広がつていて、本来なら見とれるところなのだが、一同はローズ以外その余裕がなかつた。

「最近の若者はどうしようもないな……」

そうぼやいたレラは、早くもまた大鷲にまたがり出発しようとしていた。

「もう行かれるんですね……」

少し悲しそうな声を発したのは、ローズだつた。ウィルは不思議に思い顔を上げると、ローズがゆつくつとアクイラに近づくのが見えた。

「ローズ……？」

「もうお別れね、アクイラ」

ローズが手をアクイラの頭におくと、アクイラはゆつくつと瞳を閉じた。まるで撫でてと言つてゐるかのように。

「行くぞ、アクイラ。出発だ」

レラは全く容赦がない。チリは既にカバッチの隣でその大きな翼をゆつくりとばたかせていた。

「キヤウツツ」

突然アクイラが鳴いた。その時だ。またアクイラが紅紫色に輝き始めたのは。

ウイルは慌ててレラを見たが、やはりその光が見えていらないらしい。光はまたすぐに消えた。

見えてるのは、ローズ、リイ、ローレイ、そしてウイルだけ。

「なんだ、アクイラ？」

レラはややイライラしたように、アクイラに問いかけた。

「キヤウツツ」

またアクイラが甲高く鳴いたかと思つと、ローズに背中を向けそして……。

「……アクイラ？」

アクイラは身を低くローズの前でかがめていた。

誰がどう見ても、ローズに背中に乗ってくれと言つてゐる。

「アクイラ、その女は飛族の者じゃないぞ！」

そう叫んだレラは、何かに殴られたような顔をしてゐる。

「そんな……。ありえない。大鷲は私ら飛族の者だけに忠誠を乞ふす。決まっているんだ。私たちの先祖クリストフが勝ちえた栄誉だ！」

「まあ、いろいろと世の中には不思議なことがあるものよ」

ローズがピエールの言葉をそのまま引用した。

レラは咄嗟にローズを睨んだ。誇りを傷つけられたと思つたらしい。

ローズは少しも怯まなかつた。むしろ余裕の笑みを浮かべている。

「アクイラは私に忠誠を尽くすみたいよ。そうでしょ？ アクイラ」
ウイルはローズの自信満々な態度に驚いた。アクイラの心が読めていふとでも言つのだらうか。

アクイラはローズに答えた。

「キャウッ」

アクイラの甲高い声が赤く染まり始めている空に、響き渡る。

「ふん、勝手にしろ」

レラはそっぽを向いて言った。アクイラのことがあきらめたりしない。

「行くぞ、カバッチ」

レラはそう言うと、ウイル達への別れの挨拶もなしに飛び立つて行ってしまった。

「何だったんだろう？あの光。君たちも見えたでしょ？」

レラが飛び立つとすぐに、ウイルは他の3人に向かって聞いた。

「さあ、分からないわ」

そう答えたリィの顔は、まだ少し青ざめている。

「でもあの光は、王家の木箱の光と同じ……」

「ラージャの恩恵……」

ウイルがぱつりとつぶやいた。

「え？」

ローズが聞き返したが、ウイルは首を横に振った。

「……まさかね。ううん、なんでもないよ」

「それはそうと……」

ローズはアクイラに視線を戻し、次の瞬間アクイラに飛びついた。

「これからよろしくね！ アクイラ！」

「キャウッ」

サクッ。芝生を踏む足音がすぐ近くでした。振り返ると小太りの男が、鎌を手にぶらりと持った状態で立っていた。服のあちこちに土や草がついている。

「おかしな鳥が鳴いていると思ったら……、『到着だつたのかい』
男は満面の笑みを浮かべて言った。
「華族の村へよひ」」

花咲く村 3 (後書き)

久しぶりの更新です - - ;
次の更新はなるべく早くなるよう頑張ります ^ ^

「ようこそいらっしゃいました」

澄んだ声で迎えてくれたのは、ウイル達と同年代の美少女だつた。外觀からは氣品が溢れていて、その微笑はとても優しい。華族の人たちはみなこの子のように美しいのだろうかと、ウイルはみとれながら思つた。

「私の名前はフローラ・レファアです」

家の中に案内しながら、少女が振り返つて言つた。ウイルたちもそれぞれ自分の名前を名乗つた。

「ウイル・カシューです」

久々に自分の本当の名前を口にする。

「キッチンで母があなた達を待ちわびていますわ」

「今日はごちそうだな」

活氣のいい声が聞こえた。ウイル達を先ほど迎えに着た、小太りの男ハレだ。ハレが案内した家は、ウイルがこれまでに入つたことのない、大きくて立派な家だつた。広い応接間にウイル達の足音が響く。至るところに花瓶がおかれており、そこにいけられた花たちはまるでその美しさを競つてるかのように咲き誇つている。

「お父さん、お密さんの前ではちゃんと遠慮してね」

困つたような顔をしながら、フローラが言つた。

「親子……？」

ローズが驚いて言つた。

「はい。私の父です」

「に……似てないんですね」

ハレは人懐こそうな親しみやすい顔をしているが、とてもハンサムとは言えない。

「ははは。フローラがわしに似たら困るだろう」

ハレは大笑いしながら言つた。フローラも一緒に少し笑つた。

食卓の席で迎えてくれた、アンナおばさんもまた美しい人だつた。

「あなたがあのウイル……。こんなに大きくなつて。どちらかといふと、エレンに似てるのね」

おばさんの声は震えていた。おばさんはゆきくつとウイルに近づいた。

「よく来てくれたわ。私のかわいい甥」

ウイルは困惑し、自然に身が硬くなるのが分かつた。母親がいなかつたら分からぬのだが、「お母さん」とはいつも人のことを言うのだろうか、とウイルは思った。

数秒後、ウイルにはものすく長く感じられたが、アンナおばさんがようやくウイルを放すと、ローレイたちの方を見た。

「こちらは……」

それぞれ自己紹介をする。

「あなたがバティなのね」

アンナおばさんがローレイに微笑みかけながら言った。

「はい」

「つかでゆつくりしていつてね」

アンナおばさんはローズとリイの方も見る。

「もちろん、あなた達もね」

「ありがとうございます」

「お……恐れ入ります」

そこでアンナおばさんは表情を曇らせた。

「いつまでもいてと言いたいのだけど、それは行かないのでしょうかね……」

「まあまあ、とりあえず飯にしようじゃないか、母さん」とりなすように、ハレが言った。

「やうね」

フローラも柔らかい微笑みで同意する。

大きな長テーブルには「さうが並んでいた。船でのディナーパーティの御馳走に少しもひけをとらない。いや、むしろ華やかさでは、色とりどりの花を使用しているためか、」さうの方が上だった。

「今日は疲れているでしょうから、早めにぐっすりお休みになるといいわ」

アンナおばさんが、花のサラダをウイルのお皿にとりわけながら言った。

「ありがとうございます」

お皿を受け取り、ウイルはにこりして言った。おばさんが言った通り、空の旅は思った以上に体への負担が重く、ウイルはもうヘトヘトだった。

「こんなおいしい食事をとったあとですから、今日はぐっすりと眠れそうです」

そう言つたリイは、ちゅうどハーブの入つたパスタをおかわりしている。

ローズも同意した。

「そうね。今日は久しぶりにゆつくりと安心して寝られそうだわ」
ウイルも口にサラダを入れ、自身も大きく頷こうとしたが、その前にむせてしまった。

「ゴホッ。ゴホッ」

「あんた、詰めすぎよ。口に。全くだらしがないわねえ」

ローズがウイルの背中を軽くたたきながら、あきれたように言った。

「お料理はどこにも逃げないから、ゆつくり食べるといいわ」
おばさんにウイルは目を涙でうるませながら、頷いて答えた。
非常に残念なことに花のサラダが口に忍るしく合わなかつたことは、
口が裂けても言えない。この花のすっぱさは、とても人が口にできるべきものじゃないとウイルは思った。

隣で同じサラダを口にしたローレイの体が一瞬凍りつき、その後お

茶をがぶ飲みしたのをウイルは見逃さなかつた。

読んでくださいてありがとうございます

（虹花物語）

昔々ある国のあるお城にそれはそれは美しいお姫様、レイーズ姫がおりました。

求婚する他の国の王子様が後を立たないほど、美しく多くの人々から愛されていました。

しかし、困ったことにレイーズ姫はどの王子の求婚も受けようとしませんでした。

姫の父、その国の王様は求婚になかなか首を縊に振ろうとしないレイーズ姫に、ほとほと困っていました。

ある時王様はレイーズ姫に聞きました。

「お前はどんな人と結婚したいんだね？」

お姫様は答えました。

「私は虹が好きです。しかし虹はめったに見ることができません。もし、どなたかが虹を私にくださつたならば、私はその方と結婚しますよ！」

そこで王様は世界中の王子に虹をレイーズ姫に与えたものに、娘をやると公表しました。

世界で一番小さい国の王子もその虹の話を聞きつけた王子の一人でした。勇敢なことで知られていた王子は、胸を躍らせました。

「虹をとりに行く旅か。おもしろそうだ」

王子はすぐに支度をし、旅に出ました。王子が真っ先に向かったの

は、ペガサスが住んでいたと言っていた険しい岩山でした。猛獸が出ることから、人々がよりつかない岩山でしたが、勇敢な王子は臣下を連れて勇猛果敢に進みました。

さあざまな危機を乗り越え頂上に着くと、王子は満月の明るい夜、天に向かつてのびている崖の方に向かつて一人歩き始めました。満月は世界を明るく照らし、臣下たちはその崖の高さに恐れをなして王子の後に続くことができませんでした。

王子は一番高い、崖のぎりぎりのところに立つと大声で叫びました。

「ペガサスよ。いるのなら、私に力を貸してくれ」

次の瞬間、王子の姿が崖からふと消えました。

しかしそのまま数秒後、臣下たちは王子を目にしました。

その時、王子はペガサスにまたがっており、顔には輝かしい笑顔を浮かべていました。

さて数日後、念願の大きな虹が空に出ました。

王子はペガサスにまたがり、空を飛び虹に向かつて手をのばしました。

しかし、虹にその手が触れた瞬間、虹はちりぢりになつて世界中に飛びちつてしまいました。

王子は一度は落ち込みましたが、花と姿を変えた紫色の虹をすぐに見つけ、残りの赤、橙、黄、緑、青、藍、それぞれの色の虹を探す旅に出、全て集めるとレイーズ姫に献上しにお城へと向かいました。

虹の花を受け取ったレイーズ姫は大変喜び、またさまざまな冒險をしてきた王子の勇敢さにも惹かれ、めでたく王子と結婚することになりました。

それから一人は末永く幸せに暮らしました。

「ねえ、素敵なおどぎ話でしょ？」

話終わるとフローラはウィルにつっこみ笑つて言った。
ウィルは曖昧に笑つて言った。

「素敵なおどぎ話だね」

面白さがよく分からなかつたというのが、正直な感想だ。
ローズ、リイ、ローレイ、リイは華族の村にたどり着いた次の日、
フローラに花畠を案内してもらつっていた。

「その前に、あんたがこの有名な、すゞくすゞく有名なおどぎ話を知らなかつたというのが驚きよ」

ローズが手を腰にあて、あきれたように言った。

「一国の王子が、そんな調子でいいわけ？」

ウィルはむつとして言った。

「おどぎ話なんて知らなくても困らないだろ」

「それにしても」

リイが睨みあつてる一人の間に割つて入る。

「これが虹花伝説に出てくる虹花なのね」

その畠には一面に広がる黄色の花畠が映つていた。

「そうよ」

フローラはにつこつして答えた。

「ここにあるのは黄色の虹花。^{レイズ}他の6色の花はおどぎ話の中とおなじように世界のどこかで咲いてるわ」

ローズは花をよく見ようとして、座り込んだ。

「バラに似てるのね」

「ええ、バラと違つてとげはないんだけどね」

「あれ……」

「どうかしたの？ローズ？」

ウイルが見ると、ローズは眉間にしわをよせていた。

「私赤の虹花レーベス見たことがあるわ。でも、そこでは別の名前で呼ばれてたけど……」

「虹花はそれぞれの地域で別の名前で呼ばれているそうよ」

フローラが答えた。

「だから集めるのが大変なの。全ての花を集めることができるのは王族のみと言われているわ」

ウイルは即座に聞いた。

「王族が？なぜ？」

「分からないわ。勇敢だからとかそんな理由じゃなかしい。とにかく華族の私たちでもここにある黄色と、あと、3種類の虹花の場所しか知らないわ」

「興味深いわね」

リイが考えこむようにして言った。

「それにしても……」

フローラはローズを見た。

「赤の虹花をどこで見たの？私はその花があるのは、シャティレティ女王が創設したこの世界のNO.1を誇る学園、シャティレティ学園だと聞いていたけれど。まさかその学園に……？」

「まさか！」

ローズが慌てて言った。

「ちょっと貴族に仕えていたから、見たことがあつただけよ……」

ウィルは、少し俯いたローズを見た。貴族の話になると、いつもローズの顔が暗くなる。貴族に仕えていた時は、やはりそれだけでもつらかったのだろうか。

「そういえば、ローレイは？」

リイがあたりを見回しながら言った。

「ローレイさんならあそこに」

フローラが指した先を見ると、花畠の後ろにあつた木によりかかって寝ている。

ローズが立ちあがりながら言った。

「全く人の話を聞かないなんて、どうしようもないやつね」

「ローレイさんはおとぎ話とか花には興味がないみたいですね」

太陽が既に傾き始めていた。

「母が夕飯の支度を始めるので、私もそろそろ戻つて手伝うことになりますね」

「私たちも手伝うわ」

「夕食楽しみだな」

「ちょっとあんたも手伝うのよ」

ローズがウィルを睨む。

「わ…分かってるよ」

今日はサラダが出されないといいな、とウィルは密かに考えた。

その時だった。

すやすや寝てたはずのローレイが目を開けた。

「客人のようだぞ」

読んでくださいてありがとうございます。

自由が欲しかったの。

空を自由に飛ぶ鳥のように、世界に出たかった。

今の暮らしの喧騒から逃れたかった。

「本当にお客様みたいですね」
フローラは振り返りながら言つた。そのままは遠くに人影を認めている。

「お客様が来るの？」

「ええ。花を買い求めるお客様さんが来ますよ。たいていは貴族の召使いとかが多いんですけど」

「や...貴族」

ローズの顔が曇る。

「フローラ、私達先に戻つて、夕食の手伝いをしててもいいかしら
?あまりその召使いとやらに会いたくないわ……」

「ええ、もちろん」

「リイ、行きましょう」

「.....」

「リイ.....?」

ウイルがリイを見ると顔が青ざめている。

「どうしたの?リイ、気分でも悪いの?」

「リイ?」

リイは自分の顔を覗き込んでいる、ローズを見た。

「ローズ……。後ろ……」

ローズはゆきくつと振り返った。

そこには中年くらいの身長の低い女性が一人。

しばらく一人は見つめあつていた。

「ローズお嬢様！！！」

突如その中年女が叫んだ。

ローズの顔はこれ以上にないくらい青ざめている。

「メ……メリ……。どうして……！」？」

「それは私が聞きたいですよ。お嬢様は今までどこにおられたのです？お父様もお母様も大変心配なされたのですよ？家中の者がどれほど探されたのかご存じなんですか！？」

「やめてよ。そんな嘘」

ローズは耳を塞いで叫んだ。

「心配する？ ふざけないでよ。大嘘つくるのもほどほどにしなさいよ、メリ。お父様も、

お母様も私を心配してゐるのではなく、家のことを、地位とか名譽、

体面を気にしてゐるのよ！！」

突然、メアリが息をのんだ。そのままローズからリイへと移つてい
る。

「なんてこと！　リイ。あなたも！　あなた……。首輪は……！？」

リイはメアリを凝視しながらも、一步下がつた。

「なんてこと！　大犯罪よ！首輪をはずすなんて。奴隸のくせに。
うまくローズお嬢様に取り入つたのね」

フローラは予想だにしなかつた事態にありおろしていた。ウィルも
何がなんだか分からなかつたが、メアリとかいう中年女がすゞくム
カツクやつということだけ分かつた。ローレイもウィルときっと同
じことを思ったのだろう。

背後で力チャつと手が剣に触れる音がした。

「ローズお嬢様を欺くことはできても私はできませんよ。奴隸のく
せに、こんな大それたこと。ご主人様が優しく接してくださつたこ
とで、いい氣にでもなつたのかしら？　全くおぞましいわ」

「黙りなさい……」

『黙れ……』

ローズとウィルとローレイが同時に叫んだ。

ウィルはキッとメアリをにらみつけた。こんなムカツク女がこの世
界にいるなんてついぞ知らなかつた。

リィの顔は蒼白だった。もづきで泣きそつた顔をしている。

メアリは口をつぐむと、ローレイの剣をひりこと見やつ、一步下がつた。

「とにかくローズお嬢様、家出」には終わりです。全くボーデル家の恥ですよ！ お父様とお母様の顔に泥をぬることになります」

「ボ……ボーデル家？」

フローラがかすれた声で聞いた。その驚愕した顔はローズに向けられている。

「ボーデル家つていつたら、伯爵家として有名じやない……」

「爵位が何よ。そんなものくそくじやないよ……」

「まあ……」

メアリが息を呑んだ。

「ボーデル家の長女がそんなこと言つなんて……。ローズお嬢様、許されませんよ……一体どうなされたんですか。そんなことを口にするなんて。その脱走奴隸に何を言わたんですか」

「もう一度リィのことを侮辱した」

「ウィルの後を、ローレイが続けた。

「切るぞ」

メアリは再び口をつぐんだ。

ウィルはローズの方をむいた。

「よく話が読めないんだけど、ローズ、君は貴族なの？」

「そうよー、悪い？」

ローズは顔を真っ赤にしている。

「私も偽名使つてたの。姓はアルカデルトではなく、ボーデレール。伯爵家の娘よ」

「……」

「それが何よ」

ローズは沈黙しているウィルとローレイに食つてかかった。

「それが悪いっていうのー？ あなた達からしたら、私の存在はきっと憎いんでしょうね。このカラーにも嫌悪を感じるでしょうね」

ローズはぐいっと乱暴に服の裾をたぐりあげた。

その上腕には他のカラーと違つてさまざまな装飾が施された、金の腕輪が光っていた。

ウィルは息を呑んで、そのカラーを見つめた。

「でも、なりたくて貴族なんかになつたわけじゃないわ！ 戻りたくない」

ローズはメアリの方を振り返つた。

「私は戻らない。絶対に。あんな家に戻るくらいなら、今ここで死んだほうがマシよー。あの高慢ちきな女の顔も一度とみたくないわー！」

その場にいる者全員が固まつていた。誰もがどうすればいいのか分からなかつた。

ローズはずつと肩を震わせていたが、一度ほど大きく息を吐くと、つんと顔をあげ、メアリを見据えた。

「メアリ。今すぐ立ち去りなさい。私は帰らない。お父様にもしつかりとそれを伝えることね」

威厳のある声だった。その立ち回る舞いが高貴な家の出身であることをより感じさせる。

「私は絶対、戻らない。ローズ・ボーデレールはもうこの世には存在しないわ」

読んでください。ありがとうございます。

「んで……」の状況を一体どうしてくれるんだ？ バカ伯爵娘が「ローレイは恐ろしく不機嫌だった。そばに立っていたウイルはそろりそろりとローレイから距離をとった。離れると経験と直感がウイルにつづいている。

「どうしろって一体何が？」

ローズは相変わらず全く動じない。

ローレイの突き刺すようなにらみにも。

「何がって、お前この状況が読めないほど大馬鹿なのか！？ 僕とコイツが立場的に貴族を避けたい立場にあるのは明らかだろうが！」

「ええ。知ってるわよ！」

「なら、他人事みたいな言い方をさせないぞ。あの調子だと明日にはボーデール家の者が大勢の人を連れてこの村にやってくる。軍隊かもしねーな。伯爵家と言えば、財力と兵力は十分持っているはずだ」

「兵力も！？」

この言い争いに口出しあしないと決めていたウイルだが、つい口を出してしまった。

「ああ。伯爵家なら数百人の兵力を持つてもおかしくない『簡単なことよ。逃げればいいじゃない』ローズをさらりと言つた。

「簡単に言つた！ 人を巻き込んでおきながらよくそんな大口がたたけるな！」

「意図しないじゃないわ……。知つてると困ります。とにかく……」

そこでローズは後ろでおずおずと様子をつかがつて、ロイを振り返った。

「私たちは逃げるわよ。リイ支度しなきゃ。やすやすと捕まつたまるもんですか」

「どうやって？」

「ウィルが聞いた」

「ウィル、本気でそんなこと聞いてるの？ 今の私には逃げるなんてたやすいことよ」

「……？」

ローズは顔をしかめるウィルの前で、指を口に加えピーと笛笛を吹いた。

「キヤウー」

返答は即座だった。

ウィルが空を見上げると、アクイラが大きな翼を広げながら降りてくるところだった。

アクイラが優雅に着地すると、ローズは傍により頭を撫でた。

「また私を乗せてくれるかしら？」

「キヤウー！」

ローレイは腕組みしながら、苦々しい顔でそれを見つめてる。

「自分たちだけ逃げるってわけか……。全くいい性格をしてるよな、お前は」

「でもローレイ……」

ウィルがおずおずと割って入った。

「確かに僕達は貴族には会わない方がいいけど、まだはつきりと顔がわてるわけじゃないし、今は大丈夫なんじゃ……？」

「たぶん、ウイル駄目よ」

答えたのはリイだった。まだ顔は青ざめている。

「私たちのことでこんなことになつてホント「めんね。でもね、今国王は世界のあちこちに兵をさしむけてる。今までその理由が分からなかつたけど、今なら分かる。言うまでもなく、あなたを探しているのよ。そして国王は探すのに、貴族たちに協力を求めてると思うわ。あなた達を見て何も察しない保証はどこにもないわ。やはりここには用心深くいつたほうがいいと思うの」

「やばいのはあんたもでしょ、ローレイ」

ローズがローレイに背を向けたまま言った。

「あなた達士族は今の国王を認めないとはつきり公言し、バディを国王に献上しなかつた。先代国王のバディ、トムを筆頭に堂々と今の王に対して逆らつたのよ。ただですまされないことは分かつてるでしょ？」

「……」

ウイルは大きくため息をついた。華族の村について、じばらくは落ち着いた生活があくれるのだろうと思つていたのに、一田田でこれだ……。

「それじゃ、どうすればいいの？ 僕達……」

「できれば……一緒にここを出ましょ」

答えたのはリイだった。

「どちらにしろ、ウイルとローレイ、あなた達のゴールはこの華族の村じゃないんでしょ？ こんなところでゆっくりしてゐる時間はホントはないんじゃないの？ 人に迷惑をかけておいて厳しいことを言つのもなんだけど……」

「……」

「どこに行けばいいのか分からぬ。何をすればいいかも分からぬ。お手げ状態なんだ。知つてると思つけど……」

「あの……話の途中口を出して悪いんですけど……」今までずっと黙つてなりゆきを見守つていたフローラが、割つて入つた。

「ローズさん、今日は大鷲さんに乗つてこくのはやめたほうがいいと想ひます」

「どうして……」

「今日の新聞の天気予報欄に明日は大雨で強風の恐れがあると……」

「……」

「そして向こうに咲いている青い花畠が見えますか？」

ウイルは田を凝らしながら、フローラが指さしている方向を見た。

「あの花がどうかしたの？」

「あの花はウエイドピーという花なのですが

「あの花はウエイドピーという花なのですが、あの花は雨が降り始める前は青色に染まるのです。普段は薄いピンク色の花ですが……。なので、もうすぐ天気が崩れるのはまちがいないかと……」

「……。雨はまだしも、風はちょっと痛いわね。アクイラの負担も大きくなるわ」

「なので、ようしきつたら馬車をお呼びしましょうか？ それで今夜できるだけこの村から遠ざかなければきっと逃れられるはずです」

「それは助かる」

答えたのは、ローレイだ。

「馬車なら4人乗れる。どちらにしろ、俺とウイルはそれしか逃れる手段がない。迷惑掛けてしまないが……」

「ええ、すぐに私が手配しましよう、父と母にも事情を話しておきます。あ、それとウイルさん」

「何？」

「貴族の方には十分警戒してくださいね」「え？」

「エリは華族の村。あなたのお母様、エレン様は私の母の姉であり。エリの一族の出身。母も父もあなたに何も言いませんでしたけど、エリは既に国に……」

「田をつけられているといつ」とか……」

ローレイが後を続けた。

「ええ。ただここは都会から離れているうえに、都心とはそこの大きな山で阻まれてますから、なかなか偵察がしにくいのも事実です」「阻まれてるって、馬車は大丈夫なのか？　すぐに山を越えてこれるのか？」

「ああ、それは大丈夫です。先程のお客さ……たいていのお客さんは山の向こうの町とこことをつなぐ列車に乗つて来るのですが、それとは別に山と山の間で谷なつていつるところに、もう一本の抜け道があり、華族の村の者だけが使用しています。馬車は華族の者の馬車業を営んでいるものから手配しますので、安心してください」

「……ありがと。恩にきる」

「それでは、私は先に家に向かつてますね」

フローラはそういうと、くるりとこちらに背を向け、家の方に向かつて駆け出した。

太陽はもうほとんど海に沈み、あたりは夜に飲み込まれつつあった。

フローラが離れると、ローズはウイルを向いてさつとにらみつけた。

「ちょっとあんた！」

「え？」

「あんた、認められし者の自覚あるの？　その木箱を無防備にズボンのポケットにつつこむのやめてくれる？　それにさつき、私はあなたがフローラの前で余計なことを話してしまつんじやないかと気が気でなかつたわ！」

「仕方がないだろ？ 木箱は肌身離さず持つてきたいんだ。いつ光りだすか分かりやしない。それに、僕はちゃんと分かつてたよ！」
ウイルは膨れて言った。

「いつ僕がまづい話をしそうになつたと言つん」

悲しいかな。既にローズは聞いてなかつた。

「ところでリイ。聞きたいことがあるんだけど、アクイラが光につまれてたでしょ？ あれって……」

「あの紅紫色のでしょ？ 私の推測が正しければ、あれは木箱の光と同じ色だから、ラージャの力。つまり、あれがラージャの恩恵の証じやないかしら？」

「やはり、リイもそづ思つか……」

「なるほどな……」

ローレイも会話に加わつた。

「本来蟻族しか手に入れる事のできない、大鷲。それがお前への恩恵ということか」

ローズは再びウイルの方を向いた。

「あんたはさつき何も手がかりがないみたいな」と言つてたけど、私はアクイラのこととかもあってそうとは思えないのよね。これは試練。木箱は試練を助けてくれる道具じゃないわ。答えはきっと自分たちで導かないといけないのよ」

「導くつて言つたつて……。何かひざひすればいいか……。ペガサスを探せなんて漠然としきぎてる」

「そのことなんだけど……」

リイはレイーズの花畠の前に座り込みながら言つた。

「私、意外に虹花伝説にヒントがあるんじやないかと思つの……」「あのつまらないおどき話に？」

ウイルが驚いて聞いた。

「つまらないって何よ！」

ローズは憤慨して言った。

「あんたは感性というものがないのかしら？」

「ローズ、ウイル、話を進めるわよ？ 私が知ってる限りペガサスにまつわるおどぎ話はその虹花伝説しかない」

「確かにそうだな」

ローレイが頷いた。

「俺も母親にいろいろとおどぎ話をガキの頃から聞かせてもらつていたが、ペガサスにふれるおどぎ話はその虹花伝説以外聞いたことがない」

「でも……」

ローズは顔をしかめて言った。

「おどぎ話はおどぎ話にすぎないんじやないかしら。現実とは違うわ」

「」の「」のおどぎ話に出てくる花は実在してたわ。そしてペガサスがいることも分かつてゐる

リイは一輪の黄色のレイーズをちぎると、立ち上がり振り返つた。
「この花が何か鍵を持つてる気がするの。もちろんおどぎ話が全部現実にあるとは言わないわ。まず、虹は花にはならないし、お姫様も、王子様もいない。でも何かを暗示してゐるような気が

」

リイは突如話すのをやめた。

それがなぜなのか後の3人は聞かなくて分かつてゐた。

その『理由』が今日の前で起つてゐる。

すっかり暗くなつた小道である種の光と静寂が突然現れた。

しばらくして、ローレイが口を開いた。

「へえー。マジでいいとか

読んでくださってありがとうございました。
感想など頂けると幸いです。

「大変！」迷惑をおかけしてすみません

「 ウィルはアンナおばさんに心の底から謝った。

そして同時に背後のアンナおばさんを名残惜しそうに見る。

田はすっかり沈んで、あたりは真っ暗だった。

せっかく落ち着いた生活がじょじょに崩れたの。

「迷惑だなんて……。どうか気をつけてね。無事を祈ってるわ」

「たいしたおもてなしも、協力もできなくて申し訳ないわ」
「いえいえ、とんでもないです」

「お！」

ハレが一方を指さして、変わらないうきんな声を出した。

その指の先には一台の馬車の影。

「馬車がきたみたいだな」

ローレイも重ねてお礼を言ひ。

「馬車の手配までしてもらひてすみません。本当に向から向まで…
…ありがとうございます」

リイとローズも続けてお礼を言つた。

生温かい風が吹いてる。

「最後にこれをあなたに渡しておきたいと想つの」

アンナおばが取り出したのは、金の装飾が施された首飾りだった。鎖も金だ。

見るからに高価そうな首飾り。

「これはあなたのお母さんが使つてたものなの。その鎖についてる丸いペンダントは開くのよ」

ウィルはおばさんから首飾りを受け取つた。
ペンダントは手のひらよりひとまわり小さい。
ウィルはさつそく開けてみた。

「鏡だ」

開くと両面鏡になつていた。

「姉さまはそのペンダントを大変気に入つていたわ
「ありがとうございます。大切にしますね」

僕のお母さんが使つていたもの。
お母さん……。

一体どんな人だつたのだろうか。

アンナおばさんに似た感じのひどだつたのだろうか。

ウィルはペンダントを眺めながらぼんやり考えた。

今までこんなことを考えもしなかつた。「最後にお聞きしたいことがあるのですが……」

そう切り出したのはリイだつた。

「今日フローラさんが見せてくださつた、虹花^{レイズ}。他の色の花の場所、

分かるのだけ教えてくださいませんか？」

フローラは不思議そうな顔をした。

「ええ……いいんですけど。えと……赤はもう「存じなんですね?
えと橙がエクスプレシオ島、緑がエコイカウン島。だつたよね、
お母さん？」

アンナおばは頷いた。

「その通りよ。フローラ」

その口元が少し綻ぶ。

「なつかしいわ……虹花があ。ウィル」

「え？」

アンナおばはそこでクスリと笑った。

「あなたのお父さんは、虹花を全種集めて、それを半永久的に植物
を保存できる特殊な瓶に詰めて、それをあなたのお母さんにプレゼント
すると同時に求婚なされたのよ」

「全種……」

ウィルは父親の求婚話よりも全種の虹花といつといふに興味を持つ
た。

フローラは王族だけが全種虹花を集めることができると言っていた。
お父さんは虹花を全種集めることができたらしい。

少し考え込んでいるウィルを見て、アンナおばの表情はふと真顔にな
なった。

そして確かにこういった。

ポツリと。

「始まりはそれで大丈夫よ」

「え……？」

アンナおばは答へず、馬車にちらりと目をやつた。

「さてそろそろ出発したほうがいいわね。長く待たせりや悪いし。

ただでさえ、長旅になるというのに」

「道中気をつけろよ。抜け道は整備されてねーからな。たまに馬車が横転しちゃうんだよな。ハハハ」

ハレは威勢のいい声で笑いながら叫ぶ。

「……」

ウィルの近くでローズが小声で毒づく。

「気をつけるつたつて、どうじろつて叫ぶのよ……」

「ちょっとハレ、怖いこと言うんじゃないの」

アンナおばは夫に向かつて顔をしかめた。

「ああ、ハハハハ。スマン、スマン。ローズマリー」

ハレはしばしばおばのことを「ローズマリー」と呼ぶ。あだ名みたいなものらしい。

「脅かすつもりはなかつたんだ。本当にたまにだからそう叫ぶんでもいい。よっぽどの強い風が吹かんと、倒れんさ！ ハハハ」

直後生温かい風が唸り声をあげながら、辺りの木や花を強く揺らした。

た。

ローズがますます表情を硬くしていく横で、ウィルはレフア親子をぼんやりと眺めていた。

これが夫婦。

これが親子……なのだろうか。

よく分からぬけど、なぜかすこく暖かい。

自分は一度もこいつのとは無縁……。

いや。

ウィルはそこで思い直した。

トムとフランクじいの笑つた顔が浮かぶ。

ウイルも確かにその暖かさをかつて持っていた。

あの山奥で。

自分もその暖かい「何か」を持っていたことが分かり嬉しくなる一方で、ウイルは寂しさも同時に覚えた。

トム……。

フランクじい。

元気にしてるかな……。

フローラの声で、ウイルは我に返った。

ローレイに茶色のバスケットを差し出している。

「これ、さつき母と作ったサンドイッチです」

「すまない……」

さて、本当に出発しなきや。

ウイルはもう一度レフア親子に向かって深々と頭を下げた。

「本当にありがとうございました。それじゃ……僕達、もう行きま
すね」

4人が馬車に乗り込むと、すぐに馬車は走りだした。

ローズはアクイラに馬車についてくるよう指示し、アクイラはそれを理解したようだった。

「キヤウ」

一同は馬車から身を乗り出し、見えなくなるまでレフア親子に手を振った。

親子の姿が見えなくなると、さつきは切り出した。

「次はエコイカウン島が妥当かもね」

ローレイは腕組みをしながら同意した。

「そうだな……。また船旅か。まあ、あのようなことはないだろ?」

危険海域ではない

「でも船に乗り込む前にいろいろと必要なものを買い足したほうが良さそうね。地図とか食糧とかいろいろ必要でしょ？ お金は足りるかしら？」

「大丈夫よ。まだ十分余裕があるわ。足りなくなつたら、ウィルが稼ぐつてのもありなんでしょ？」

ローズが自分のバッグの中を覗き込みながら言った。

高価そうなバッグ。

たっぷりルクの入った水晶。

ウィルは納得した。

どうしてそんなものをローズが持っているのか今は理解できる。

「それはそうと、私達すごいよね」

ローズはにっこりと笑っていた。

「すごいと思う。すごくない？ だってこの世界の秘密に関わって、その確信にどんどん近づいていつてる！ 自分たちの力で危機を乗り越え、知恵を絞つて。こんな楽しさ、私知らなかつた。今まで全然！」

ローズは声に出して笑つた。

「楽しつ……」

ウィルは緊張感のないローズにあきれた。ローレイは顔をしかめており、リイは微笑をしていた。

確信にどんどん近づいていってる！

それは確かかもしれない。

ウィルはポケットに入っている木箱をポケットと握りしめた。リイが摘んだ黄色の虹花は紅紫色に光りながら、ウィルのポケット

に入っていた木箱の中へと消えていった。

そして木箱の示した2番目の啓示はこうだった。

持てる知性出されるべし
鍵 古より伝承されしものの中にあり

そして、さつき確かにアンナおばは言った。

ローズの言つ通りだ。
確かに近づいて行つてはいる！

ローレイとローズが何か言つてはいる横で、ウィルは少しだけ表情を緩めた。

読んでくださいてありがとうございます！

外はひどい雨だった。

馬車のカーテンの下から雨が入り込む。
隙間風も容赦なし。

甘く見ていた。

馬車の旅がこんなにつらいとは全く思いもしなかった。
外で風が「ごうごう」と唸っている。

道はハレの言つた通り、整備されておらず、ガタガタしているらしく、馬車もそれに合わせてゴトゴトと音を立てて大きく揺れた。

馬車の揺れる音

風と雨の音。

4人はぐつたりと、この上なく不快なアンサンブルを聞いていた。

馬車が揺れるせいで体が痛い上に、隙間風のせいですごく寒い。
あの海賊船での悪夢が再来したようだ。

「ま……とりあえず安全な状況にあるだけいいよね？」

ウィルは他の3人にというよりも自分に言い聞かせるように言った。
ずっと寒さに震え続ける自分を励ましたかったのだ。

「安全？」

ローズの食つてかかるような声が返ってきた。

ローズは顔を紅潮させ、手を絶え間なくこすり合わせている。
その表情から、不機嫌さがマックスであることが窺える。

「この風の音が聞こえないの！？ いつ馬車が横転するか分かったもんじゃない。それに何この寒さ！ 凍死にしそうよ！ こんな乗り心地の悪いボロ馬車が存在するなんて知らなかつたわ」

「それは君がお嬢様育ちだからだるー！」

「ウィルはめずらしくローズに反撃した。

いつもは怖いし、10倍になつて返つて来るから、言い争いは極力避けるようにしていたが、ウィルもこの最悪な「ノンノイショーン」もと気が立つていた。

「御者的人はもつともつとつらにはずだよ。感謝しなきや……」
ウィルはカーテンの隙間から見える外の雨模様をちらりと見やりながら言つた。

周りの木々が大きく揺れていて、まるで馬車に向かつてお辞儀しているかのようだ。

「それならあんたが代わつてきてあげなさい！」

「……どこまで君は自分勝手なんだ。もとはと言えば、こんなにも早く出発しないといけなくなつたのはローズ、君のせいだろ！？
ほんと、こつちは大迷惑だよ」

「なんですつて！－ もつ一度言つてみなさい！」

「ちょっと一人とも……」

ローズと同じように頬を紅潮させたリイが背もたれにぐつたりともたれかかりながら、力なくとめに入つた。
だが「人はすぐには黙らなかつた。
しかと睨みあう。

外の轟々という風の唸り声が、一人の苛立ちに拍車をかけた。

「あんたみたいな馬鹿に非難される以上に腹立つことつてないわ」
「君ほどにお高くとまつた人、僕会つたことないよ！ やつぱりどうあがいても君は貴族なんだね。リイとはやっぱ態度とか全然違う
「……つ！」

次の瞬間、ローズの皮でできた、しかも中に水晶やらその他もろもろぎつしり詰まつたバッグが顔面に飛んできた。

「痛つ！－

「ちょっとローズ、危ないじゃない！ ウィル大丈夫？」

「あんたなんか潰れちゃ えらいのよ！ 最低！！」

ウィルは飛んできたバッグを足元にたたきつけた。

「最低なのはどっちだよ！？」

さすがのウィルもぶち切れ寸前だった。

出発時、自分たちの進歩に満足し、決意を人知れず新たにしたのもつかの間、すぐに機嫌を折られてしまった。

「おい！」

ずっと目を閉じていたローレイが口を開いた。
「どうやら寝ていなかつたらしい。

「いい加減にしろ……」

落ち着いた声だったが、殺氣を後の3人に十分に感じさせた。

ウィルとローズは互いに睨みあつたまま、口を閉じた。

ローレイを本気で怒らせてみる気力と体力は一人には残つていない。

しばらく黙つたままウィルを睨みつけていたローズだが、ふと息を大きく吐くとカー テンの隙間から外を見た。

「アクイラ…… 大丈夫かしら」

「とりあえず」

ケンカが収まつてほつとした調子のリイは、元気づけるよつと言つた。

「真夜中には山を抜けたところの村に着くつて、ハレさんが言つてたからあと1時間とちょっとくらいだと思つわ。そこで宿をとつて、ベッドにもぐりこめることができる」

「寝る前に1杯あつたかいココアが欲しいわ……」

「わざとあるはずよ」

「ところで何と言つ村つていつたかしら?」

「えと……確かサー・ペン村だったような……」

「サー・ペン村……。ああ、思いだした。多分ドムトリ子爵の領地ね

……」

ローズはぐつたりと壁にもたれかかりながら、疲れた調子で言った。

「貴族の土地なの?」

ローズとはしばらく口を聞くまいと心に決めていたウイルだが、好奇心は抑えることはできない。

「ええ。シャーンティヒ宮殿の周りには貴族たちの家が立ち並んでて、さらに海岸の方へ行くと主に平族の村が広がっているわ。まあオーラムステラ島の8割は貴族に所有されてる。王族はずつと貴族の権勢を落とそうとしたけど、なかなか成功しなかったのはそのせいでもあるわ」

「8割も……」

「貴族はもとは王家だった者や素晴らしい働きをしたことで勲章とかをもらった者の子孫にあたるのよ。もとは他の族にもひけをとらない優秀な人たちがいたのよ。ただ子孫まで優秀で賢人とは限らない……」

「……」

「とりあえずドムトリ子爵は警戒するにあたらない人だと思つわ。何度かパーティで会つたけど、ほおつとしてる脳なしだつたわ。その娘は根の曲がった高慢ちきの馬鹿女だつたけど……」

平静でもローズの口の悪さは変わらない。

ウイルは思わず苦笑した。

そして考えた。

ローズは家を飛び出すまでどんな生活をおくってきたのだろう。欲しいものは何でも手に入れることのできる、満ち足りた生活だったはずだ。

なのにどうして、飛び出したりしたのだろう。

。アーティスト

馬車が揺れる。

温かくて甘ったるい一杯のココアまで、もつしの辛抱だ。

読んでくださってありがとうございます！
よろしければ励みになりますので、感想等よろしくお願いします^

馬車は一軒の宿屋で止まつた。

「わしは」の近くに親戚が運営している酒場がありますんでそこに
行きますわ」

髪も髭もすっかり白くなつていていた御者は、快活に言つた。
年の割にはかなりタフらしい。少なくともウィル達よりはシャキつ
としていた。

激しい風や雨にもろに打たれていたはずではあるが。

ウィル達は十二分にお礼を言つた後、御者と別れた。

「いらっしゃー」

威勢のいい声で迎えてくれた、宿屋の主人は気さくな人だつた。一
見団体がでかく怖そうな人だつたが、客に対し口を大きく開いて笑
つて答える。白いハチマキを頭にまいており、客たちからは「ハチ
マキの旦那」とか「ハチさん」と呼ばれていた。

宿屋の中は明るく、外とは違つてとても明るい。多くの人でにぎわ
つており、外の不快な音もここでは小さなノイズとなつてしまふ
えない。

「ほらよー、ココア4つお持たせーー！」

ウィル達は酒を飲んだり騒いだり歌つたりしてゐ人々の声を聞きな
がら、温かいココアを一杯飲み、その後4人とも言葉少なげにベッ
ドへと向かつた。

4人とも疲れきつていた。

「ちよっとー、いつまで寝てんのよー、起きなセー。」

次の日、もうすぐお昼といつも、ウイルはローズにたたき起された。外はまだ激しい雨が降っている。少し肌寒い気温だ。

目をこすりながら、何かぶつぶつ文句言っているローズの後をついて階下へ降りると、ローレイとリイは遅めの朝食をとつていていた。

「おお、最後の寝坊客様が降りてきなせつた」

ハチマキのおじさんが元気よくウイルに挨拶をした。何やら密と話していたらしく、カウンターに座つてゐる。ウイルが挨拶を返すと、立ち上がりカウンターの裏に回つてコンロの鍋に火をかけた。

「お寝坊客さん、朝食はダーミージョウでいいかね？ おいしいぞ」大きな器にたっぷりと注がれたダーミージョウは、ウイルが今まで見たことのないお粥だつた。お粥の中には大きめにきられた鶏肉が入つており、白ネギと生姜が上に添えられている。鶏肉をつけるためのタレも、小さな容器に入つて隣に添えられていた。

湯気がたつており、おいしそうなおいが鼻孔をくすぐる。

ローレイとリイも寝ぼけ眼ながらも、同じものを口に運んでいた。

「ローズはもう朝食とつたの？」

ウイルはスプーンを手に取りながら聞いた。白い陶器でいたスプーンだ。ピンクの花が描かれている。

「ええ、とつく。だいたい何時だと思つてゐの？ー、寝坊するに

も程があるわ！」

「だつて昨日すゞく疲れて……。まだ体のあち……！」……ホフ、熱

！ あちこちが痛つ……ハフって……」

「食べながら話さない！」

「はひ……ハフつ……」

熱いお粥をやつとゴクリと飲むとウイルは、すぐにオーナーの方を振り返つた。

「ハチマキのおじさん、これすゞくおいしい！ こんなおいしいお粥初めて食べたよ！」

宿主は嬉しそうにニーっと笑つた。

「そうかそうか！ それはよかつたあ。こんな雨の激しく降る朝は冷えるからな、お粥がぴつたりなんさよー！」

ふいにローズが横から耳を引っ張つて、ウイルの顔をテーブルに戻す。

「いいから早く食べなさい！ 話すことがあるんだから……」

「……はい」

ウイルが再びお粥を食べ始めるが、ローズはため息をついた。

「食べながらでいいから3人とも聞いて！ この村に一番詳しいのは私だと思うから。昔家族と一緒に観光にきたことがあるし……」

「こんな辺鄙な村にか？ 伯爵様御一行が何の用事で？」

すっかりお粥をたいらげたローレイがスプーンを置きながら聞いた。

ローズはきつとこりみつける。

「観光と言つたでしょ？ それにその言い方、癪に触るわ、やめてちょうどだい。この村は別名蛇道村とも言つ。なぜかというと、昨日少しど道の形を見たなら分かると思うでしそうけど、この村は小さくて古い建物がクネクネと曲がってる道に沿つて所狭しと並ん

である。その建物の並びと並びの間が蛇みたいにクネクネに並んでる
か蛇道村つていうのよ」

「……単純だな」

「まあ、それはいいとして、今日私は、あなた達と違つて、朝早めに起きて新聞を買いにちょっと出かけたわ」

そこでローズはテーブルにポンと新聞を投げ置いた。花の月96日。あと4日で海の月がやつてくる。

「この天気予報によると、今日夕方以降は雨がやむみたい」

「ウィルがにらむように窓の外を見た。

「とてもそうは見えないけどね……」

「まあ、あたるかどうかは分からないわ。そこは運任せね。誰も100%の予測はできない。でも、晴れたら絶好チャンス！」

「どうこう」と？」

「ここは夕方から夜にかけて行われる有名な市場が毎日開かれてるの。あ、毎日つていうか天気が良い日は必ずつてことね」

「へえー」

「お店とお店が布で仕切られた特徴的な市場でね、もともとせまい路地であるのも手伝つて、かなり混雑するわ。だけど、いろんなものが手に入るの！ 売られるのもさまざま」

リイが頷きながら口を開いた。

「私も一度聞いたことがあるけど、本当にいろんなものが売られてるらしい。それも安くでね」

「そう、売り方も特徴的なのよ。お客はその市場では値切るのが常識なの。商品に値札は一切ついてないわ。お店の人人が最初に言った値段を値切つていくのがそこのお客の主流」

「確かに特徴的だな」

ローレイが腕組みをしながら言った。

「普通の店で値切るということは行われなくもないが、値切るのが主流とまではいかない。値札はたいてい貼られてるし……。それに布で仕切られてるって言うのも」

「そう一時的なお店だからね。布と机だけでできたお店だから、誰でも簡単にお店が開けるってわけ。店開く側も客も仕事終わってくる感じなのよ。まあそれが起因していろんな人が店開けるから、当然いろんな商品があるってことなのよ」

「それじゃ、僕たちがいろいろ買い物するのにぴったりって……」ホツと?」「

最後の一 口を頬張りながらウイルは聞いた。

ローズがコクつと頷く。

「そういうこと…」

力チャンとウイルはスプーンをテーブルに置いた。

「それじゃ、決まりだね」

「必要な物をそれまでにリストアップ、そして外出の準備をしなきやね」

ローズはそう言いながら、立ち上がった。

「どこ行くの?」「

「部屋に戻つてペンとメモ帳をとつてくるの。あんた達はその食器片付けてもらつてなさい……」

ローズはきびきびとした調子で階段を上り、階上の自室へと向かった。

数秒の静止。

残された3人はぽかつと口を開けてローズの後ろ姿を見守つていた。ふいにウイルが小さく咳払いをし、リイに問いかけた。

おもしろさ半分、恐ろしさ半分といった面持ちで。

「どうしたの? ローズ。僕達が見てない時に、なんか変なものでも食べたんじゃないの?」

見ると、リイは二口二口笑つている。

「あれでもね、责任感じてゐるよ。だから少しでも役に立つと思つてゐるんぢやないかしら」

一
責
任
？
」

「そ。自分のドタバタに巻き込んだじゃつたつていう責任」「へえー」

ヘテロ

驚くウイルの横でローレイがぼそりとつぶやく。

「分かりにくい女」

リバはケンブーと笑った

「やうだ、お密せん達」

「モーリー ホワチャ一を飲まんかね？ おいしいお茶なんさよ。まだやわらかい茶葉を摘んだやつだから、香りも味もいい。体にも当然グッズだ」

「「「ぜひ頂きます！！」」

読んでくださいてありがとうございます

「すつごい人だなあ」

ウイルは辺りを見回しながら言った。
クネクネと曲がった狭い路地なのに、次から次へと人が流れ込んでくる。

「もう少しで市場につくわ！ はぐれないうにね」

ローズは白い紙を覗き込みながら言った。

先程ハチマキのおじさんに描いてもらつた地図だ。

「はぐれないのって無理なんじゃない？」

傍の人に押されてローズから離されながら、ウイルは大声で言った。
周りの雑音が煩く、大声を出さないと届きそうにない。

「ちょっとはぐれないでって言つてるでしょー？」

地図から目を上げたローズの一聲。

と同時にローズの腕がひゅっとウイルの方に伸びてきて、服を掴み
ぐいっとローズのもとへ戻した。

「しつかりして！ こんなところではぐれたら大変よ。探すのにす
ごい時間かかるわ！」

「無理だよ、次から次へと人が僕を押すんだから。それに、あのさ

……「

また視線を地図に戻しながら、ローズはいかにも機嫌悪そうに聞き返した。

「何よ？」

ウィルはそこでため息を一つつくと立ち止まり、今度は自分がローズの服を掴んだ。

「何？」

ローズが怪訝そうな顔つきでウィルを見る。

「氣づいてないようだから言つけど、後ろにひいてきてたはずなんだけど、いないんだ」

「は？」

「リィとローレイ」

そこでローズは両手を上げて天を仰いだ。

「最低、最悪。信じられないわ。本当にについてない」

ローズの悪態は長く続いていた。

ウィルは適当に相槌をうちながら、その隣を歩いていた。

スルーが一番。

これは経験から学んだこと。

「どうしてよひこよひて、あんたと取り残されるのよ

「あーそりだね」

恐ろしく棒読みな返答。

だがローズはそんなこと気にも留めずに続ける。

「あんたみたいな愚鈍なやつと一緒にいたって、なんのメリットもないじゃない」

「うん、そうだね」

「買い物リスト、リィに預けたままだつたし……。あんた、あのリスト欄覚えてる?」

「うーん……、そうだね」

「覚えてるかつて聞いてるの、馬鹿!」

「え? あ……何を?」

「買・い・も・の・リ・ス・ト」

「少しきりこなら覚えてるよ。地図でしょ、あとは……えーといろいろ日用品?」

「あーごめん、ごめん。聞いた私が馬鹿だつたわ。ま、そうね、とりあえず地図は一番必要だから探ししましょう。しつかりしてよね、未来の王様」

あからさまに棘が入つて いる最後の一言。

ウイルはスルーすることも忘れて膨れた。

「好きでやつてるんじゃないんだ。そんな

」

「あー ほら、あそこが市場の並びの始まりねー」
ローズは少し弾んだ声で言った。

その指した指の先には、ウイルも抗議をやめて目を丸くした。

「これが市場……」

「サー・ペン市場よ。こういう形式の市場はここでしか見られないわ」

狭い路地の両脇には一定の間隔でカーテンのような布が細い棒をつたつてたらされていた。

路地の真ん中には大人2人からうじて通れるほどの隙間がある。布と布との間にはテーブルや台などが置かれてあり、なにやら商品らしき細々したものが所狭しと並べてある。

仕切りの布に網をめぐらせ商品を吊り下げたり針金でとめたりして並べてあるところもあった。

「すうじー！」

前もつて話を聞いてはいたものの、生の市場を前にするとやはり驚かざるにはいられない。

狭い路地をさらに狭くして作られた、簡易的な市場だが、人びとの活気に満ち溢れている。

「なんでもありそうだね」

「そうね。お店を開くことがここでは簡単にできるから、売る人も売り物もその種類の数は期待できると思つわ」

ウイルは早く店を回りたくてうずうずしていた。

「とりあえず、地図を探すんでしょ？ 早く店を見て回りつよー。」

好奇心で輝いてるその顔を見て、ローズはため息をついたが、あき

らめたように同意した。

「そうね。ついでにリイ達とも早く合流しないといけないわ。この市場まではローレイはともかくリイなら人に聞いたりなんたりでたどり着けるだらうから、2人を探しながら店を見て回りましょう」かくして、2人は狭い通路の人の流れに加わりながら、市場に足を踏み入れた。

「わあ、ここす」。何種類ものサングラスがあるよー。ローズ!..

ウイルの興奮は最高潮に達していた。

始めてみるものが多くすぎて、目と頭を動かすのに忙しい。

「ここは調味料がたくさんおいてあるーー。塩だけでもすごい数だー！」

当初の目的など、ウイルの頭からはさっぱり消えていた。

辺りは盛んな声が飛び交つており、左右の店員達ははしきりに行き来している客達に声をかけている。

「おい、そこの君。水晶を見ていかんかね！ 今はルクをちょっとだけいれておくための小さい水晶や貯金用の水晶、いろいろと新しいのが開発されてるんだよ」

たくさんの水晶に囲まれて座っているおじさんに声をかけられ、ウイルは足を止めた。

「へえー。すごいなあ。この大きい橢円型の水晶が貯金用？」

「ああ、そうだよ。最新型水晶を見たいかい？ まだ在庫があまりないから売らないつもりだつたんだが、特別に見せてあげるよ」

「本当にー？ ありが ぐうえつ！」

ここで当然と言つべきか、我慢の限界に達したローズの鉄拳が飛んできた。

ローズは無言だったが、その鋭い睨みが全てを語っていた。

ウイルは頭をさすりながら、素直に謝った。

「すみません。地図を探します。あとローレイとリィも」

ローズはよろしいと言つた調子で、厳かに頷くと歩を進めた。

足を止めて中をじっくりみたいという欲求を抑えながら歩いてると、
ウイルの視界に本がたくさん置いてある店が飛び込んできた。

「ローズ、あそこに地図ありますじゃない」

「モハネ……置いてみま
「ローズ！ ウオレット！」

九月三十日

見ると、リイとローレイが店の奥にいた。

「……にいたら、会えると思って。よかつたわ！ ごめんね、一人とも。はぐれちゃって」

「ううん、いいのよ、リイ。」Jの馬鹿が悪いんだから

いきなり指されて、ウイルは驚いた。

「それより見つかったの？ リイ？」

「地図か？」

答えたのはローレイだ。

同時に右手を上げる。

その手にはくるくると巻かれた、若干古めの紙が握られていた。

「さすが。購入済みのようね」「当然だ。時間たっぷりあったからな。お前達一人は一体どこで油売つてたんだ」

「ああ。この馬鹿のせいいろいろと遅くなつたの」「だから……なんで僕のせい」

「お前さん達は旅の者かい？」

そのしげがれ声は、店主。

白髪の老女だつた。

紫の布を頭からすっかりかぶつており、ウイルは昔読んだ本に出てきた魔女を連想した。

老女は目を細めて4人を見た。

「お前達は変わってるねえ。ケヘヘ。なかなか興味深いよ

老女のじろりとした視線にかち合ひ、ウイルは身震いした。笑い方もその田つきも、ウイルは好きになれない。

他の三人も怪訝な顔をしているので、恐らく心地は良くないのだろう。

「次はどこを指すのかね？ もしかしたら、わたしゃ良い情報をもつてるかもしないよ。わたしや、こう見えても情報通でね」誰も答えようとしない気まずい沈黙が数秒流れたので、ウイルは仕方なく口を開いた。

「次は確かエコイカ・ウン島……」

「ほお。それまた、おもしろこといろいろ行くねえ」「はあ……」

「そこには今病気が蔓延してこる島だときく。隣の島から海を越えて病がやつてきたそうな」

「隣の島?」

「ポルテフラ島ですね」

横でリイが口を開いた。

真剣な眼差しで老女を見ている。

「何が起こつてゐるのか噂とかあつたりするんですか?」

「そうだね……。ケヘヘヘ」

含みのある笑いに、老女の顔がいつそう不気味さを増す。

「いいかい、ポルテフラ島は知つてゐる通り死の島。死。つまり無。無だから他に対しても影響を及ぼさない。ただ“ある”だけの島だつた。最近までは。今その島ではなぜか人の出入りちらほら見受けられるという。又聞きの話だから嘘か本当かどうかは分からぬがね」

ウイルはトムの言つていたことをぼんやりと思い出した。

「これは噂でもなく、ただの憶測にすぎないがね。歴史を繰り返そうと企む者がいるのかもしないねえ。舞台はある死の島。憶測が外れることをわたしゃ、祈るね。今度それが起きたら、ポルテフラ島だけでは済まされないださう」

ウィルは「ゴクリ」と唾を飲み込んだ。

老女はふいに台の上に無造作においてある本の山に手を伸ばすと、一冊の埃をかぶった緑の背表紙の本を取り出した。

「貴重な本だ。島の歴史が載つている。この類の本はほとんど燃やされたらしいからね。シャーンティ宮殿にあるのを除いて、世界に出回つてるのはこれを含め数冊だらう。なので、高価な本なんだがね、今なら一〇〇〇ルクで売るよ。ケヘヘヘ」

ローレイがふつと息を吐いた。

「なんだ、ただの商売話かよ……」

「どうとるかはお前達の勝手。買つか買わないかも当然お前達の勝手だがね」

「どうする？ リイ。無駄遣いはできるだけ避けたいところだけど……」

ローズが眉を潜めて、小声でリイに話しかけた。

リイは真つすぐに老女を見つめている。

しばらくローズの問いには答えず口を開きながら、ふと視線をウィルに向けた。

「ウォルト、あなたはどう思つ？~

「え……僕？」

自分に意見を聞かれるとは思つてなかつたので、ウィルは驚いた。

リイは真つすぐにウィルを見つめている。

前に船の上でも見た、何もかも見透かされてしまつよつた田で。

トムは警告した。

国の者がポルテフラ島に出入りしていると。

だから」のおばあさんの言つ蹲は本当なのだろう。

だがその後の憶測は憶測だ。

1000ルク。

いくらまだ余裕があると言つても、ローズの水晶が豊かであると言つても当然底なしではない。

でも。

ふと空から見たあの黒い島が頭の中で蘇る。

あの時すごいオーラを放つていた。

なかなか田を離すことができなかつた、死の島。

ウイルは静かに田を閉じ、しばらくしてまた開いた。

「僕は買いたい」

その答えにリイは笑みをこぼした。

「それなら、いいかしら?」

その問いはローレイとローズに向けられたものだ。

ローレイは肩をすくめ、ローズは黙つて水晶を取り出した。

銀色の液体が振動で揺れている。

4人は本を購入すると、他に必要なものを揃えるべく、その店を出た。

真上の空には既にいくつかの星が輝いている。

だがふとウイルが東の空を見ると、そこには不気味な色の雲が漂つていた。

読んでくださいてありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9117d/>

ルーテン国英雄伝 ブラックボールの謎

2010年10月9日17時36分発行